

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（211）

鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

かごしまじょうあと
鹿児島城跡
いぬおうものばば ひよけち
（犬追物馬場・火除地）

（鹿児島市山下町）

2021年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿兒島城跡（犬追物馬場・火除地）出土 加治木・始良系陶器（山元窯・元立院窯・初期龍門司窯）

序 文

本報告書は、鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴って、平成29年度に実施した鹿児島市山下町に所在する鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の発掘調査の記録です。

本遺跡では、近世から近現代にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。狭小な調査範囲にも関わらず、近世期の造成面や遺構、遺物が多く出土しました。出土した瓦や陶磁器等は、鹿児島城内の様子を示す重要な成果です。

これらの考古学的成果は、これまで知られていなかった鹿児島城の築城時の状況や城としての機能・構造を解明し、既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本報告書が鹿児島城跡の保全整備と、これまで明らかにされていなかった地域史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

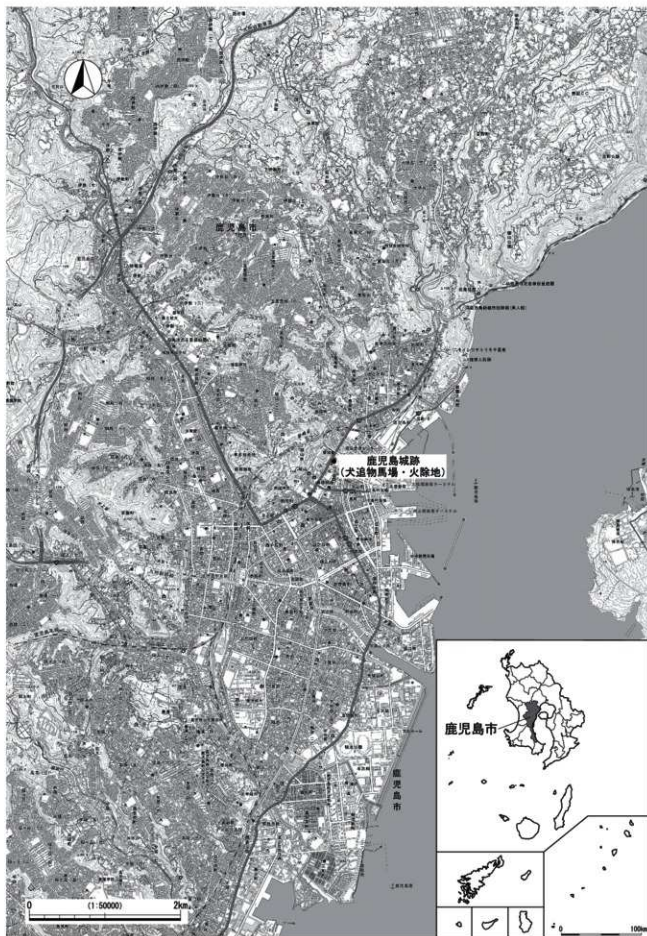
結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査にご理解・ご協力をいただいた地域の皆様、ご支援・ご協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和3年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 前迫亮一

報 告 書 抄 録

ふりがな	かごしまじょうあと (いぬおうものばば・ひよけち)							
書 名	鹿児島城跡 (犬追物馬場・火除地)							
副 書 名	鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	211							
編 著 者 名	黒木梨絵							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
かごしまじょうあと 鹿児島城跡 いぬおうものばば (犬追物馬場・ ひよけち 火除地)	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 やましたらう 山下町	46201	201-411	31° 36' 01.22"	130° 33' 21.85"	20171204～ 20180223	200	鹿児島第3合同 庁舎整備事業に 伴う埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
鹿児島城跡 (犬追物馬場・ 火除地)	散布地	中世	杭列		中国陶磁器・国産陶器 (備前) 杭			
		近世	溝状遺構 3条 土坑 2基 柱穴群 杭列 瓦溜		土師器、瓦質土器 中国陶磁器、国産陶磁器 (肥前・ 薩摩・志野・瀬戸)、琉球陶器 瓦 (平・丸瓦、軒丸・軒平瓦、 陶器瓦、鬼瓦等) 木製品 (杭、下駄、部材、漆器)、 キセル、硯、獣骨・獣歯			
		近代	凝灰岩建物基礎 (知業)		エンフィールド銃弾 土管・陶磁器等			
遺跡の概要	<p>本遺跡は鹿児島城御樓門正面 (本丸) に位置する。中世～近代の複合遺跡である。</p> <p>特に近世期が主体で、近世の包含層が4面確認された。近世最上層のⅢ層 (砂層) からは、遺構が確認されなかったが18世紀後半以降の遺物が出土した。Ⅳ層は、大量の焼土・炭化物・漆喰片を含む造成面で、層位・遺物・文献から、元禄9 (1696) 年の大火の処理層であることが明らかとなった。この層は、正徳3 (1713) 年にこの地を火除のための明地 (火除地) に相当する。</p> <p>その下位のⅤ層面からは多くの遺構が検出された。近世最下層 (Ⅵ層) では、本丸に垂直方向に延びる溝状遺構に伴う六角形の杭列が検出された。この杭列は、本丸前に設置されていた犬追物馬場の柵列の可能性が高いことが明らかとなった。なお、Ⅴ・Ⅵ層は17世紀後半～18世紀前半の遺物が主体である。</p> <p>本遺跡最下層のⅦ層からは、湧水する砂層から中世に相当する杭列が本丸に平行した状態で2列検出された。鹿児島城築城以前の姿を知る重要な成果である。</p> <p>調査の成果から、本遺跡が中世～近世にかけて鹿児島城築城以前～廃城となる近代までの状態が良好に残存していること、鹿児島城内の変遷が追える重層的な成果が得られている。</p>							



鹿児島城跡（大迫物馬場・火障地）位置図（S=1：50,000）

例言・凡例

- 本書は鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本道跡は鹿児島市山下町に所在する。
- 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 発掘調査は平成29年度に実施し、整理・報告書作成作業は令和2年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 遺物注記等で用いた記号は「HY」である。
- 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 調査区を5m間隔のマス目（グリッド）で区切った鹿児島城跡の調査グリッドを使用した。鹿児島城跡のグリッドは御角櫓南東角を基準として東（国道10号線）側の石垣に平行に軸及びグリッドを設定している。
- 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 遺構図等の作成及びトレースは黒木梨絵が会計年度任用職員（整理作業員）の協力を得て行った。
- 遺構名については調査時に遺構名を付与後、欠番にしたものがある。また、報告書掲載のため便宜上新たな遺構名を付与し、掲載番号とした。下表を参照

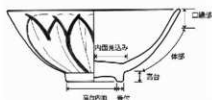
遺構名新旧対応表

旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名
SD1	SD2	SX1	SX1
SD2	SD3	SX2	SX2
SD3	SD1	SX3	SX3
SK1	SK1	SX4	SX4
SK2	SD2	SX5	SX5
SK3	欠番	SX6	SX5
SK4	SK2	SX7	SX6
P32	P1	SX8	SX7
P33	P2	SX9	SX11
P34	P3	SX10	SX8
P35	P4	SX11	SX9
P36	P5	SX12	SX10
P37	P6	SX13	SX11
P2	P7	SX14	SX11
瓦溜1	瓦溜2	SX15	SX12
瓦溜2	瓦溜1		

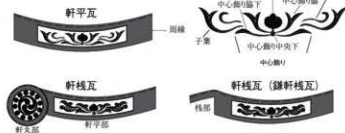
- にされたい。なお、原資料（図面・遺物・写真等）の注記には、調査時の旧遺構名で記載されている。
- 出土遺物の実測・トレースは、黒木が会計年度任用職員（整理作業員）の協力を得て行った。
- 陶磁器の実測は、(株)イビソクに一部委託した。
- 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。基本的に瓦は $S=1/4$ 、陶磁器は $S=1/3$ とした。
- 本書で用いた陶磁器の表現は右図のとおりである。
- 本書で用いた瓦の部位の名称、計測部位は右図のとおりである。
- 遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合は（ ）で記している。
- 出土遺物の写真撮影は、西野元勝・鯨島えりなが行った。
- 本書に係る自然科学分析は、炭素年代測定・樹種同定は（株）古環境研究センターに委託し、漆器の樹種同定は東都文化財研究所に委託した。
- 木製品は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保存処理を行い、一部脆弱品等については東都文化財研究所に保存処理を委託した。
- 発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記を用いた。また、土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帖』に基づき、掲載した。
- 観察表に記した胎土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』のマンセル記号で表記している。
- 観察表に記した陶磁器の釉色は『標準色カード230』（いずれも日本色研事業株式会社発行）で表記している。
- 本道跡は通称「鶴丸城」と呼称される場合もあるが、他の機関等で使用している場合等を除き、本書では文献にある「鹿児島城」を使用する。
- 本道跡の調査時の遺跡名称は「火除地跡」であったが、調査成果から令和2年度に「鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）」と名称を変更した。
- 本書の編集は黒木が担当し、執筆分担は下記のとおりである。
 - 第1～3章 黒木
 - 第4章 各分析者
 - 第5章 黒木
- 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。

凡例

陶磁器部位



軒平瓦・軒棧瓦(軒平部)文様

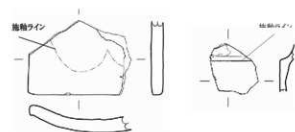


軒丸瓦文様

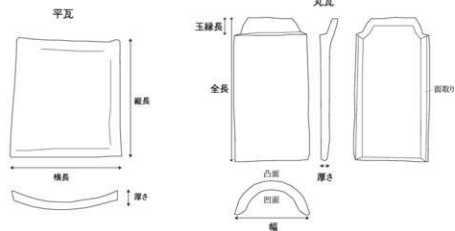


小菊瓦文様

陶器瓦



計測部位



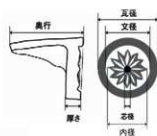
軒平瓦



軒丸瓦



小菊瓦



本文目次

<p>第1章 発掘調査の経過 1</p> <p>第1節 調査に至るまでの経緯 1</p> <p>第2節 調査の体制と経過 1</p> <p>第3節 整理・報告書作成 2</p> <p>第2章 地理的・歴史的環境 3</p> <p>第1節 地理的環境 3</p> <p>第2節 歴史的環境 3</p> <p>第3章 調査の方法と成果 10</p> <p>第1節 調査の方法 10</p> <p>第2節 層序 10</p> <p>第3節 中世の調査成果 12</p>	<p>第4節 近世の調査成果 12</p> <p>第5節 近代以降の調査成果 44</p> <p>観察表 53</p> <p>第IV章 自然科学分析 60</p> <p>第1節 樹種同定 60</p> <p>第2節 樹種同定・年代測定 62</p> <p>第V章 総括 69</p> <p>写真図版</p>
--	---

挿図目次

<p>第1図 調査範囲 1</p> <p>第2図 調査範囲 2</p> <p>第3図 鹿兒島城下絵図 近世期 6</p> <p>第4図 鹿兒島城下絵図 近世～近代以降 7</p> <p>第5図 畷趾跡位置図 8</p> <p>第6図 土層断面図 11</p> <p>第7図 V層検出遺構配置図 13</p> <p>第8図 V層出土遺物・枕列 枕1 13</p> <p>第9図 V層枕列 枕2 14</p> <p>第10図 V層遺構配置図 15</p> <p>第11図 柱穴 (P1・2) 15</p> <p>第12図 柱穴 (P3～7) 16</p> <p>第13図 P2・4・5出土遺物 17</p> <p>第14図 SD1 18</p> <p>第15図 SD1出土遺物1 18</p> <p>第16図 SD1出土遺物2 19</p> <p>第17図 SD1出土遺物3 20</p> <p>第18図 SD1出土遺物4 21</p> <p>第19図 SD1出土遺物5 22</p> <p>第20図 SD1枕列 23</p> <p>第21図 SD1枕列 枕1 23</p> <p>第22図 SD1出土枕・木製品 24</p> <p>第23図 SD1出土木製品 25</p> <p>第24図 V層瓦溜1出土遺物 26</p> <p>第25図 遺構配置図 (V層面検出) 27</p> <p>第26図 SD2 27</p> <p>第27図 SD2出土遺物1 28</p> <p>第28図 SD2出土遺物2 29</p> <p>第29図 SD3 30</p> <p>第30図 SD3出土遺物1 30</p> <p>第31図 SD3出土遺物2 31</p> <p>第32図 SK1 32</p>	<p>第33図 SK2・出土植板 32</p> <p>第34図 SX1～6 断面図 33</p> <p>第35図 SX7～12 断面図 34</p> <p>第36図 SX7出土遺物 35</p> <p>第37図 SX2～4・6出土遺物 36</p> <p>第38図 SX7出土遺物 37</p> <p>第39図 SX8・10～12出土遺物 38</p> <p>第40図 瓦溜2出土遺物1 39</p> <p>第41図 瓦溜2出土遺物2 40</p> <p>第42図 V層出土遺物 41</p> <p>第43図 IV層出土遺物1 42</p> <p>第44図 IV層出土遺物2 43</p> <p>第45図 II層検出磁灰岩布地室 (建物基礎) 44</p> <p>第46図 III層出土遺物 (T2) 45</p> <p>第47図 II層出土遺物1 45</p> <p>第48図 II層出土遺物2 46</p> <p>第49図 I層出土遺物1 47</p> <p>第50図 I層出土遺物2 48</p> <p>第51図 I層出土遺物3 49</p> <p>第52図 I層出土遺物4 50</p> <p>第53図 I層出土遺物5 51</p> <p>第54図 鹿兒島城跡の木材I 61</p> <p>第55図 鹿兒島城跡の木材2 62</p> <p>第56図 年代測定結果 65</p> <p>第57図 暦年較正年代マルチプロット図 66</p> <p>第58図 鹿兒島城跡の木材I 67</p> <p>第59図 鹿兒島城跡の木材II 68</p> <p>第60図 土地利用変遷図 70</p> <p>第61図 SD1枕列復元配置図 71</p> <p>第62図 道路残存範囲 72</p>
--	--

表目次

<p>第1表 鹿兒島城下の主な火災関連年表 5</p> <p>第2表 畷趾跡一覧表 9</p> <p>第3表 基本土層 10</p> <p>第4表 近世の遺物1 (陶磁器) 33</p> <p>第5表 近世の遺物2 (陶磁器) 54</p> <p>第6表 近世の遺物3 (陶磁器) 55</p> <p>第7表 近世の遺物4 (陶磁器) 56</p> <p>第8表 近世の遺物5 (陶磁器) 57</p>	<p>第9表 近世の遺物6 (土師器・瓦質土器) 57</p> <p>第10表 近世の遺物7 (金属製品・石製品) 57</p> <p>第11表 近世の遺物8 (木製品) 57</p> <p>第12表 近世の遺物9 (瓦) 58</p> <p>第13表 近世の遺物10 (瓦) 59</p> <p>第14表 鹿兒島城跡の樹種同定結果 60</p> <p>第15表 鹿兒島城跡における樹種同定結果 64</p> <p>第16表 鹿兒島城跡における放射性炭素年代測定結果 64</p>
---	--

写真図版

<p>写真図版1 調査写真1</p> <p>写真図版2 調査写真2</p> <p>写真図版3 調査写真3</p> <p>写真図版4 調査写真4</p> <p>写真図版5 調査写真5</p> <p>写真図版6 調査写真6</p> <p>写真図版7 近世遺物1</p> <p>写真図版8 近世遺物2</p>	<p>写真図版9 近世遺物3</p> <p>写真図版10 近世遺物4</p> <p>写真図版11 近世遺物5</p> <p>写真図版12 近世遺物6</p> <p>写真図版13 近世遺物7</p> <p>写真図版14 近世遺物8</p> <p>写真図版15 近世遺物9</p>
---	--

第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

鹿児島第3合同庁舎整備事業対象地は、「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」（鶴丸城御楼門建設協議会、鹿児島県：平成28年3月）で、鹿児島城域内に指定されている。これを受け、国土交通省九州地方整備局（以下九州整備局）と鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）は事業対象地の取扱いについて事前協議を行い、事業予定地の遺跡の有無とその内容の把握のため、文化財保護法99条に基づいて平成28年5月24日に県文化財課が試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、2か所設定したトレンチの内、1か所から近世の遺物が出土したことから、県文化財課は事業予定地を周知の埋蔵文化財包蔵地とした。

試掘調査結果をもとに九州整備局・財務省九州財務局と県文化財課が再度協議を行い、発掘調査を実施することとなった。発掘調査については、鹿児島市教育委員会と県文化財課の協議の結果、県立埋蔵文化財センターが

本調査を実施することとなった。

調査を実施するにあたり、事業主体の九州地方整備局と鹿児島県が鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。本調査の当初計画は、調査面積360㎡であったが、地下埋設物や調査期間中の安全面を考慮し、200㎡の調査を実施した。

調査期間は平成29年12月4日（月）～平成30年2月23日（金）（実働44日）である。

第2節 調査の体制と経過

1 試掘調査

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局 営繕部

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査担当 県教育庁文化財課

主任文化財主事兼埋蔵文化財係長 寺原 徹

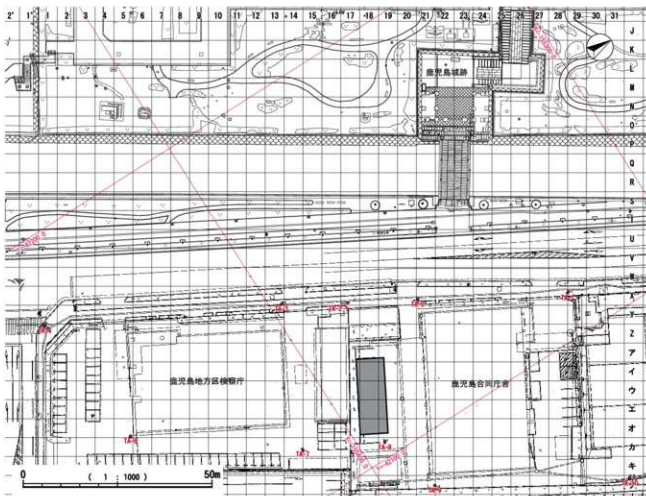
文化財研究員 阿比留士朗

鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 永瀨 功治

文化財研究員 西野 元勝

調査協力 鹿児島市教育委員会



第1図 調査範囲

	主幹兼文化財係長	内山 伸明
	指導主事	新保 朋久
立会者	財務省九州財務局鹿児島財務事務所	
	総務課長	大和 誠五
	合同庁舎管理係長	小田 輝美
2 本調査		
平成29年度		
事業主体	国土交通省九州地方整備局	営繕部
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	堂込 秀人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	高田 浩
	第一調査係長	中村 和美
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	樋之口隆志
	文化財研究員	黒木 梨絵
事務担当	総務課主事	丸野 将輝
調査指導	鹿児島国際大学 教授	太田 秀春
	東北芸術工科大学 教授	北野 博司

3 調査の経過

平成29年度

11月 環境整備、アスファルト除去、表土除去

12月 調査区1 I層掘り下げ、近現代建物基礎（セメント）、近代建物基礎跡（凝灰岩地殻）検出、近現代建物基礎除去、II層掘り下げ

1月 調査区1 II・III層掘り下げ、IV層遺構検出、遺構調査、遺物取り上げ、実測、V～VII層掘り下げ、一部下層確認、調査区1埋め戻し

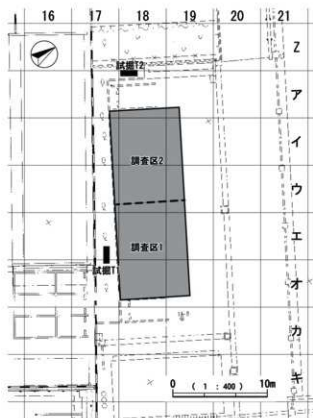
2月 調査区2 I層掘り下げ、近現代建物基礎（セメント）、近代建物基礎跡（凝灰岩地殻）検出、近現代建物基礎除去、II・III層掘り下げ、IV層遺構検出、遺構調査、遺物取り上げ、実測、測量委託、V～VII層掘り下げ、一部下層確認、調査指導、調査区2埋め戻し

第3節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業にあたり、事業主体の九州地方整備局と鹿児島県が鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、令和2年度に県立埋蔵文化財センターで行った。

整理・報告書作成作業として、出土遺物の水洗い、注記、包含層遺物の仕分け、接合作業、遺物の実測、図面のトレース・レイアウト、遺物写真の撮影、原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

なお、遺跡名については、県文化財課と協議し、調査成果に併せて「鹿児島城跡」（犬追物馬場・火除地）」と名称変更を行った。



第2図 調査範囲

1 作成体制（令和2年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局	営繕部
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長	野間口 誠
	調査課長	中村 和美
	主任文化財主事兼第一調査係長	三垣 恵一
作成担当	文化財主事	黒木 梨絵
事務担当	総務課主査	新穂 秀貴
整理指導	鹿児島大学法文学部 教授	渡辺 芳郎

報告書作成指導委員会

令和2年6月11日

中村課長ほか7名

令和2年8月7日

中村課長ほか7名

令和2年10月6日

中村課長ほか7名

令和2年11月4日

中村課長ほか7名

報告書作成検討委員会

令和2年11月10日

前迫所長ほか6名

第二章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）は鹿児島県鹿児島市山下町（現鹿児島第3合同庁舎内）に位置する。城山の麓で、鹿児島城跡御樓門のおおよそ正面に位置しており、御樓門との間には国道10号線が走る。

遺跡は城山東南部の標高約4mの低地部に立地しており、城山台地（シラス台地）の麓の小段丘から海に向けての沖積地にある。

遺跡が位置する鹿児島市は、シラス台地と低地部に分けられる。シラス台地は100～200mの標高で広がっており、市北東部は200～400mの急崖が鹿児島湾に接している。市の西部から南部にかけては、薩摩半島を南北にはする南薩台地から東の鹿児島湾側へ緩やかに傾斜し、丘陵部から低地部が形成されている。市の低地部は、シラス台地を浸食する狭い谷や舌状の台地、独立丘陵等の様々な変化に富んだ地形を有し、鹿児島湾へ注ぐ甲突川、田上川、稲荷川、永田川等の中小河川によって形成された沖積地である。

鹿児島城跡周辺の標高は城内本丸（黎明館）が約11m、御樓門橋から御樓門に入る位置が標高約5m、遺跡は標高約4mの低地部に立地しており、東側へ鹿児島湾に向けて傾斜する地形に位置している。

第2節 歴史的環境

1 絵図・文献等から見る土地利用変遷

遺跡が位置する場所は、現存する鹿児島城の絵図で最も古いとされる寛文10（1670）年『薩藩御城下絵図』では「犬追物馬場」と記されている。

狩野常信（寛永13（1636）年～正徳3（1713）年）筆とされる『常信筆薩藩御城下ノ景』では御樓門前の南側には、木柵が見られ、北側には屋敷が描かれている。

明和4（1676）年の久保之英の『見聞録記』付図の本丸・二之丸前の屋敷配置付図では御樓門前の土地は柵に囲われ、「御大垣」として描かれている。

元禄9（1696）年の大火後の被害状況を記した『鹿児島城絵図控』では、「明地」とされ二之丸前や周辺の侍屋敷は「焼失・焼残」と記されている。

火除地の設置を幕府に願い出た際正徳3（1713）年『正徳三年御城下絵図』では、御樓門前は「明地」となっており、二之丸前の侍屋敷とされた範囲は、朱線で囲われ、火災で焼失し「明地」とする旨が朱字で記載されている。

宝暦6（1756）年『薩摩国鹿児島城絵図』では樓門前から二之丸前まで広い範囲が「明地」となっており、正徳3年の「火除地の設置」の文献記載と合致している（後に詳述）。

また、加治木島津家屋敷・小松家屋敷の東側には、広小路が設けられ、火除地としていることが窺える。

文政4（1821）年『鹿児島御城下明細図』では、明地（空地）には階段が見られ、「下馬」と記載されている。火除地とされていた二之丸前の明地には、屋敷が建設されており、城に隣接する火除地は御樓門前の土地のみとなっている。

天保14（1843）年『天保年間鹿児島城下絵図』、嘉永7（1854）年『府城南面屋形前之圖』では火除地北側には「下乗札」「下馬札」「馬屋」「芝」などの記載が見られる。

また『府城南面屋形前之圖』では火除地と御樓門前は斜面になっており、立地的に一段低いことが分かる。火除地南側は斜面上に歩道、北側は階段が見られる。下馬札や馬も描かれていることから、当地は登城の際の下乗・下馬場として使用されていたことが窺える。なお、これらの絵図からは火除地の北側に隣接する建物には供屋や御木屋ノ間、足軽居所があったことがわかる。

明治3（1870）年には、鹿児島城下一帯は官有地化され、火除地跡には鎮西鎮台第2分営の練兵所が設置された。この際に、下馬札を御樓門下練兵場境上並と御軍神社下の東脇へ建て直して新たに作り直すこととし、存城時の下乗札はすべて取り除かれている（『知政所達書』）。

明治5（1872）年に撮影された古写真には、御樓門前は斜面になっており、草地が広がった低い土地であることがわかる。

明治10（1877）年の西南戦争の際には、薩軍は練兵場から出陣した。明治25（1892）年の『改正鹿児島縣誌略』では、「練兵場ハ病院ト造士館ノ前ニ連レル、一面ノ平地ニシテ亦陸軍省ノ所轄ニ属ス、今ハ馬將ヲ設ケテ毎年競馬アリ」と記されており、明治18（1885）年にも練兵場で競馬が開催された記録がある。

明治26（1893）年に鹿児島市上村慶吉市長は第六師団監督部長曾山庸との間に、鹿児島市立高等小学校的の用地について賃借契約を取り、旧練兵場の一部2,620坪9合を向こう満30年官借地料無料で借りることとした（鹿児島市1916）。

用地を確保できたことにより、明治27（1894）年には、旧垂水・宮之城島津家屋敷跡に鹿児島県立鹿児島市立高等小学校的が設立され、旧練兵場跡地には鹿児島市立高等小学校的が設置された。明治33（1900）年には鹿児島女子高等小学校的が鹿児島市立高等小学校的の南側に開校した。

明治34（1901）年鹿児島城跡に第七尋常学校造士館が創立され、旧二之丸前も師範学校が立ち並び、明治以降、山下町一体は多くの学校が立ち並ぶ鹿児島市の教育の中心地となった。

大正3（1914）年の桜島大正大噴火では「女子高等小学校的其他の石垣は慘憺たる残骸壘々として他に煙突の崩壊せるものは殆ど全部と云ひても差支へなき位倒壊せる

(「鹿児島朝日新聞記事」)とあり、山下町一帯の学校も大きな被害にあっていて、大正4(1915)年には、鹿児島高等小学校は鹿児島尋常高等小学校と改称し、鹿児島女子高等小学校は鹿児島女子尋常高等小学校と改称した。

第二次世界大戦中には、鹿児島市内大空襲により、山下町も大きな被害を受け、建物等が壊滅した。戦後の復興により、昭和42(1967)年に鹿児島第3合同庁舎が建設された。

2 犬追馬場

鹿児島城の御楼門前の土地は、城下の変遷とともに変化していることが絵図等から確認されている。

特に御楼門の土地は、慶長～正徳3年まで「犬追物馬場」として利用されていたが、元禄9(1696)年の大火の被害により、本丸・二之丸前の土地は区画整理され、正徳3(1713)年に一帯を火除のための明地(火除地)としたことが絵図・文献等から読み取れる。

元禄大火以前に利用されていた「犬追物馬場」については、前述したとおり寛文10(1670)年「薩藩城下絵図」にみられる本丸前の「犬追物馬場」の記載と土地境の欄の表現、慶長～正徳年間の様子を描いた久保之英「見聞秘記付図」の「御犬垣」、17世紀後半の変を描いたと考えられる「常信華陽閣御城ノ景」に描かれている木柵から確認することができる。

安永2(1773)年には聖堂の創設のため、「御城下柵垣伐除、広小路ニ可仕皆被御渡其通伐除、御犬垣迄取除、広小路ニ罷成候」(「三州御治世要覽」とされ、正徳3(1713)年の明地(火除地)として整地された後にも、「御犬垣」と云われていたことがわかるが、この時期に犬追物を行った記録は残っていないため、馬場として利用されていたかは不明である。

3 犬追物について

前述した犬追物馬場で行われた犬追物は、笠懸・流鏝馬とあわせて「馬上の三つ物」といわれ、鎌倉時代以降に武士の鍛錬として行われた馬術武芸である。

馬場内に犬を放ち、その犬を馬より射手が射ること、実践的な馬術・弓術の修練とした。

南北朝期以降に盛んになったが、鉄砲伝来後に馬術よりも砲術に戦法が変化したこともあり、犬追物は衰退したが、江戸期に入っても島津氏は行い続けた。

寛文10年の(1670)年「薩藩御城下絵図」には鹿児島城本丸前の方形地割に、欄に囲われた「犬追物馬場」が描かれている。

慶長年間には18代家久が行っており、19代光久は正保4(1647)年に武蔵国王子原で将軍徳川家光を招いて犬追物を催し、これ以降、島津のお家芸として知られるようになった。

光久以降は、20代綱貴が(天和元(1681)年)行った

後は、一時的には衰退したが、25代島津重豪が安永2(1773)年に演武館内に犬追物稽古場を創設し再興した。安永4(1775)年には演武館内の馬場で張行された後は、幕末までこの馬場で行われた。

29代忠義は犬追物に非常に関心を持ち、明治12(1879)・14(1881)年に2度も明治天皇の前で張行した(於東京吹上御苑・麻布島津邸)。

また、明治24(1891)年には、鹿児島を訪れたロシア皇太子ニコライⅡ世に犬追物を張行したことを最後に、明治30(1897)年に忠義が没すると犬追物は催されなくなった(松尾1988・1990)。

4 鹿児島城下の火災

鹿児島城下は存城時に多くの火災が起こっている(第1表)。度重なる火災とそれに伴う城への延焼を防ぐために城内に空地(火除地)が設置された。

城下の火災では、延宝6(1678)年4月に城下下町を全焼する火事が起こり、城下に被害をもたらした。

延宝8(1680)年1月には田尻八兵衛の屋敷からの失火で、下詰士家・御春屋・屋久蔵・下町まで全焼する火災が起こっている(田尻火事)。この火災により死者54人、類焼宅地849軒、家数3308軒が被災した。この火災は、春山へ奔りに鹿児島城下詰組詰士が出て出かけたため、城下の消火に人手が足りずに大火になってしまい、この大火以降は奔りへ輸出することは無くなった。

さらに、同年10～11月には城下で連続して火事が3回起こったため、12月には辻々々に火の番所を設け、城下の警戒を行ったようである。

元禄9(1696)年は火災が多く、4月23日の上浜町から出火した火災では、強風のため城下だけでなく鹿児島城にも延焼し、本丸(櫓門・御角櫓・焼物蔵・御兵具蔵・対面所・評定所蔵・御書院蔵・御文書蔵・居所等)と二之丸の一部が被災し、被害は城下の肝付屋敷で止まった。鹿児島城のほか、士屋敷54か所、士家数854、町屋敷203か所、一町家数550軒が被災したとされ、甚大な被害をもたらした(元禄の大火)。

城下の度重なる火災のため、正徳3(1713)年に、被災した本丸・二之丸前の区画を城への延焼を防ぐための火除のための明地(火除地)と定め、その旨を幕府に願っている。火除地のほかにも城下の要所に火見櫓等を設け、城下の防災に努めた。

火除地の設置後、城下の墓地の拡大など城下の整備が進むにあたり、城下での火災は宝暦9年(1759)の普請方の火災や安永3(1774)年に下町で大火などがあつたが、鹿児島城まで類焼する大火は起こっていないようである。

藩下においても「御城近辺出火之節心得覚書」(享保13(1728)年)などで防火体制を整えており、鹿児島城下の発展や変遷には、火災等の災害が深く関係しているといえよう。

なお、城としての役割を終えた明治6（1873）年には鹿児島（鶴丸）城本丸、御樓門が火災により焼失している。

5 火除地の設置（明地の利用）

前述したとおり、城下で火災が相次いだため、正徳3（1713）年に島津貴久は城・城下への類焼を防ぐため、火除けのために鹿児島城下下火除地を設けることとした。

「同年四月二十八日、薩府城下役座地及自二下町札辻至築地、春屋南市柳境、土之宅地降命駕空地、其後目二之九至下屋敷前、又駕空地、是駕二火除預棄幕府蒙允容也、以坤隅島津備前久遠之宅地、駕下屋敷間之中」（『追録舊記雑録卷四十八 吉貴候御書中』）とあり、「同年4月28日、鹿児島城下役座地および下町札辻より築地まで、春屋南市店境、土分の宅地を空き地とし、その後二之九より下屋敷前まで火除地とすることを幕府に申し出た。坤隅（南西隅）の島津久遠（知覧島津家）の宅地を下屋敷間いの中とする」。この届出が幕府に認められ、鹿児島城下下火除地として明地を火除地とした。

また、明和4（1767）年『見聞秘記』附園（久保之英）や明和8（1771）年『薩陽落穂集』（伊集院兼喜撰）によれば、慶長年間から正徳初期までは、二之九前には諸屋と侍屋敷が配置されていたが、元禄の大火後、犬垣（本丸正面）に接する二之九前の被災した6か所の屋敷（喜入安房・島津中務・鎌田小藤次・島津佐衛門・島津備中・佐多豊前）を召し上げて明地とした。その明地に火除地としての役割を持たせ、榎・松・杉・檜等を植栽したとされる。

その際の明地（空地）の広さについて『通昭録巻七 監察使答問抄上』によれば、「一 御下屋敷前空地之事中小路より東堅八十一間、横五十八間、同西堅百三十六間、横五十七間半」と記されている（現名山小・中央公園：約47,690㎡）。

また火除地の設置に伴って、同年10月には火除けのため、家来屋敷の建て直しについて幕府に願ひ出ている。

防災のために設置された火除地だが、安永2（1773）年には、二之九前の火除地に聖堂・医学院・造士館・演武館、諸役屋敷（御記録所・寺社奉行所・町奉行所等の役所）が創設され、城に隣接する火除地は安永年間以降には御樓門前の空地のみ（約11,320㎡）となり、縮小した（『三州御治世要覽』）。この地については、正徳年間以降も恒常的な建物がない火除地として継続して利用されていたようである。

明治3（1870）年には、『全国城郭存廢/処分並兵営地等擬定方』により、鹿児島城は堀城となり、鎮西（熊本）鎮台第二分営第六師団の練兵場が設置されたため、官有地となり、鹿児島城の火除地としての役目を終えている。

第1表 鹿児島城下の主な火災関連年表

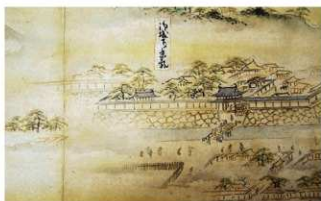
年号	西暦	主な出来事	出典
寛永16	1639	8月 鹿児島城下大元本丸「ちうじやくの御門」から「北之方之御門」まで、「北之方之御門」を「ちうじやくの御門」まで築き増した。	雑録（後編）6-47
寛永19	1642	9月 上町火除けの火災原因不明で焼失する。	古記
延宝6	1678	4月 下町御門で火災し、下町が半壊被害甚だしく焼失。	旧城記録道録1-1740
延宝8	1680	田原火事 前代本丸の大火で諸士家・御倉庫・屋敷・御本陣・御本陣前寺・下町まで焼失する。死者54人焼失家84軒被害家3238軒	旧城記録道録1-1767 旧城記録道録1-1768 旧城記録道録1-1770
		城下で3日大火事が起こる。	古記
享保5	1684	鹿児島下町大火	古記
元禄2	1689	1月 鹿児島城下で大火高麗町上村正右衛門より出火高麗町一帯焼失（手記まで焼失）	古記
元禄9	1696	4月 天降の大火	旧城記録道録1-2599 旧城記録道録1-2600 旧城記録道録1-2601 古記
		12月 夜上町で火災三か所焼失	古記
元禄12	1699	9月 上町町火災	古記
元禄16	1703	2月 知加御門「御日行右衛門御殿」より出火火災ととなり（屋敷23か所、惣200軒等焼失）	古記
		城下が再び一帯焼失した際には予より申上置してはる程の難事を蒙るようになるとのこと	旧城記録道録1-2553
安永3年	1706	下町風雨計りより出火の屋敷30家、櫓17焼失	古記
安永5	1708	2月 下町風雨計りより出火の屋敷30家、櫓17焼失	古記
正徳3	1713	1月 下町大火（御本陣前より出火）土屋敷3、町屋敷43、寺門焼失、他人屋敷2焼失	古記
		下町大火事件時、諸士屋敷焼失被害甚なり「石居地前」一帯焼失す事也	古記
正徳3	1713	火除けのため、鹿児島城下に火除地を設ける	旧城記録道録3-207
		12月 火除けのため、家来屋敷の建て直しを願ひ	旧城記録道録3-297
享保2	1717	4月 浄光寺、不断堂等焼失土屋敷27か所、立物・舟木、宝珠院、軒巻院まで焼失	古記
享保13	1728	御城跡辺出火之御心得之覚書	古記
享保19	1739	御城より出火し、奉行所や日本橋まで焼失	三州御治世要覽
明和9	1772	4月 『御城御所御物方』御山文助、「鶴丸山之御城」は「三州御城」であるとして	備後録（上）1291
安永3	1774	7月 下町で大火高麗町下小松から門前御門まで焼失す事也	旧城記録道録6-1212
享和3	1803	1月 下町で火災、火元は東町田口本太郎宅	旧城記録道録4-601
明治6	1873	鹿児島（鶴丸）城本丸、御樓門が焼失	旧城記録道録4-601
明治10	1877	鹿児島戦争 鹿児島（鶴丸）城二之九が焼失	

【主要参考文献一覧】

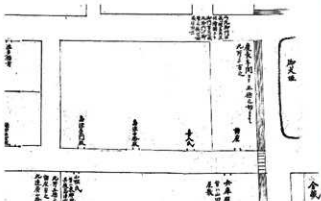
- 鹿児島市1955『鹿児島のおいたち』
- 鹿児島市1916『鹿児島市史』
- 鹿児島市史編さん委員会1971『第4部 近世関係史料 古記』
- 『鹿児島市史第3巻』
- 鶴丸城御樓門建設協議会/鹿児島県 2016『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』
- 荻田岩太郎（編）1908『鹿児島市街實地踏査圖』、吉田文彦堂
- 原口泉ほか（編）2016『鹿児島市の昭和：写真アルバム』、樹林舎
- 松尾千歳1988『資料紹介一冊蔵「犬道物語」について』『尚古集成館紀要』2, pp.21-34
- 松尾千歳1990『島津家武家放火の成立と展開—犬道物語放火を中心として—』『尚古集成館紀要』4, pp.1-20



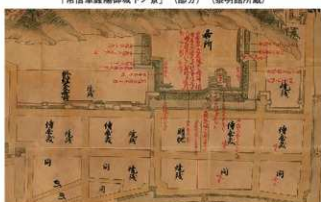
寛文10 (1670) 年
「藏藩御城下絵図」(部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



17世紀後半~18世紀前半
「常信筆藏藩御城下ノ景」(部分) (黎明館所蔵)



明和4 (1767) 年
「見聞秘記付図」(部分) 久保之英 慶長~正徳年間の絵図



元禄9 (1696) 年
「鹿児島城絵図控」(部分) (東京大学史料編纂所所蔵)



正徳3 (1714) 年
「正徳三年御城下絵図」(部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



宝暦6 (1756) 年
「藏摩国鹿児島城絵図」(部分) (東京大学史料編纂所所蔵)



文政4 (1821) 年
「鹿児島御城下明細図」(部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



天保14 (1843) 年
「天保年間鹿児島城下絵図」(部分) (鹿児島市立美術館所蔵)

第3図 鹿児島城下絵図 近世期



嘉永7 (1854) 年
「府城南面屋形前之圖」(部分) 高木善助「西陣畫帖」



明治6 (1873) 年
「成尾常矩城下絵図」(部分) (個人蔵) 近世期の状況を詳細に描写



明治5 (1872) 年
「島津御本丸前風景」(鹿児島県立図書館所蔵)



明治17 (1884) 年
「鹿児島市街略図」(部分) (鹿児島市1971)



明治30 (1897) 年
「鹿児島市街實地調査圖」(部分) (真田1908)



大正7年 (1918) 年 「鹿児島市街便覧圖 實地測量地番里程入」
(部分) (若松長義 製・吉田書房1918) (国立国会図書館蔵)



昭和10~13年 (1935~1938)
鹿児島城跡：第七高等学校校土庫。手前：高等小学校校舎



昭和14 (1939) 年
「鹿児島市職業別明細図」(部分) (鹿児島市1995)

第4図 鹿児島城下絵図 近世~近代以降



第5図 周辺遺跡位置図

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考	遺跡コード	
1	鹿児島丸城跡	城山町	平地 丘陵	縄文時代, 古代, 近世, 近現代	鹿児島県教委1983「鹿児島(鶴丸)城本丸跡」 鹿児島市教委1984「鹿児島(鶴丸)城二之丸跡C地点」 鹿児島県教委1991「鹿児島城二之丸遺構」 鹿児島県教委1992「鹿児島城二之丸遺物」 鹿児島市教委1995「鹿児島(鶴丸)城二之丸跡F地点」 鹿児島市教委2000「鹿児島(鶴丸)城二之丸跡G地点」 鹿児島城郭門跡協議会、鹿児島県2016「鹿児島(鶴丸)城跡保存計画」 鹿児島市教委2017「鹿児島(鶴丸)城郭跡」 鹿児島県立碑2020「鹿児島(鶴丸)城郭門跡再建」	201	002
2	仙巖園跡(花倉邸屋敷園)	吉野町9700-1	平地	近世		201	—
3	壱ヶ宮	吉野町壱ヶ宮深部	台地	弥生時代, 古墳時代		201	027
4	先來門	吉野町壱ヶ宮先來門	丘陵	縄文時代, 早期		201	104
5	壱成院跡	吉野町壱	平地	近世		201	145
6	鹿児島紡織所跡	吉野町壱+水	平地	近世	鹿児島市教委2000「鹿児島紡織所跡B地点」 鹿児島県立碑2012「鹿児島紡織所跡ほか」	201	156
7	壱ヶ宮B	吉野町壱+宮	丘陵	縄文時代, 早期		201	142
8	壱ヶ宮平	吉野町壱+宮前平	台地	縄文時代, 早期		201	005
9	溝ノ上火薬製造所跡	吉野町溝ノ上	平地	近世	鹿児島市教委1998「溝ノ上火薬製造所跡」 鹿児島県立碑2021「溝ノ上火薬製造所跡ほか」	201	127
10	溝ノ口城跡	飯元町字溝ノ口	台地	中世		201	069
11	清水城跡	清水町大宮寺岡	丘陵	中世, 近世		201	055
12	兼福寺城跡	清水町田之浦	丘陵	古代, 中世		201	054
13	屋敷小城跡	稲野町字後浦	平地	中世		201	083
14	浜城城跡	清水町田之浦	丘陵	中世		201	058
15	紙園之洲跡台跡	清水町紙園之洲	平地	近世	鹿児島市教委1998「紙園之洲跡台跡」 鹿児島県立碑2012「鹿児島紡織所跡、紙園之洲跡台跡、天保山跡台跡」	201	146
16	浜町	浜町	平地	近世	鹿児島県立埋蔵文化財センター2000「浜町遺跡」	201	132
17	大塚院跡	稲野町清水中校庭	丘陵	中世, 近世	鹿児島市教委1983「大塚院跡」 鹿児島市教委1985「大塚院跡」	201	082
18	福昌寺跡	池之上町玉殿高松一帯	平地	中世, 近世	鹿児島市教委2008「福昌寺跡」 鹿児島市教委2014「福昌寺跡 福昌寺跡鳥居遺構跡」 鹿児島市教委2014「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書(次一福昌寺跡)」 鹿児島市教委2017「薩摩藩土庫家事務所福昌寺跡調査報告書」	201	144
19	丸岡	飯元町たんたとう丸岡	丘陵	縄文時代, 早期-後期		201	003
20	南澤神社	上毛塚町南澤神社境内	台地	縄文時代, 早期		201	007
21	大塚遺跡群	大塚町 池之上町 春日町	台地	縄文時代, 前期・中期・後期・後段, 弥生時代, 古墳時代, 中世, 近世	鹿児島市教委2001「大塚遺跡」 鹿児島市教委2001「大塚遺跡」 鹿児島市教委2001「大塚遺跡B地点」 鹿児島市教委2014「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書(次一 大塚遺跡)・池之上」 鹿児島市教委2017「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書(次一 大塚遺跡K地点)」	201	009
22	内城跡	大塚町	平地	中世		201	056
23	福馬家城跡	飯元町北上	丘陵	中世		201	057
24	智野冷水家跡	冷水町智野	丘陵	近世	社団法人鹿児島県済会南興病院1976「智野(冷水)家址」	201	143
25	琉球館跡	小川町	-	近世	鹿児島市教委2003「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書30-共研公園遺跡・琉球館跡」	201	159
26	壱ヶ宮之城島津家屋敷跡	山下町	平地	近世	鹿児島県立碑2003「壱ヶ宮之城島津家屋敷跡」	201	134
27	鹿児島城跡 (大湊物馬場・火跡地)	山下町13番21号	平地	近世	本報告書	201	411
28	名山	山下町名山小松原	平地	近世, 近現代	鹿児島市教委1988「名山遺跡」 鹿児島市教委2002「名山遺跡」	201	105
29	壱士館・漢武館跡	山下町4-1, 4-2	平地	近世, 近現代	鹿児島市教委2003「壱士館・漢武館跡」	201	106
30	上山城跡	新開院町	丘陵	中世		201	061
31	夏庭城跡	草花田町夏庭	丘陵	中世, 近世, 近現代		201	133
32	伴後院跡	伊敷町中福島	丘陵	古代, 中世		201	060
33	玉聖院跡	玉聖町	平地	近世	鹿児島市教委2004「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書2-玉聖院跡・墓下遺跡」 鹿児島市教委文化課2015「名瀬回廊津波玉聖院跡整備準備作業工事完了報告書」	201	157
34	玉聖	玉聖町(旧練兵場跡)	平地	弥生時代, 前期-前期		201	020
35	共研公園	中央町	-	弥生時代, 古代	鹿児島市教委2003「鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書30-共研公園遺跡・琉球館跡」	201	158
36	武	武一丁目	平地	弥生時代, 古墳時代, 中世	鹿児島市教委2002「武遺跡E地点」 鹿児島市教委2004「武遺跡F地点」 鹿児島市教委2004「武遺跡G地点」	201	129
37	廣大城内	都元一丁目廣大城内	平地	弥生時代, 古墳時代	鹿児島市教委2014「廣大城内遺跡都元段地, 汀跡地」ほか	201	023

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査区が200mと狭小のため、調査区を2分割し、排土を反転しながら調査を行った。調査区南側を調査区1(100m)、北側を調査区2(100m)とし、12~1月に調査区1、2月に調査区2の調査を実施した(第2図)。

調査にあたり、既知の基準点のKBM1 X: -155389.861 Y = -42148.58 H = 5.032, TA-2 X: -155365.873, Y = -42131.123, H = 4.039, TA-8 = X = -155393.526, Y = -42103.879, H = 4.039を基準とし、位置を記録した。グリッドに関しては、鹿兒島城跡の調査グリッドを延長し、設定した。

まず、調査区表面のアスファルトを切断し、アスファルトとセメント基礎を重機で除去した後、調査を開始した。I層で鉄筋コンクリート基礎、II層上面で凝灰岩の建物基礎が検出されたことから、建物基礎の配置状況を写真・図面等に記録した後、重機での基礎部分の撤去作業を行った。

III層以下は、遺構が検出された段階で写真撮影、配置図・実測図等の測量・記録作業を行った。遺構は、検出状況の写真撮影を行った後に調査を行い、半載状況の記録をとりながら、1/10・1/20・1/40の平面図・断面図を作成し、完掘状況の写真撮影を行った。VI層以下の湧水は水中ポンプで排水を行い、調査を進めた。VII層以下は下層確認のため、一部下層確認トレンチを設定し、遺物・遺構の有無の確認を行った。

2 遺構の確認と調査方法

検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構名と遺構番号を付与した。調査の過程で遺構でないか判断されたものについては欠番とした(本報告掲載番号については凡例を参照)。

遺構検出はII層・V層・VI層・VII層上面で試みた。攪乱も多く、層序を慎重に把握しながら行なった。

遺構は検出された段階で写真撮影・実測を実施した後、土坑や柱穴については半載、溝状遺構や不明遺構等は土層観察用のベルトを設定し、土層の確認を行いながら掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて出土遺物の記録作成や取り上げ、土層堆積状況の断面図等の記録を行った。遺構の確認については埋土の状況や床面の状態、遺物出土状況等を基に判断した。

3 整理作業の方法

整理作業は、令和2年度に行い、最初に遺物の水洗や注記、接合などの基礎整理作業を行った。

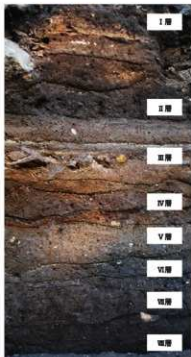
注記は注記記号「HY」を頭に「調査区」、「層」、「遺構名」の順で記入した。基礎整理作業後、実測遺物の選別・実測・拓本・トレース等の製図作業を行った。木製品に関しては、乾燥に留意しながら、分類・実測・トレース等の製図作業を行った後、保存処理・科学分析を行った。

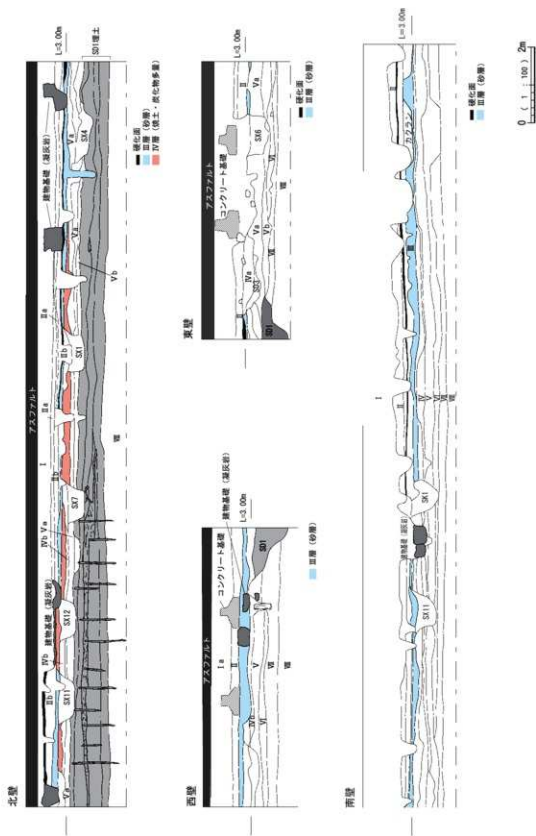
第2節 層序

層序は第3表・第6図に示す。I層は近・現代造成土

第3表 基本土層

層位	時期	色調	特徴	層厚
I層	表土	攪乱層	近・現代の攪乱	120cm
IIa層	近代	褐灰色土 (10YR4/1)	瓦・炭化物・漆喰多量含む	10cm
III層	近世1	灰色砂 (2.5Y6/2)	複数硬化面を有する 貝粒を含む砂(造成?)	10~ 20cm
IVa層	近世2	黄褐色土 (10YR5/6)	造成土 (炭化物・焼土等多量含む)	10cm
IVb層		黒褐色土 (2.5Y3/1)	鉄分沈殿層(硬質) (炭化物・焼土等多量含む)	5~10 cm
Va層	近世3	褐灰色砂質土 (10YR5/6)	包合層・遺構検出面	10cm
Vb層		黄褐色土 (2.5Y5/6)	鉄分沈殿層(硬質)	5~10 cm
VI層	近世4	褐灰色粘質土 (7.5YR6/1)	包合層・遺構検出面 φ1~5cm大の軽石含む	20cm
VII層	中世	黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)	黒褐色粘質土ベースに黄灰色粘質土(2.5Y4/1)混じり。湧水層	40cm
VIII層	無遺物層	黒色砂 (2.5Y2/1)	φ5~8cm大の軽石含む 湧水層	50cm+
IX層	無遺物層	黒褐色粘質土	軽石含む。湧水層	30~ 40cm
X層	無遺物層	黒色砂	軽石含む。湧水層	40cm+





第6図 土層断面図

で約120cm堆積している。表土下30cmはコンクリート建物基礎が確認された。I層のコンクリートを除去するとII層上面で凝灰岩の建物基礎(布地業)が検出された。II層は、多量の炭化物・焼土・漆喰・瓦片を含んでいることや出土遺物から近代の造成土と考えられる。

III層は粒子が細かい極小貝殻粒を含む砂層だが、自然堆積層とは考えにくく、土地の造成に伴う埋め立て層の可能性が考えられる。III層中からは近世の瓦片・陶磁器片が出土した。

IVa層は、焼土や炭化物・城山層のブロック(橙黄色土)・漆喰片を多く含む層で非常に硬質で締っており、近世期の造成層と考えられる。調査区北側で良好な堆積が確認された。IVb層の硬質な鉄分沈殿層下のV層は黄灰色土の硬く締まった層で、近世相当の遺構が多く検出された。

VI層は水分を含む褐色粘質土で近世相当の木製品を伴う溝や柱穴が検出された。遺物が少量出土した。VII層は湧水層の黒褐色砂層で、木杭列と中世の遺物が少量出土した。VIII-X層は無遺物層で自然堆積層であることが確認された。

本遺跡の層序ではIV層(焼土を含む造成面)に近世の遺構がバックされた状況で検出され、近世相当の包含層が良好に残存していることが確認された。

第3節 中世の調査成果

1 遺構(第7図)

表土下約180cm、標高約2.2mで検出されたVIII層は、湧水する黒色砂層であり、少量の中世遺物と杭列、自然流路と考えられる浅い窪みが溝状に検出された。自然流路と考えられる溝は深さが約5cm程度と浅く、ヘドロ状の泥が溜まっていた状況で、人工的な遺構ではないと判断した。木杭の年代測定結果と出土遺物から、VIII層は中世相当層と考えられる。

(1) 杭列(第7~9図)

自然木枝の先端を加工した杭列が調査区2の南北方向に2列検出された。この杭列は鹿見島城の堀と並行していた。

木杭は32本確認され、概ね25~3.5cm大と細目で、表面には樹皮が残存しているものが多い。特に残存状態の良いものを図化した(3~15)。樹種はいずれもマツ属で、年代測定の結果では15世紀中~後半の年代が得られている(詳細は第4章)。杭列以外の遺構は確認されなかったため、詳細は不明だが、砂層で湧水するVIII層は、地盤的には脆弱であるため、地盤改良(粗朶?)のような役割を持った杭列と考えられる。

2 遺物(第8図)

VIII層出土遺物は2点である。1は籾選芥文をもつ龍泉窯系青磁である。2は備前の片口播鉢である。

第4節 近世の調査成果

1 概要

本遺跡で残存していた近世相当層はIII~VI層であった。各層には攪乱などもあったが、勾配などはみられず、調査区内では平坦に堆積していた。

III層は海砂のような砂層であり、厚さにばらつきがあるが、調査区全体で確認された。調査区西側に位置する試掘調査のT2では厚く堆積しており、III層からは18世紀代の瓦が大量に出土したことから、近世相当層と想定される。

IV層は、焼土や炭化物・城山層のブロック・漆喰片を多く含む層で非常に硬質で締っており、遺構は確認されなかった。近世期の造成層と考えられる。遺物の多くは二次焼成を受けたものが多い。

V層は暗褐色粘質土の硬く締まった層で、多くの近世遺構が検出された。遺物は包含層の中では最も出土量が多く、遺構内には陶磁器・瓦・獣骨等が出土している。

VI層は水分を含む灰色粘質土で木製品や木柱を伴う溝状遺構や柱穴等が検出された。

以上のように、本遺跡の近世期相当層はIII~VI層の4面あることが明らかとなった。特にV・VI層は、IV層の焼土等を含む造成面にバックされた状況で検出されていることから、近世期はIV層を挟んだ上下の層で分けられることが確認された。

本節では遺構が検出された層ごとに各遺構・遺物等についてまとめ、各層の詳細な時期については、遺構・遺物等を踏まえ、後述する。

2 VI層(第10~24図)

VI層は近世相当の最下層で、Vb層の硬質の鉄分沈殿層下で検出された。Vb層の硬質層を割がすとVI層(褐色粘質土)で遺構・遺物が確認された。VI層自体も非常に硬くしまった水分を多く含んだ層であり、木製品等が良好に残存していた。

(1) 柱穴(第11~13図)

P1

検出状況 調査区2の西側で検出された。

形状・規模 幅約45cm×45cmで深さ約23cmである。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土で、円礫を多く含まれていた。

出土遺物 遺物は出土していない。

P2

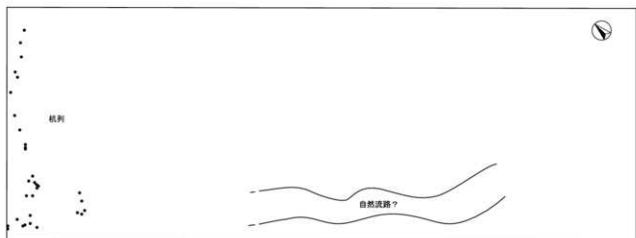
検出状況 調査区2の西側で検出された。

形状・規模 幅約75cm×45cmで深さ約50cmである。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土と黒色砂質土であった。

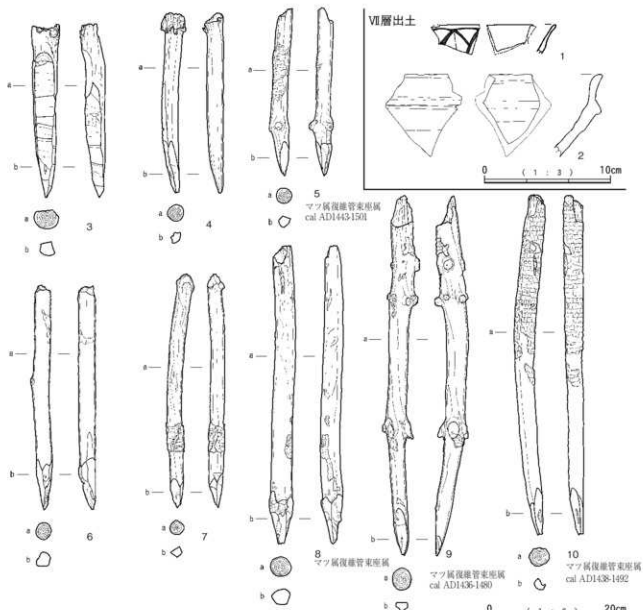
出土遺物

約15×12×43cmの上部が炭化した木柱と円礫が出土した。16は瓦片である。玉線長が1.6cmと短く、胎土には

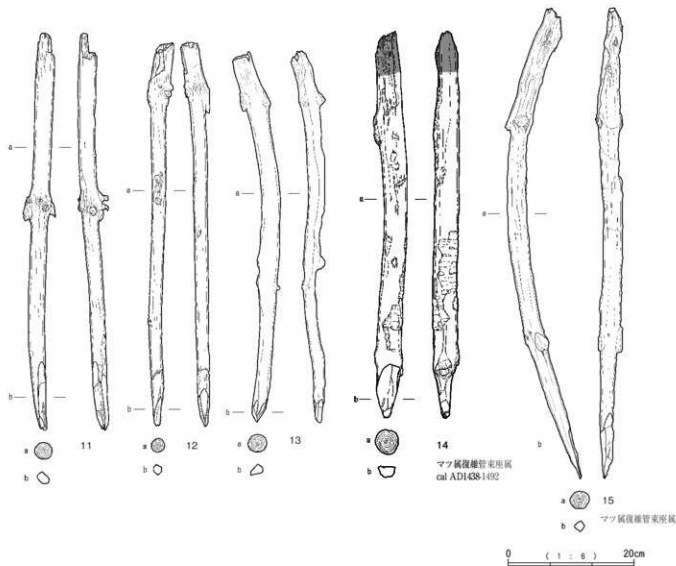


0 (1 : 20) 4m

第7図 VII層検出遺構配置図



第8図 VII層出土遺物・杭列 杭1



第9図 VI層杭列 杭2

石英を多く含む、やや光沢をもつ。

P3

検出状況 調査区2で検出された。

形状・規模 幅約65cm×60cmで深さ約45cmである。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物 板状の礫と円礫が出土した。

P4

検出状況 調査区2で検出された。遺構の北側はSX8に切られている。

形状・規模 幅約80cm×64cmで深さ約25cmである。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物 約10×15×20cmの上部が炭化した木柱が出土した。17は平瓦で、胎土には石英や白色小粒を多く含む、表面には工具による横ナアで調整されている。

P5

検出状況 調査区2でSD1に切られて検出された。

形状・規模 幅約40cmで深さ約55cmである。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物

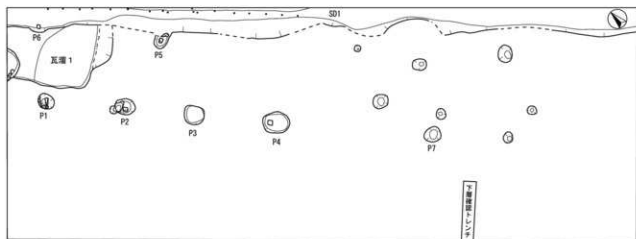
北側で炭化した約10×15cmの木柱片と下部で約10×10×60cmの上部が炭化した柱が出土した。

18は加治木・始良窯系（元立院窯）の私花板である。胎土は褐色で内外面に鉄軸が施され、φ1mm大の白色粒を多く含む。19は薩摩焼（豪平窯）の甕で、口唇部に貝目をもつ。20は瓦質土器の坏で、表面に回転ナデ痕が残る。21は平瓦、22は九瓦（コビキB）で内面に布痕が明瞭に残る。

P6

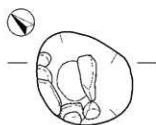
検出状況 調査区2でSD1に切られて検出された。

形状・規模 大半は切られているため、全体は不明だが、



第10図 V層遺構配置図

P1



L=3.2m

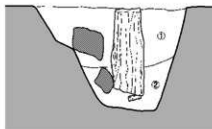


①黄灰色砂質土 (25Y5/1)。φ2~3cm大の樫を含む。

P2



L=3.2m



①黄灰色砂質土 (25Y5/1)。水分を多く含む。φ3~5cm大の榎石を多く含む。

②黒色砂質土 (25Y2/1)。水分を多く含む。φ3~6cm大の榎石を多く含む。

第11図 柱穴 (P1・2)

約幅45cm×深さ約45cm+の柱穴と想定される。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物 10×10×60cmの木柱(クリ材)が出土した。

年代測定ではcal AD1519-1590の値が得られている。

約幅45cm×深さ約35cm+の柱穴と想定される。

埋土 水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物 約10×10×60cmの焼けた木柱が出土した。

P7

検出状況 調査区1で検出された。

形状・規模 大半は切られているため、全体は不明だが、

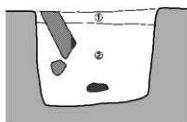
(2) 溝状遺構

SD1 (第14~23図)

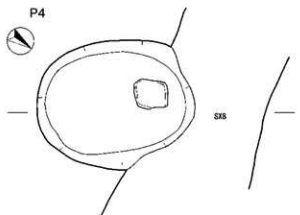
検出状況 調査区北側に東西方向に検出された。遺構の

南側の一部は上層の遺構に切られている。

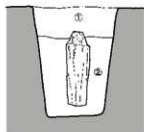
P3



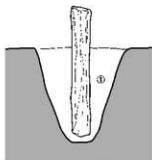
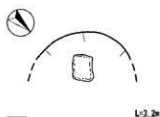
P4



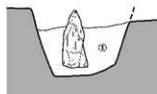
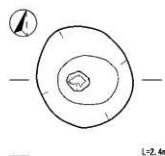
P5



P6



P7



柱材：タリ
cal AD1519-1590

0 (1:20) 50cm

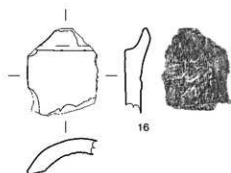
埋土注記

P3	①黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)。鉄分を多く含む。φ2-3cm大の礫を多く含む。
	②黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)。φ2-3cm大の軽石を少量含む。
P4	①黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)。鉄分を多く含む。φ0.5-1cm大の軽石を含む。
	②黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)。鉄分を多く含む。φ1cm大の軽石を含む。
P5	①黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)。
	②黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)。

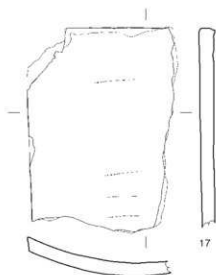
P6	①黄灰色砂質土 (2.5Y1/4)。φ1cm大の軽石を多く含む。
	②黄灰色砂質土 (10YR5/1)。φ1-2cm大の小礫を多く含む。

第12図 柱穴 (P3~7)

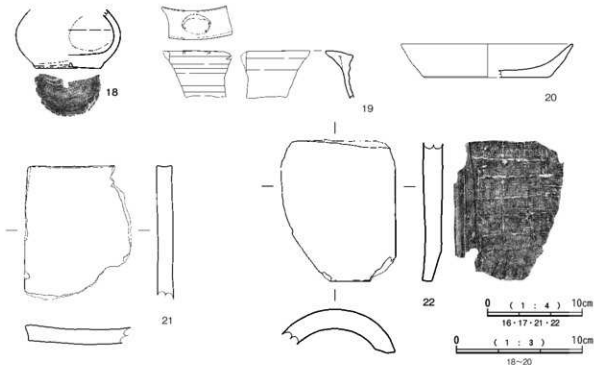
P2



P4



P5



第13図 P2・4・5出土遺物

形状・規模 調査区東西方向に約18mに渡り検出された。調査区で検出できたのは遺構の一部で幅は北側に延び、長さは南北方向に延びる。検出した幅は約40cm、深さは約40cmであった。

埋土 水分を多く含む暗灰色粘質土と黒色砂質土が堆積しており、下層の砂層(⑥～⑧)は湧水層であった。埋土中には木板や木片が全面に検出された。遺構中央付近も固化はしていないが、細かな木片は全面に検出された。

出土遺物

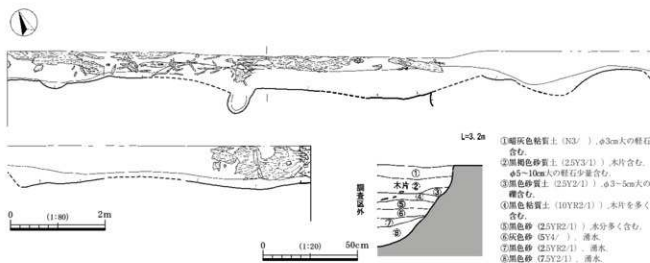
遺物は検出面約20cmまでに集中して出土した(埋土断面①～⑤)。木板・木片等とともに、下駄や漆製品や6

面に面取りした断面六角形状の木杭列が出土した。また、木製品とともに、陶磁器や瓦、キセル、獣骨(シカ)等が出土した(獣骨は写真図版参照)。

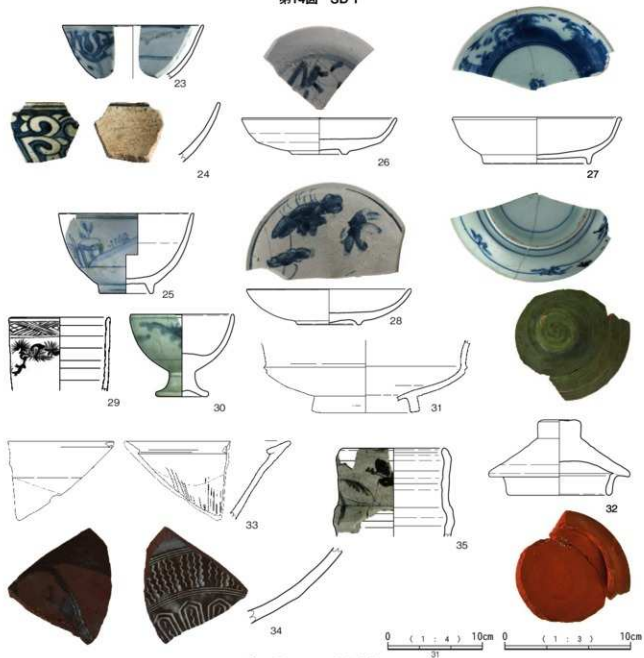
23～30は磁器である。23～25は碗で、23・24は中国産で、24は琿州窯系と考えられ、外面に波濤文を持つ。25は肥前の碗で、施釉は総釉で畳付を釉剥ぎする。

26～28は皿である。27は中国産、26・28は初期伊万里で、26は透明釉が総釉で厚く施釉される。29・30は肥前産で、29は筒形碗である。内面には轆轤ケスリが明瞭に残る。30は仏飯器である。

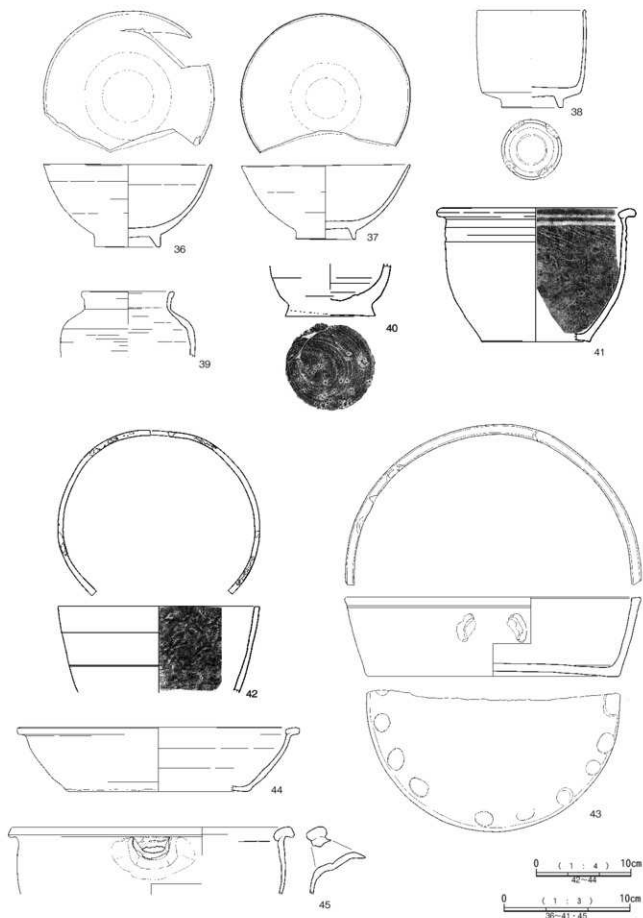
31～34は陶器である。31～34は肥前系の陶器で、33は



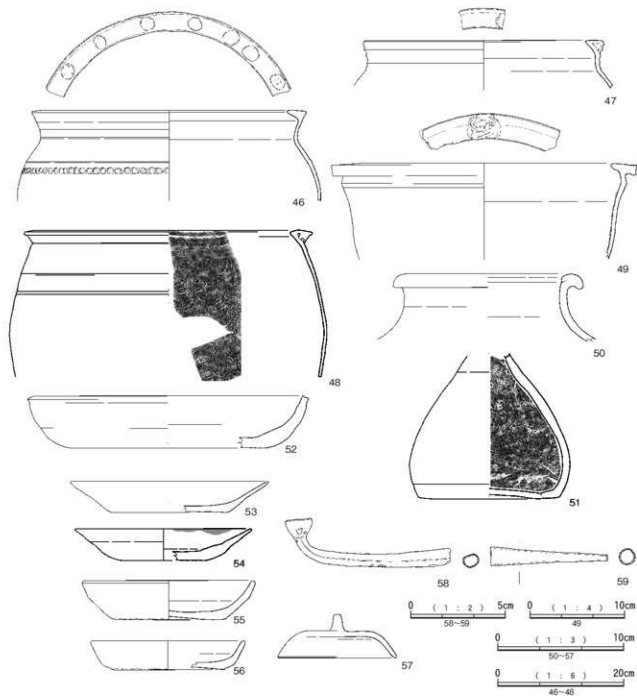
第14図 SD 1



第15図 SD 1 出土遺物 1



第16図 SD 1 出土遺物 2



第17図 SD1出土遺物3

掘鉢で口縁部内外に赤色の鉄軸が施軸される。31・34は鉢であり、34は内面に化粧土で象嵌（三鳥手）が施される。32は蓋で外面に銅緑軸が施軸される。35は志野焼と考えられる方形の向付である。鉄軸の草花文をもち、透明軸が厚く施軸され、貫入が入る。

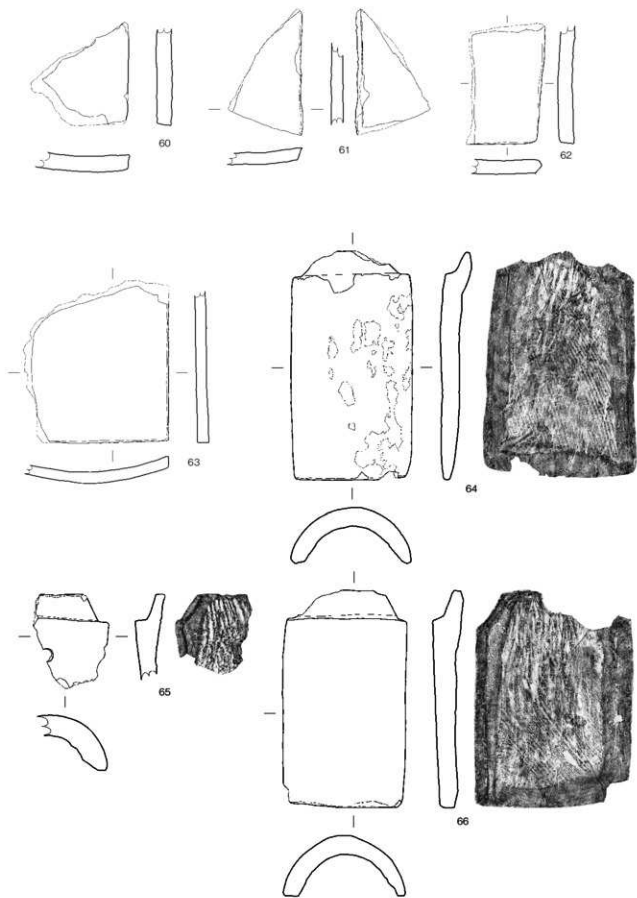
36~40は、黄・茶胎軸が施軸される加治木・始良系の陶器である。36・37は碗で、総軸で内面見込みが蛇の目軸刺ぎである。38は筒形碗で、口唇部と皿付が軸刺ぎで、皿付には4か所砂目が残る。39は壺で、非常に薄手で表面には轆轤目を明瞭に残す（山元壺か）。

40は仏花瓶で、胎土はやや黒味を帯びる灰白色で、黒

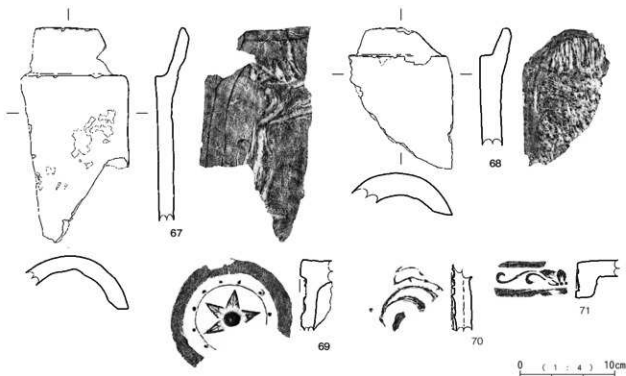
色粒を多く含む。36~39は初期龍門可窯、40は元立院窯のものと考えられる。

41~51は薩摩焼（堂平窯）である。42~45は鉢で、鉄軸がかかる。口唇部や底部には貝目が残るものが多い。41は小型の鉢で、内外面にタタキ痕と当て具痕後のナデ調整がみられる。42は内面に当て具痕がわずかに残る。44は蓋の可能性もある。

46~49は壺である。48以外は口唇部には貝目が残る。46は口縁部を内側に、47・48は外側に折り曲げて成形する。48は内面に同心内当てで具痕を明瞭に残す。50は壺、51は徳利である。51は内面に当て具痕、絞り痕がみられ、



第18図 SD 1 出土遺物 4



第19図 SD1出土遺物5

外面には横方向のナデ調整が明瞭に残る。52は土師質の焙烙で、二次焼成を受けている。53-56は土師器の皿、57は蓋である。53・56・57は強い二次焼成を受け、一部赤色・黒色に変色している。54は灯明皿である。

58, 59はキセルで、表面には金銀が残存している。なお、その他には碁石や鹿の上腕骨や脛骨等の獣骨も多く出土している(写真図版参照)。

60-71は瓦である。60-63は平瓦である。64-68は丸瓦である。64・66は胎土には滑石粒や角閃石が多く含まれる。コピキAに類似する斜め方向の筋もみられる。67は玉線長が約5.2cmと長めで、胎土には白色粒を多く含む。

69は軒丸瓦である。瓦当径が約12.8cmで、連珠が小ぶりて橋文をもつ。70は軒丸瓦もしくは鬼瓦である。瓦当に細い草花文と思われる文様を成形している。胎土にはφ2mm大の赤色礫を多く含む。71は上向三葉文をもつ軒平瓦である。顎貼り付けで、顎裏面をナデで面取りしている。

杭列・木製品

埋土からは多くの木製品が出土した。遺構全面に大小多くの木片・竹片が確認された。残存状況は良好なものも多かったが、特に残存状況が良いものを図化した。

遺構内、調査区北側壁に沿って出土した杭は16本で、いずれも表面を6面に面取りしていた(断面図にはその内14本図化)。72-77は途中折れてはいるが、非常に良好に残存していた。長いものでは約100cm近く(77)、上部が焼けて炭化していた。厚さは概ね3-5cm大で、

杭の樹種はクマシデアクスノキであった。杭の年代測定では、77以外は16世紀初頭の測定結果が得られている(77は16世紀中頃)。

78-80は部材で、81はスギ製の門と考えられる。82-85は下駄である。84は造り出し歯の高下駄で、85はヒノキ材の露卯の差歯下駄である。

86は漆塗の壺(アスナロ材)で、漆は薄く剥落が著しい。87-89は黒漆碗で、87は胴部に草花文が施されている。漆製品は残存状況が良好ではなく、図化できなかった赤漆碗の小片などもみられた。(木製品の樹種等の詳細は第4章を参照)

(3) 瓦溜1(第24図)

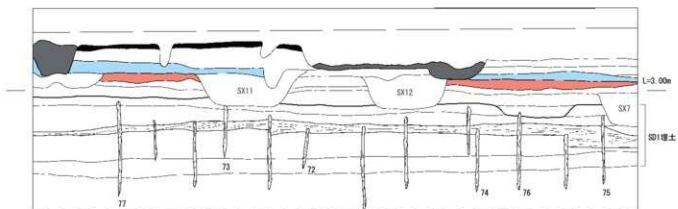
検出状況 SD1の南西側でSD1を切って検出された。瓦が多く出土したため、瓦溜としているが瓦片とともに木片や棕櫚縄(写真図版参照)等も出土している。

形状・規模 約2mの不定形を呈す。深さは約10cm程度であった。

出土遺物

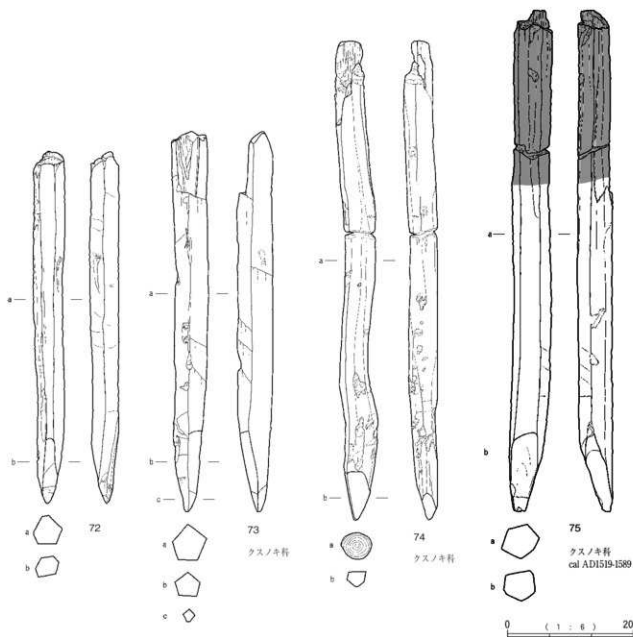
瓦や陶磁器、木片、棕櫚縄等が出土した。陶磁器は小片のため、図化していない。

90-94は瓦である。90-92は丸瓦、93は右巻巴文の軒丸瓦である。94は鬼瓦と考えられる。

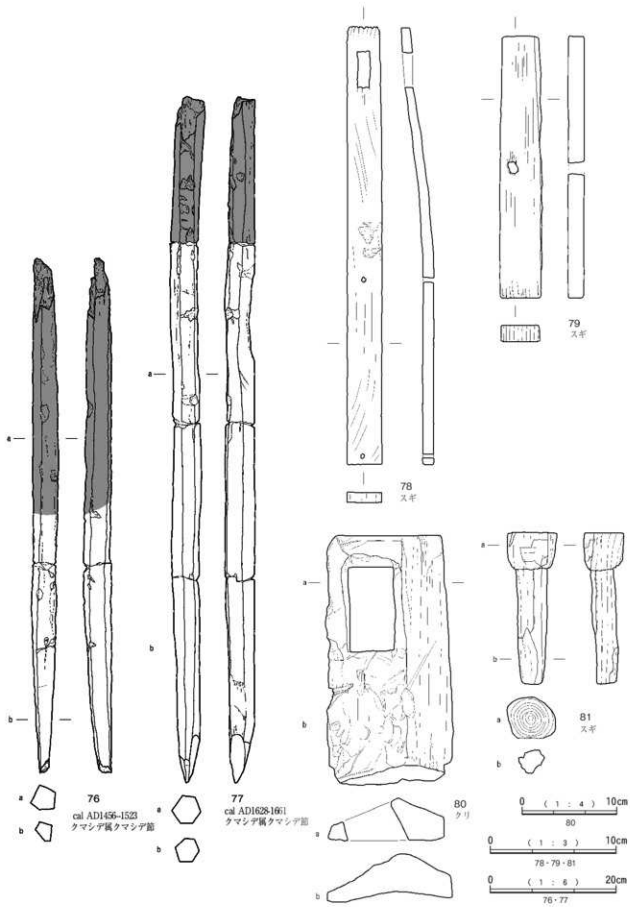


第20図 SD 1 杭列

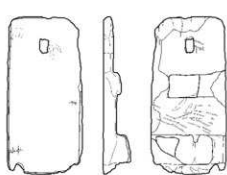
0 (1 : 50) 2m



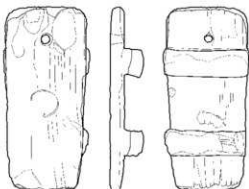
第21図 SD 1 杭列 杭 1



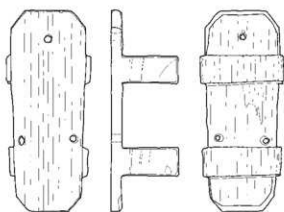
第22図 SD1 出土杭・木製品



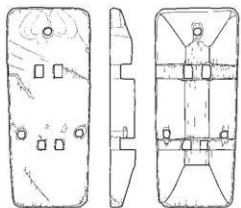
82
ヌルテ



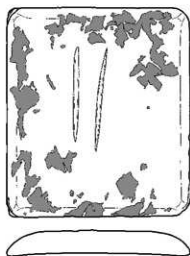
83
スギ



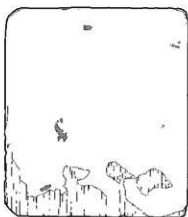
84
スギ



85
ヒノキ



86
アスナロ



87



88



89

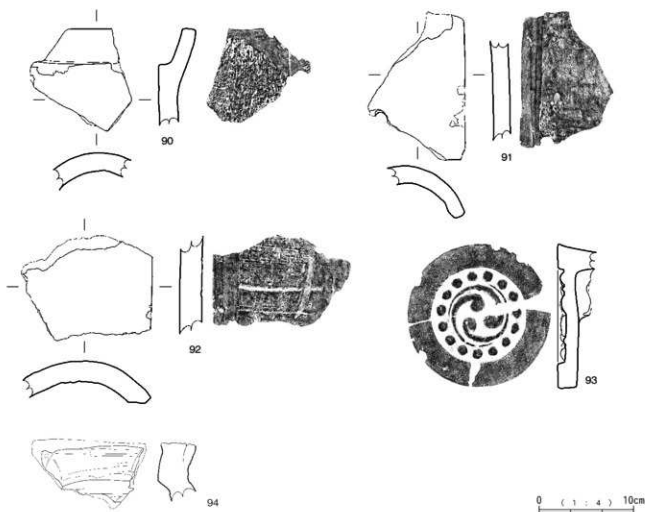
0 (1 : 4) 10cm

82-85

0 (1 : 3) 10cm

86-89

第23図 SD 1 出土木製品



第24図 VI層瓦溜1出土遺物

3 V層(第25~42回)

IVb層の硬質な鉄分沈殿層下に検出した暗褐色粘質土(V層)で、多くの遺構を検出した。溝状遺構のほか、溝状の不明遺構が複数確認された。その他、瓦溜やピット群も検出された。

(1) 溝状遺構

SD2(第26~28回)

検出状況 調査区1の中央部で東西方向に延びる形で検出された。

形状・規模 長さ約6.6m、幅約60cmで深さ15cmである。溝の西部はS X 3・5によって切られており、東側に調査区外に延びる。

出土遺物 被熱を受けた拳大の礫のほか、陶磁器・土師器等が出土した。

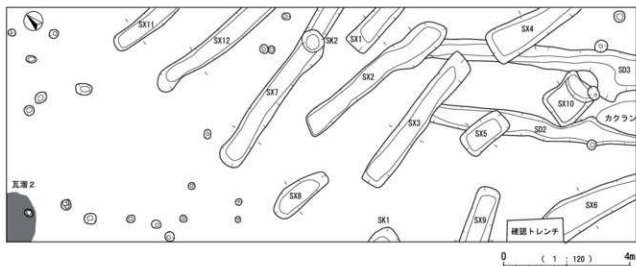
95~99は磁器である。95は饅頭心の碗で高台内面に銘款がある。96・97は皿で、97は初期伊万里である。99は肥前系の壺で内面には軸垂れがみられ、壺付は軸刺ぎする。98は唐草文の蓋で、底部分のみ露胎する。

100~102は肥前系の陶器である。100は内面に鉄軸と鉄軸の刷毛目で施文される。101は内野山系の蛇の目軸刺ぎの碗もしくは皿である。外面は透明釉が胴部下位まで施釉される。102は植木鉢で口唇部に縄目状に装飾され、外面には線描の草花文と考えられる痕跡がみられる。

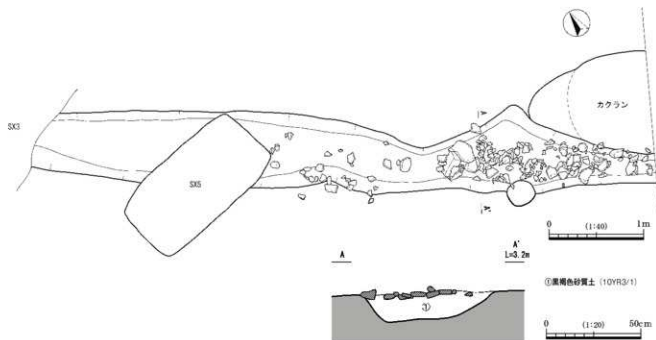
103~106は豊野窯系の白磁摩の陶器である。103は磁器に近く、透明釉の総軸で貫入が入り、壺付は軸刺ぎする。104・105は胴部に千鳥文に近い文様をもつ。この文様は千鳥文が一定化する前の文様の可能性も考えられる。106は口唇部に鉄軸をもつ皿である。

107~117は加治木・始良系の陶器である。107は半陶半磁の透明釉の碗である。108・109は轆轤目を明瞭に残し、内面見込みに4か所の目跡が残る山元窯系の碗である。108は総軸だが、109は高台内面が露胎する。

111は内面・外面に目跡が残る皿で、外面胴部下位~底部は露胎する。113は轆轤目を明瞭に残す蛇の目軸刺ぎの鉢で、表面は白濁した釉薬がかかっているようにみえるが、焼成不良によるものである。胎土は非常に精緻



第25図 遺構配置図 (V層面検出)



第26図 SD2

で不純物が少ない。山元窯出土品にも類例がみられる。

114は密で口唇部のみ軸剥ぎする。115は風炉と思われる。116・117は灯立てで内面は露出し、外面に茶・黄色船軸が施軸される。118～120は瓦質土器で、118は焙焙、119は火入、120は香炉である。121～123は土師器皿である。122は灯明皿で、強い二次焼成を受けている。

124は平瓦、125は丸瓦である。124はやや土師質で胎土には石英・角閃石・赤色粒を多く含む。

SD3 (第29～31図)

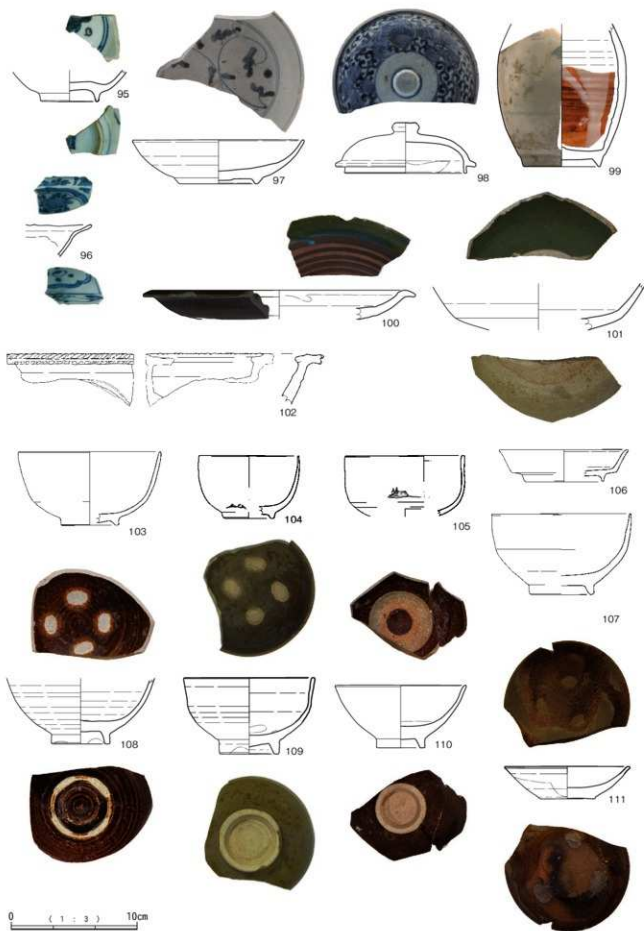
検出状況 調査区1の中央部で東西方向に延びSD2と並行する形で検出された。

形状・規模 長さ約6.6m、幅約70cmで深さ約15cmである。

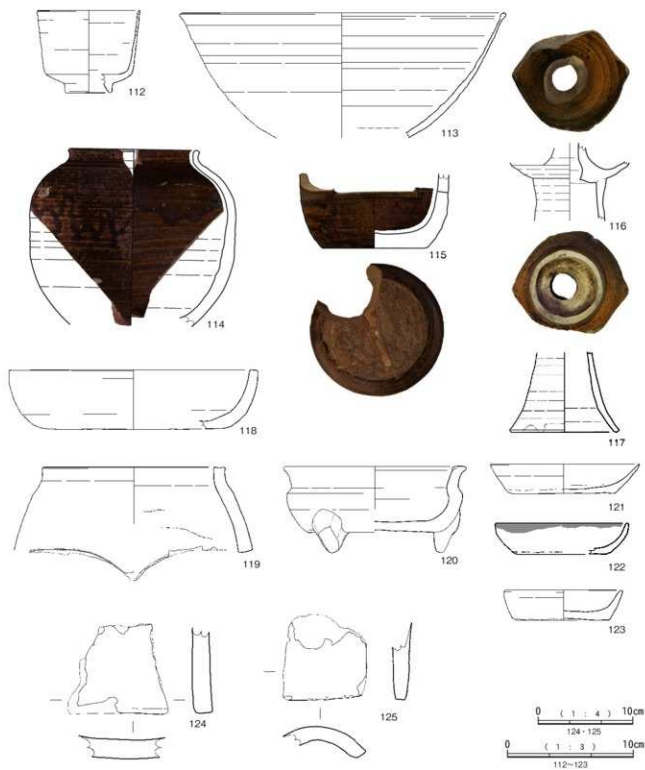
出土遺物 被熱を受けた傘大の礫のほか、陶磁器・土師器・瓦片等のほか、シカの脛骨や尺骨等が出土した。

126～128は磁器である。126は口縁が稜花で内面見込み・高台に銘款をもつ。131～133は堅野窯系の磁器(白薩摩)である。133は煎茶碗である。134は加治木・始良系(山元窯)の磁器碗で、総軸で内面見込みに目跡を残す。130・135～137は、肥前系の陶器である。137は外反する口縁部をもつ皿で、内面見込みと畳付に砂目が付着している。135・136は播鉢で、口縁部の上に鉄軸が施軸される。

138～142は加治木・始良系陶器である。138・139は船軸、140・141は暗い褐色の鉄軸が施軸される碗である。143は皿で、見込みと底部に目跡が残る。142は香炉で、胎土には黒色粒や赤色粒が多く含まれる。



第27图 SD2 出土遗物 1



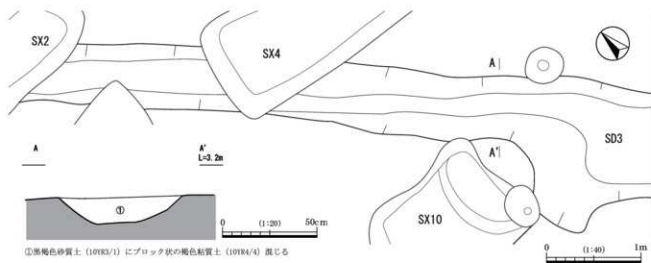
第28図 SD2出土遺物2

144・145は堂平窯の薩摩焼である。144は播鉢で口縁部を外方向に折り曲げ成形し、口唇部には貝目を残す。145は灰釉の把手がつく蓋である。

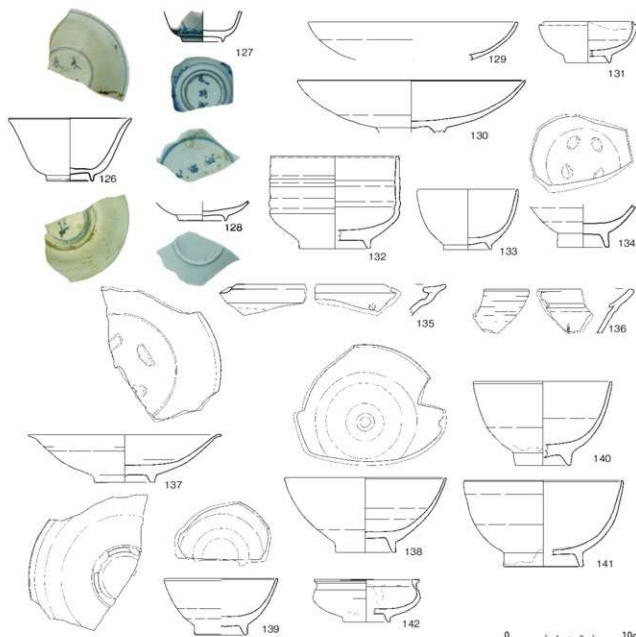
146・147は土師器の皿である。146は二次焼成を受け、部分的に赤色に変色している。148はキセルである。

149～154は瓦である。149・150は平瓦で、150は薄手

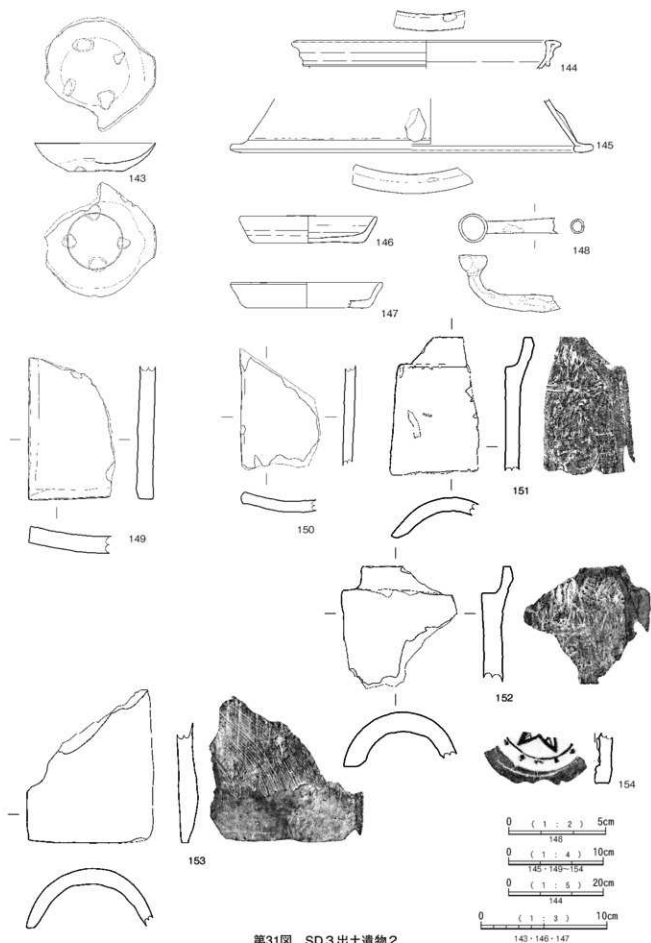
で縁面を面取りしている。151～153は丸瓦である。152は小ぶりで、153は内面に布痕と斜め方向の筋が残り、胎土には石英が多く含む。154は橘文の軒丸瓦で、SD1出土の69と同范の可能性がある。



第29図 SD3



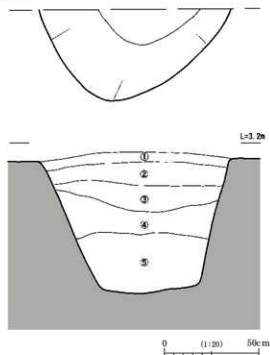
第30図 SD3出土遺物 1



第31图 SD3出土遺物2



SK1



- ①灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)
 ②灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) ベースに①・黄褐色粘質土 (10YR5/3) フロップ混じる。
 ③暗灰色砂質土 (10YR5/1)
 ④暗灰色砂質土 (10YR5/1) ベースに①・黄褐色粘質土 (10YR5/3) フロップ混じる。
 ⑤①・黄褐色粘質土 (10YR5/3) ベースに③暗灰色砂質土 (10YR5/1) 混じる。

第32図 SK1

(2) 土坑

SK 1 (第32図)

検出状況 調査区1の南で検出された。

形状・規模 幅約100cm×50cmで深さ約75cmである。遺構が調査区南側に延びるため全形が不明だが、不明遺構(SX)のような溝状になる可能性も考えられる。
 出土遺物 遺物は出土していない。

SK 2 (第33図)

検出状況 調査区1の西側で検出された。

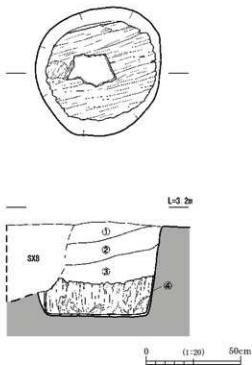
形状・規模 幅約65cm×66cmで深さ約50cmである。

出土遺物

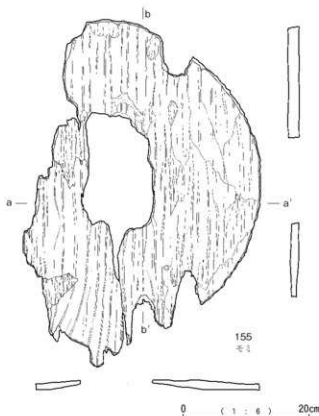
底面と土坑下部の壁面には木片が残存しており、桶状の形態であった。壁面の木板は脆く、残存した状態での取上げは困難であった。底板(155)は中央部に四角形の穴を開けており、比較的良好に残存していたが、取り上げ時に一部欠損した。底板の樹種はモミであった。



SK2

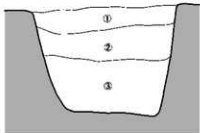


- ①赤褐色土 (25YR4/6)、焼土、漆喰に硬く、炭化物を多く含む。
 ②①・①・褐色粘質土 (7.5YR5/3) で炭化物を多く含む。
 ③赤褐色土 (5YR4/2) ベースで暗褐色焼土 (5YR3/2) 混じり、炭化物多く含む。
 ④暗灰色砂質土 (10YR4/1) に炭化物を多く含む。砂より炭化物の方が多量。(木板には炭化物が多く付着する。)

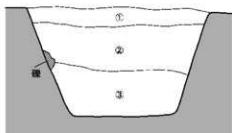


第33図 SK2・出土桶板

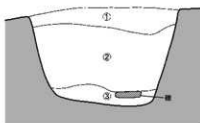
SX1 L=3.2m



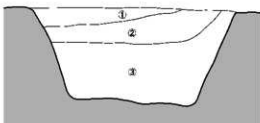
SX2 L=3.2m



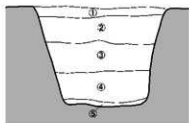
SX3 L=3.2m



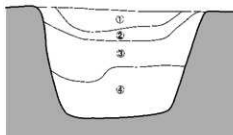
SX4 L=3.2m



SX5 L=3.2m



SX6 L=3.2m



0 (1:20) 50cm

埋土注記

	①灰褐色砂質土 (5YR4/2)
	②灰褐色粘質土 (7.5YR5/2)
	③褐色粘質土 (7.5YR4/1)
SX1	
	①灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) ベースにふい黄褐色粘質土 (10YR5/3) + 明褐色 (5YR5/6) 鉄分ブロック混じり。
	②褐色粘質土 (10YR5/1) ベースに黄褐色粘質土 (10YR5/3) ブロック混じり。φ1mm大の白色礫多く含む。
	③黄褐色粘質土 (10YR5/3) ベースに褐色粘質土 (10YR5/1) 混じり。
SX2	
	①褐色粘質土 (5YR3/6)。鉄分粒含む。
	②灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) ベースに褐色粘質土 (7.5YR5/1) 混じり。
	③褐色粘質土 (5YR5/1) ベースに暗赤褐色砂質土 (5YR3/2) 混じり。
SX3	
	①灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) ベースにふい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 混じり。φ1~3mm大の白色礫を多く含む。
	②褐色砂質土 (10YR4/1) ベースにふい黄褐色粘質土 (10YR5/3) ブロック + 明褐色鉄分粒 (5YR5/6) /ブロック混じり。φ1~2mm大の炭化物多量に含む。
SX4	
	③灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) ベースに灰黄色粘質土 (2.5YR6/2) ブロック混じり。

	①灰褐色砂質土 (5YR4/2)
	②暗赤褐色粘質土 (5YR3/2)。 (鉄分含む)
	③暗褐色粘質土 (2.5Y3/2)
SX5	
	④黄褐色粘質土 (2.5YR4/1) ベースに褐色粘質土 (10YR4/1) 混じり。
	⑤暗褐色粘質土 (2.5Y4/2)
	①灰褐色砂質土 (7.5YR6/2)
	②灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) ベースに褐色粘質土 (7.5YR6/1) 混じり。
	③明赤褐色粘質土 (5YR5/8) 鉄分含むベースの褐色粘質土 (7.5YR6/1) 混じり。
SX6	
	④褐色粘質土 (7.5YR4/1)

第34図 SX1～6 断面図

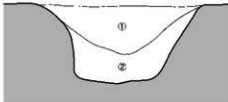
SX7  L=3.2m



SX8  L=3.2m



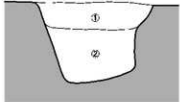
SX9  L=3.2m



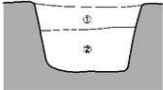
SX10  L=3.2m



SX11  L=3.2m



SX12  L=3.2m



0 (1:20) 50cm

埋土注記

SX7	① 暗灰色砂質土 (10YR5/1) と黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) プロック混じり。(鉄分多く含む)
SX8	① 暗褐色粘質土 (5YR3/6)。(鉄分含む)
SX9	① 暗褐色粘質土 (7.5YR5/2) ベースに暗灰色砂質土 (7.5YR5/1) 混じり。
SX10	① 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) + 暗灰色砂質土 (10YR5/1)
SX11	① 黄灰色粘質土 (2.5YR5/1) + 暗灰色砂質土 (10YR4/1)
SX12	① 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) + 暗灰色砂質土 (10YR4/1) 混じり。(鉄分多く含む)

SX11	① 暗灰色砂質土 (10YR5/1) ベースに黄灰色粘質土 (2.5YR5/1) プロック混じり。(鉄分含む)
SX12	① 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) ベースに暗灰色砂質土 (10YR5/1) 混じり。(鉄分含む)
SX12	② 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) + 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) 混じり。
SX12	③ 暗灰色砂質土 (5Y4/1) + オリーブ褐色粘質土 (5Y3/2) 混じり。

第35図 SX7～12 断面図

(3) 不明遺構 (第34～39図)

調査区の東側に多く検出された北東-南西方向に延びる溝状の遺構である。

12基確認された。いずれも幅が約80cmと規模は同じであり、SD 2・3を切っている。

埋土はしまりが弱い、砂質土・粘質土が主であった。用途・機能が不明のため、不明遺構として報告する。

SX 1 (第34・36図)

検出状況 IVa層面で検出された。

形状・規模 幅80cm×長さ200cm×深さ約55cmで、調査区外に延びる。

出土遺物

156は土師器の皿で、体部下位をケズリ出している。

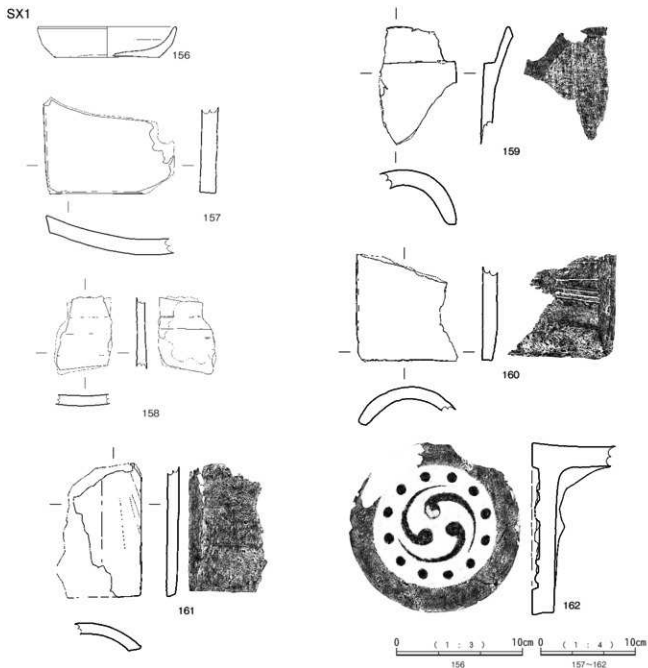
157～162は瓦である。157・158は平瓦で、158は陶器瓦で二次焼成を受けている。159～161は丸瓦で、内面には布痕と横方向の筋(コビキバ)がみられる。162は左巻巴文の軒丸瓦である。

SX 2 (第34・37図)

検出状況 IVa層面でSD 3を切った状態で検出された。

形状・規模 幅約90cm×長さ540cm×深さ約58cmである。

出土遺物 163・164は磁器碗である。163は内面見込み虫文をもつ弥勒窯の碗である。164は堅野窯系の碗で、



第36図 SX1 出土遺物

総軸で透明軸が厚くかかる。

165～167は加治木・始良系窯系（初期龍門司か）の陶器である。165は光沢の強い黄鉛釉の碗で、166は鉢である。黄鉛釉が施軸され、轆轤目を明瞭に残し、蛇の目軸剥ぎと目跡を両方もつ。

167は鉄軸の小壺である。168・169は堂平窯の陶器である。168は壺で、169は外面に花文のスタンプをもつ植木鉢の胴部である。

SX3（第34・37圖）

検出状況 IVa層面でSD1・2を切った状態で検出された。

形状・規模 幅約80cm×長さ500cm×深さ約50cmである。出土遺物 170は巴文の軒丸瓦である。

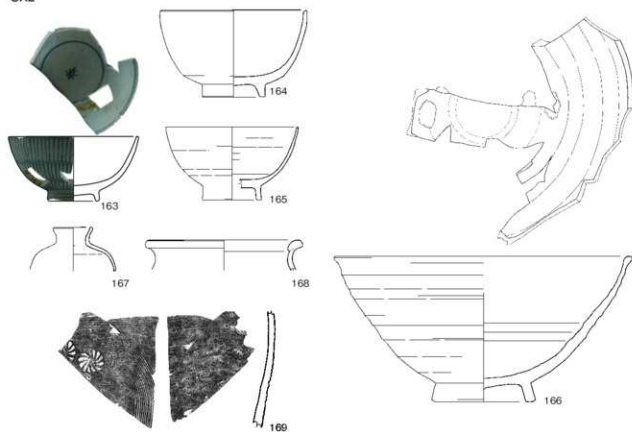
SX4（第34・37圖）

検出状況 IVa層面でSD2を切った状態で検出された。形状・規模 幅約110cm×長さ300cm、深さ約50cmで、調査区外に延びる。

出土遺物

171は磁器碗である。口縁部が稜花で内面は印花文、外面文様には馬が描かれる。172は堂平窯系の蓋である。口唇部には貝目が残る。173は平瓦、174は軒平瓦である。

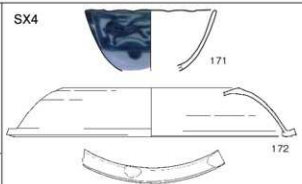
SX2



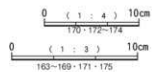
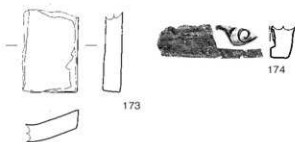
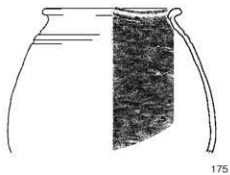
SX3



SX4

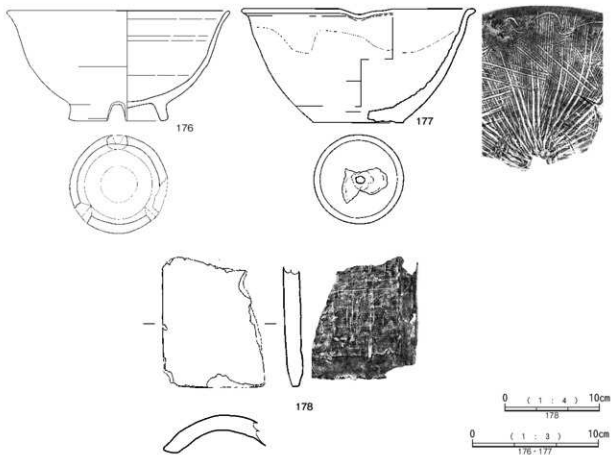


SX6



第37図 SX2~4・6出土遺物

SX7



第38図 SX7出土遺物

SX5 (第34図)

検出状況 IVa層面でSD 2を切った状態で検出された。
 形状・規模 幅約70cm×長さ160cmで深さ約50cmである。
 出土遺物 遺物は陶磁器の小片のほか、シカの歯や下顎片等が出土している。

SX6 (第34・37図)

検出状況 IVa層面で検出された。
 形状・規模 幅約90cm×長さ340cm、深さ約57cmで、調査区外に延びる。
 出土遺物

175は堂平窯の竈である。口縁部を内面に折り曲げ、内面には当て具痕を残す。

SX7 (第35・38図)

検出状況 IVa層面でSK 2に切られた状態で検出された。
 形状・規模 幅約62cm×長さ500cmで深さ約42cmである。
 出土遺物

陶磁器等のほかシカの肩甲骨や脛骨等が出土した。176は野野窯系の割高台の磁器碗である。総軸で壺付は軸剥ぎである。177は肥前系の播鉢を転用した植木鉢である。底部に内輪から穿孔している。178は丸瓦である。

SX8 (第35・39図)

検出状況 IVa層面で検出された。
 形状・規模 幅約40cm×長さ200cmで深さ約20cmである。
 出土遺物 179は巴文の軒丸瓦である。

SX9 (第35図)

検出状況 IVa層面で検出された。
 形状・規模 幅約85cm×長さ180cmで深さ約42cmで、調査区外に延びる。
 出土遺物 遺物は出土していない。

SX10 (第35・39図)

検出状況 IVa層面で検出された。
 形状・規模 幅約110cm×長さ50cmで深さ約12cmである。
 出土遺物 180は肥前の陶器碗である。透明釉で貫入が入る。181・182は加治木・始良系の陶器である。
 182は山元窯の碗で黄鉛釉が施軸され、内面見込みと壺付に目跡が残る。181は初期龍門司窯の碗で、総軸で蛇の目軸剥ぎである。183は陶器平瓦である。外面に直線状に施軸がみられる。

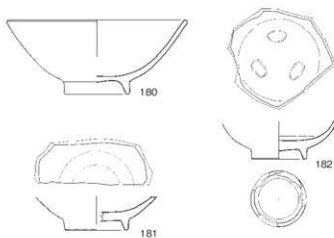
SX11 (第35・39図)

検出状況 IVa層面で検出された。

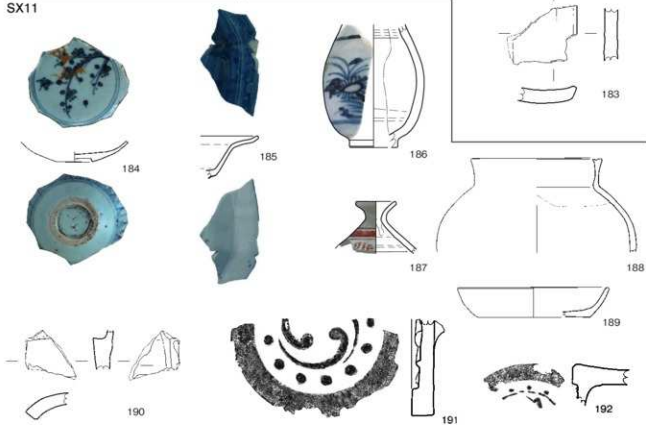
SX8



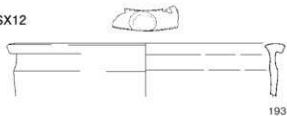
SX10



SX11



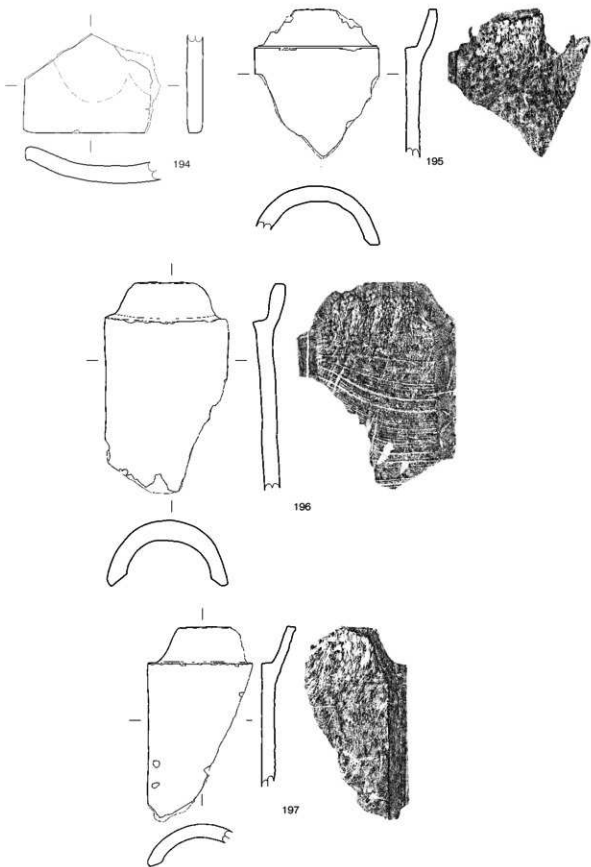
SX12



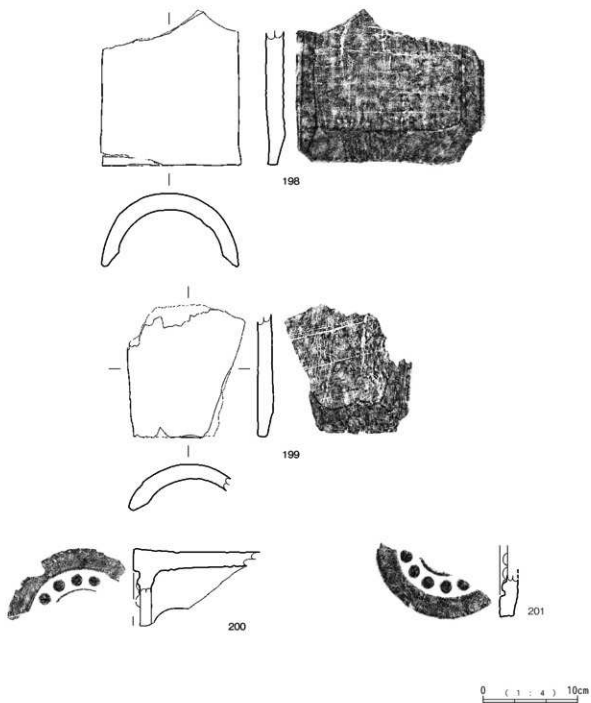
0 (1:4) 10cm
179・183・190-193

0 (1:3) 10cm
180-182・184-189

第39図 SX8・10~12出土遺物



第40图 瓦溜2出土遺物 1



第41図 瓦溜2出土遺物2

形状・規模 幅約60cm×長さ220cm、深さ約43cmで、調査区外に延びる。

出土遺物

184は葎筒底の青花皿である。外面は芭蕉文で、底部は釉剥ぎする。185・186は中国磁器である。185は角皿、186は瓶で内面には釉垂れが見られる。187は赤絵が施文される小瓶で、内面は露胎する。

188は龍門司窯系の壺である。胎土は灰色味を帯び、 ϕ 1mm大の黒色粒を多く含む。189は土師器の皿である。

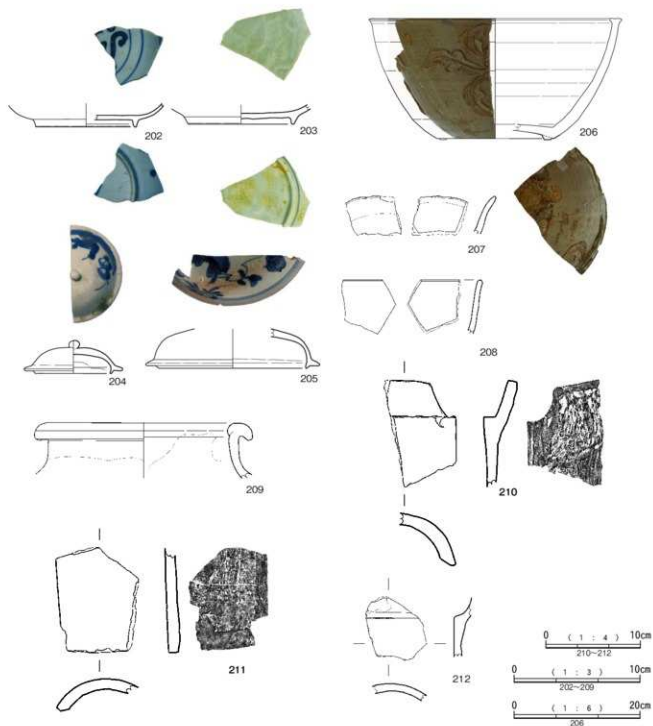
190～192は瓦である。190は陶器丸瓦である。191は左巻巴文の軒丸瓦で、192は橘文と考えられる軒丸瓦である。(69・154と同范か)。

SX12 (第35・39図)

検出状況 IVa層面で検出された。

形状・規模 幅約55cm×長さ400cm×約35cmで、調査区外に延びる。

出土遺物 193は堂平窯の鉢と考えられる。全体的に強



第42図 V層出土遺物

い二次焼成を受けており、口唇部には貝目が残る。

(4) 瓦溜2 (第40・41図)

検出状況 調査区2の南西角で検出された。

形状・規模 約2mの不定形で一部に瓦が集中していた。

埋土 掘り込みなどは確認されず、瓦周辺には焼土や炭化物・漆喰片が広がっていた。

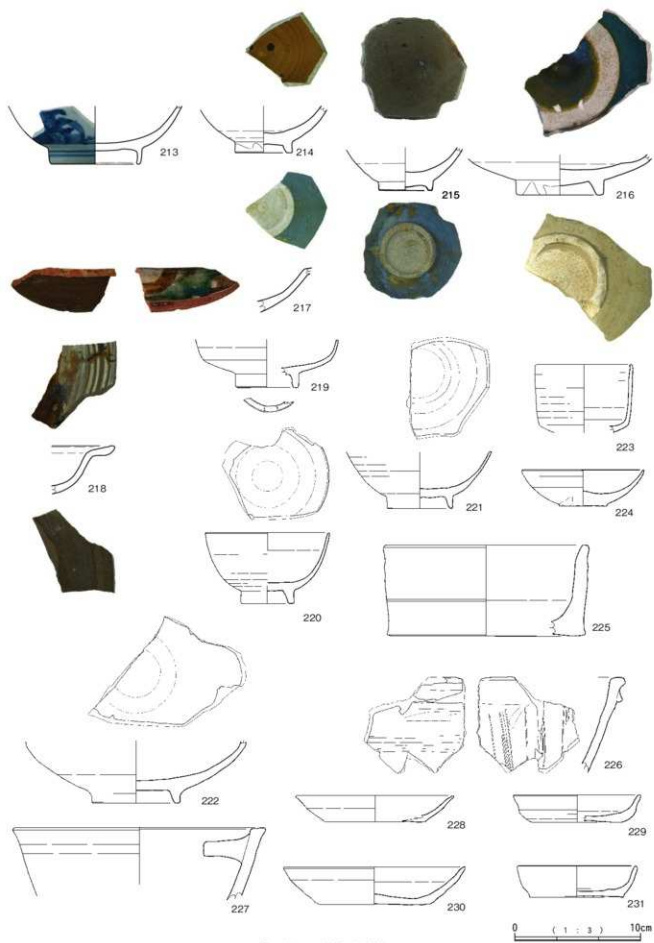
出土遺物

被熱した瓦のほか、焼けた礫等が出土している。194

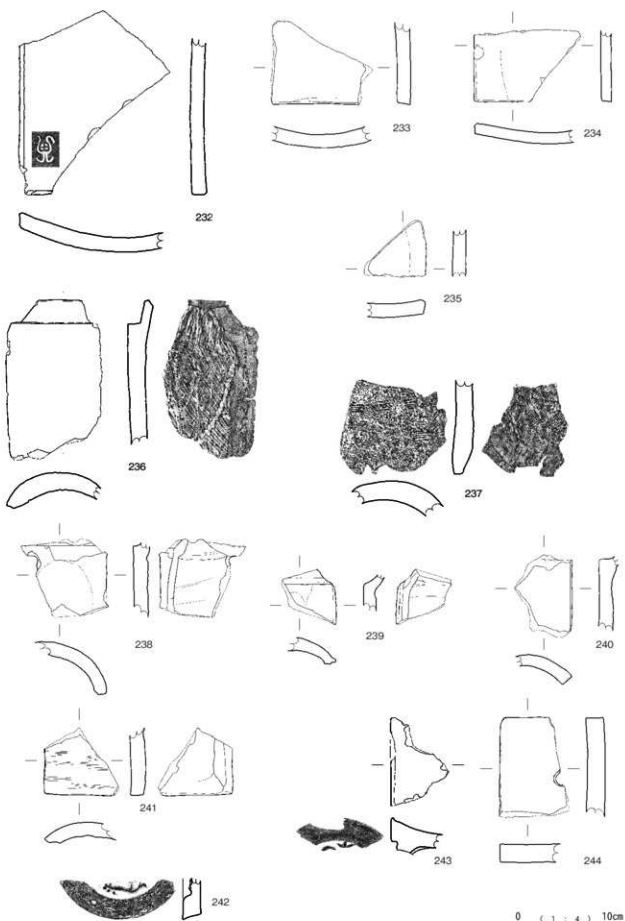
～201は瓦である。194は陶器平瓦で、軸がハート形に施軸される(田之浦窯か)。195～199は丸瓦で、196は内面に斜め方向の切り離し痕が明瞭に残る(コビキ丸か)。200・201は巴文の軒丸瓦である。

(5) V層出土遺物 (第42図)

202～205は磁器である。202・203は皿で、203は内面が印花文である。204・205は蓋で、草花文が施文され、底部が露胎する。206は堅野窯系の大鉢で、外面に草花



第43图 IV层出土遗物 1



0 (1 : 4) 10cm

第44図 IV層出土遺物2



第45図 II層検出凝灰岩布地業（建物基礎）

文の隅文を持ち、底部には脚がつくようである。

207・208は中世青磁である。207は桜花皿、208は碗である。209は堂平窯系の壺である。210～212は丸瓦である。212は陶器丸瓦である。

4 IV層（第43・44図）

IV層は焼土・炭化物・漆喰が非常に多く混じった、硬質層である。調査区全体に見られ、特に北側に厚く残存していたが、遺構等は確認できなかった。遺物は出土しているが、二次焼成を受けたものが多い。埋土に焼土や炭化物が多量に含まれていることや層堆積状況から火事等処理層（造成）と想定される。

（1）出土遺物

213は肥前の磁器碗である。総軸で、外面には草花文をもつ。214～218は肥前の陶器である。214～216は内野山窯系で、外面および内面より緑銅軸が施軸される。

217・218は唐津（武雄）の鉢で、内面に白化粧土の三鳥手と鉄軸・緑銅軸で施文される。

219は野野窯系の陶器碗である。220～224は加治木・始良系（龍門司窯）の陶器である。220・221は蛇の目軸割りの碗である。222は鉄軸の大型碗で、胎土はやや粗く、黒色粒を多く含む。223は筒形碗で表面には輻目目を明瞭に残す。224は灯明皿である。225は窯道具の陶製のサヤである。226は山元窯の播鉢で、口縁部のみ褐色の鉄軸が施軸される。胎土には白色粒が非常に多く含まれ特徴的である。

227は瓦質土器の五徳である。228～231は土師器である。230・231は強い二次焼成を受けている。230は内面にタケル状の煤が付着している。

232～244は瓦である。232～235は平瓦で、234・235は陶器瓦である。236～241は丸瓦で、238～241は陶器瓦である。242・243は陶製の軒丸瓦で堂平窯産と考えられる。244は海風瓦である。

5 III層（第46図）

焼土・炭化物を多く含む硬質なII層下に検出されたIII層は砂層であった。海砂のような層で、調査区全体で見られたが、比較的南側が厚く残存していた（約20～30cm）。遺構等は確認できなかったが、試掘調査時のトレンチ（T2）で瓦片が出土している。

（1）試掘調査トレンチ2（T2）

検出状況 調査区の西の花壇部分にトレンチを設定し、掘り下げIII層面（表土下150cm）で大量の瓦が出土した。
出土遺物 出土した遺物の大半は瓦で、薩摩焼や陶磁器も少量出土した。

245は平瓦で「七」のスタンプをもつ。246は丸瓦で、247は軒丸瓦、248は上付三葉文の軒平瓦である。249、250は鬼瓦である。

第5節 近代以降の調査成果

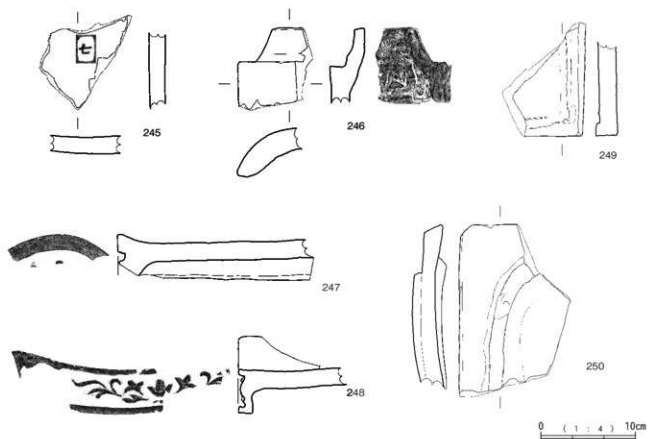
1 II層（第45・47・48図）

II層は炭化物や焼土・漆喰片を多く含む褐色土で、調査区全体で確認された。残存が良好な所で約20cm堆積しており、非常に硬質であったことから、造成土と考えられる。

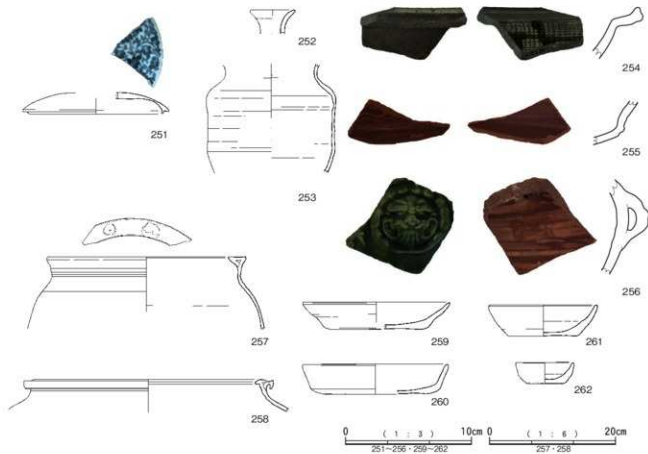
II層からは方形の凝灰岩の地業が検出された。残存状況が良い所で幅72cm、厚さ約50cm程度で鹿児島城跡に向かって平行して方形に位置していた。検出された地業間幅は約5.7m、長さは約16.8mであった。

地業の方向や規模から考えて、おそらく明治27（1885）年に設立された高等小学校の校舎基礎と想定される。その校舎は昭和10～13（1935～1938）年頃に撮影されたと思われる第七高等学校の全景写真で確認できる（第2章参照）。

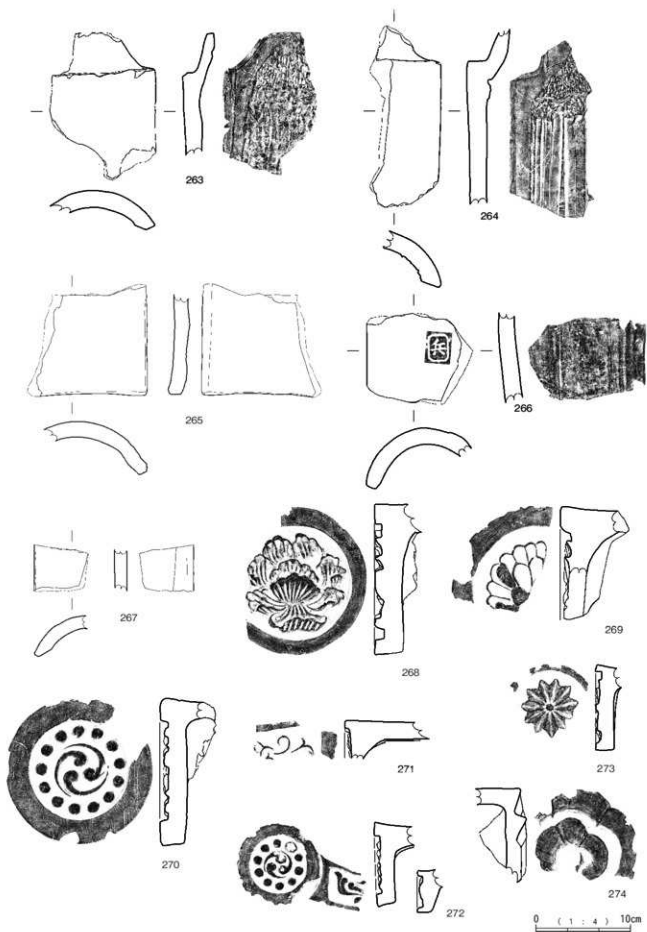
また、この基礎を高等小学校の校舎とすれば、建物基礎はII層を切っていることから明治27（1885）年より古いと考えられる。したがって、II層は廃置県後に設置された練兵所時代の造成面に相当する可能性が高いと考



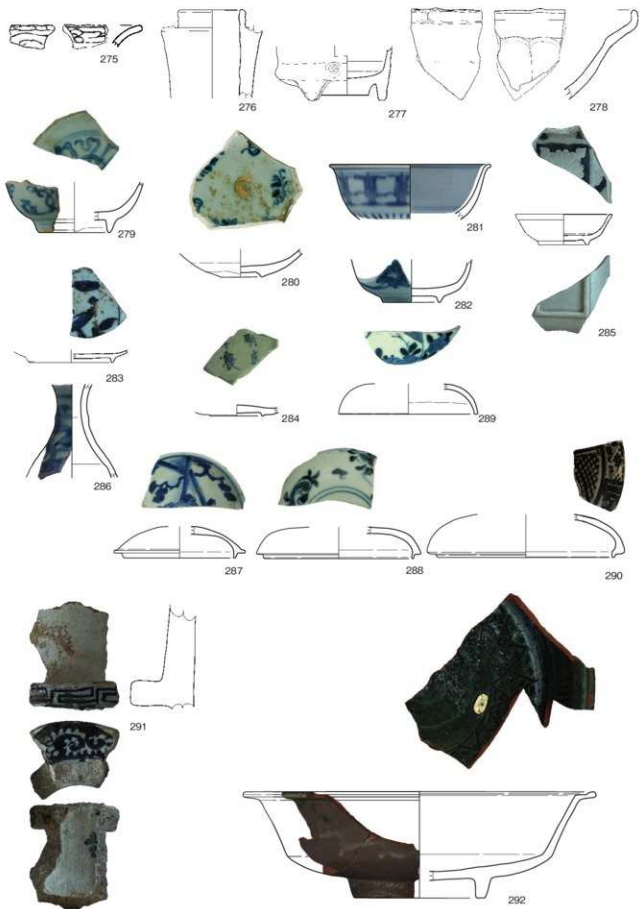
第46圖 Ⅲ層出土遺物 (T 2)



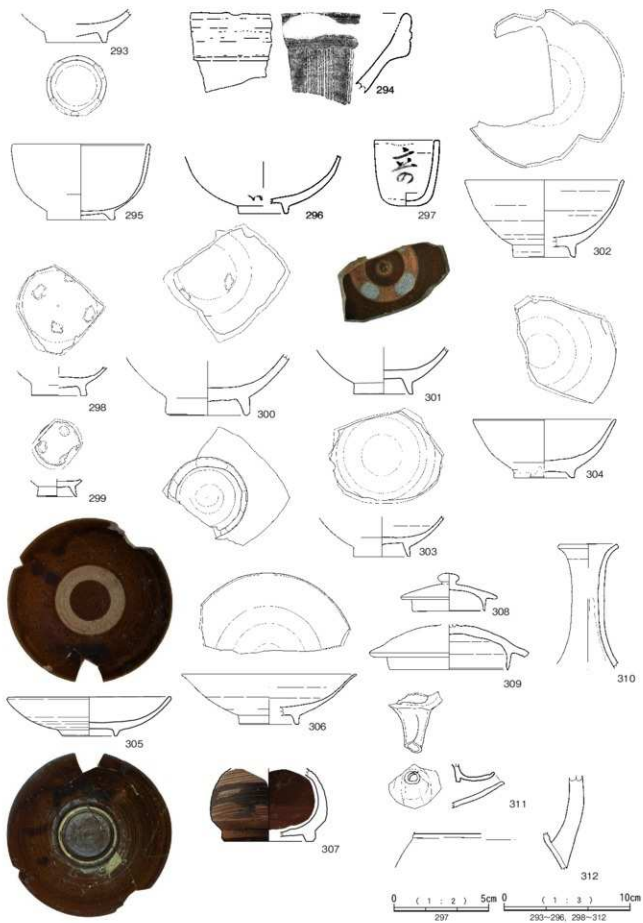
第47圖 Ⅱ層出土遺物 1



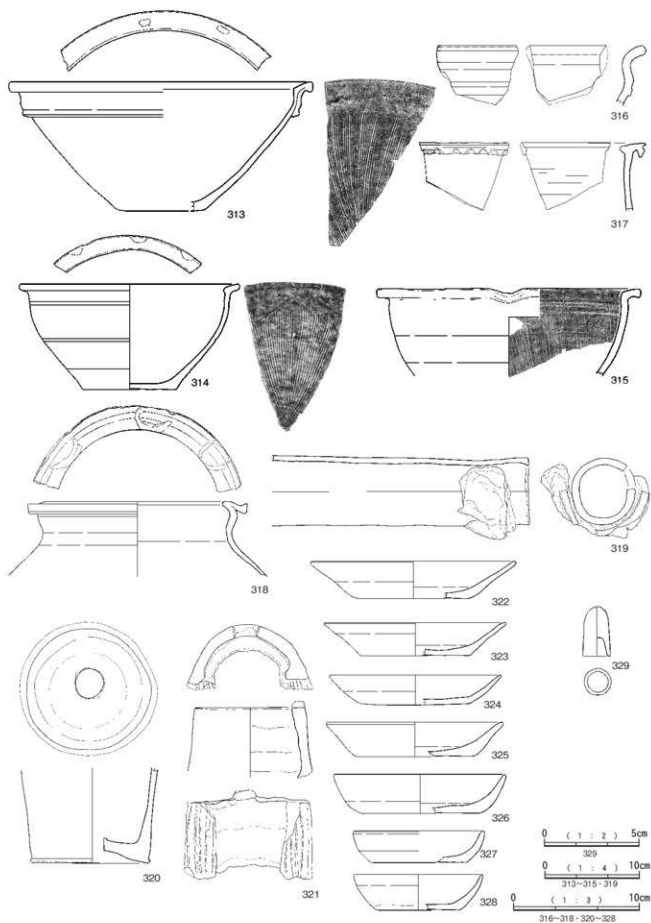
第48圖 I層出土遺物2



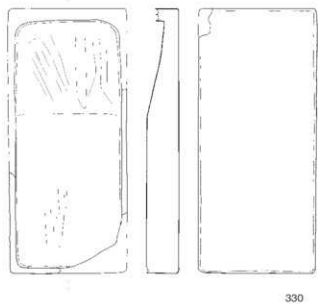
第49圖 I層出土遺物 1



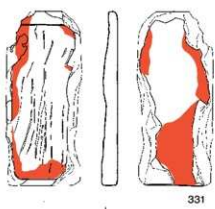
第50図 I層出土遺物2



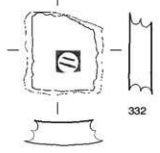
第51図 I層出土遺物3



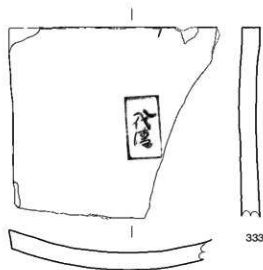
330



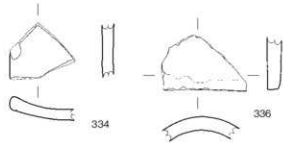
331



332

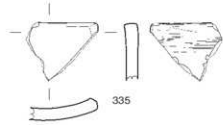


333

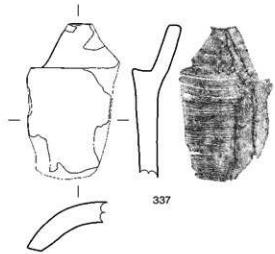


334

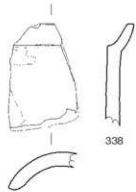
336



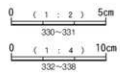
335



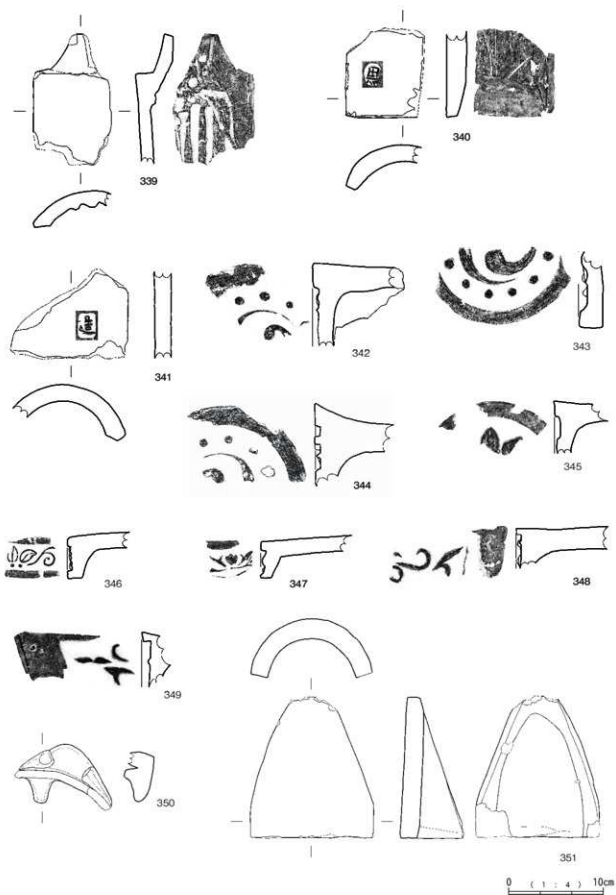
337



338



第52図 I層出土遺物4



第53図 I層出土遺物5

えられる。

(1) 出土遺物

251は草花文が施文される磁器の蓋である。254・255は肥前系の陶器である。254は唐津(武雄?)の鉢で、内面に白化粧土と鉄軸で三鳥手が施文される。255は外面に波状文をもつ鉢で、表面には赤い鉄軸が施軸される。

256は瀬戸の緑軸瓶で、獅子文の把手を貼り付けている。透明度の高い緑軸(呂宋釉)が外面に厚く施軸され、内面は露胎する。

252は中世青磁の小壺と考えられる。257・258は堂平窯系の壺である。257は口縁部を内側に折り曲げ、口唇部に貝目を残す。258は外面に折り曲げ、肩部が張る。253は加治木・始良系(山元窯)の壺で、黄鉛釉が施軸され、内外面に轆轤目を明瞭に残す。胎土は精緻で不純物が少ない。

259~262は土師器である。259・262は二次焼成を受け、部分的に変色している。

263~274は瓦である。263~267は丸瓦である。264は内面に縄目や工具痕が明瞭に残る。266は「兵」のスタンプをもつ。267は陶器瓦である。

268~270は軒丸瓦である。268・269は牡丹文、270は右巻巴文をもつ。271は軒平瓦、272は軒杖瓦である。273は小菊瓦、274は鬼瓦の雲文部分と考えられる。

2 I層(第49~53区)

調査区のアスファルトを除去するとコンクリートの建物基礎を伴う攪乱層(I層)が確認された。セメント片のほか、炭化物や焼土も混ざっており、被熱を受けたガラス片なども多く出土した。コンクリートの建物基礎は昭和初期の校舎基礎の可能性が考えられる。

埋土中からは、学校に関連するような陶製のバレットなどの近現代遺物のほか、中世~近世遺物も多く出土した。ここでは中世~近世相当遺物を中心に報告する。

(1) 出土遺物

275~277は中世青磁である。275は桜花皿で、278は盤である。276は口縁部(肩部?)が欠損しているため、全形は不明だが花生・瓶に近い器種と想定される。277は脚付の香炉もしくは袋物の可能性が考えられる。

279・280は青花である。279は碗で、皿付が細く、高台皿~皿付を軸刺ぎする。283は小野分型E群の皿である。280は皿C群の碁筒底で、内面には草花文が施文される。281~285は肥前系の磁器である。

281・282は碗で、284は皿で内面見込みに大明成化年製の銘款が入る。286は瓶で、285は19世紀代の角皿である。290は宋胡禄の蓋である。291は瀬戸の陶製便器である。

292・293は肥前の陶器である。292は外面に白化粧土、内面に銅緑釉で象嵌文様が施文される鉢である。内面見込みと皿付には目跡が残る。

293は碗で、内外面に銅緑釉が施軸され、皿付には目

跡を残す。294は備前の鉢である。

295~297は野野窯系の陶器である。296は碗で、体部には千鳥文をもつ。297は用途不明の小型の筒形環である。透明釉が施軸され、外面には「立の」と描かれており、口縁部~内面は露胎、底部も輪状に軸刺ぎされている。

298~312は加治木・始良系(山元窯・龍門司窯)の陶器である。298~300は目跡で黄鉛釉が施軸される山元窯系の碗である。

301~304の碗、305・306の皿は蛇の目軸刺ぎで龍門司窯系のものである。301は蛇の目と目跡を両方もっている。初期龍門司窯の資料に類似がある。304は18世紀後半のもので、黒味が強い鉄軸が施軸され、高台が露胎する。307は19世紀代の壺で、外面に白化粧土の刷毛目文と鉄軸で施される。

309~320は薩摩焼(堂平窯・苗代川窯)である。310は徳利で、311は片口鉢の注口で堂平1期のものである。312は把手付の水注で、堂平窯産の可能性もある。313~316は播鉢で、313・314は堂平窯系、315・316は苗代川窯系のものである。317・320は横木鉢で、318は壺で、器壁が薄く、内面にわずかに当て具痕を残す。口唇部には貝目を残す。

319は苗代川窯系の土管であり、明治相当のものと考えられる。土管接合部をモルタルで接着している。

321は瓦質土器の五徳である。半分欠損しており、接合痕に沈線で傷をつけ、接合している製作技法が窺える。322~328は土師器である。322~325は外方向に直線的に立ち上がる環である。329はエンフィールド銃の銃弾である。

330・331は硯である。330は青灰色系の硯で、331は小型の灰色の頁岩製である。331は二次加工され打ち欠かれています。表面には赤色墨が付着している。

332~335は平瓦である。334・336は陶器瓦である。336~341は丸瓦である。337は内面に刷毛目状の調整痕が残る。

340・341はスタンプをもつ。342~345は軒丸瓦である。344は瓦当貼り付け部が水平ではなく、曲線を呈す。345は菊文と考えられる。346~349は軒平瓦である。346は上向三葉文で葉脈が表現されている(長崎瓦か)。

350は鬼瓦の牙部分と考えられる。351は輪違瓦である。

第4表 近世の遺物1 (陶磁器)

種別 品目 番号	品名	種類	形状	金素色			マンセル	釉色		胎色		文様等	技法/胎地	産地	実家	年代	備考			
				口徑	底径	高さ		色名	マンセル	胎色	胎地									
7	1	瓦	磁器	瓶	-	-	-	灰白	5Y7/1	透明釉	絞釉	-	-	-	中国	鎌倉末	14c~	-		
2	1	瓦	陶器	楕球	-	-	-	灰白	5Y7/1	透明釉	絞釉	-	-	-	中国	鎌倉末	15c~	-		
13	18	P5	陶器	楕球	5.2	-	-	褐色	2.5YR5/3	無釉	全面露胎	-	-	-	中国	鎌倉末	15c~	-		
19	P5	陶器	楕球	瓶	-	-	-	灰赤	2.5YR6/2	反釉	口縁縁飾部	黄茶	BYR2.5/1.5	-	口縁部・肩	中国	安平	17c中	安平2期	
23	SD1	磁器	瓶	11.2	-	-	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	ブルーウォッシュ	3P88.5/1.0	華文文	-	中国	景德鎮	17c~	-	
24	SD1	磁器	瓶	瓶	-	-	-	灰白	10B7/2	透明釉	絞釉	内(内)赤の子色 内(内)アイスター ホワイト	5Y9.0/2.0 5Y9.0/1	法文文	-	中国	漳州窯?	17c~	磁器右肩 破	
25	SD1	磁器	瓶	10.6	4.4	6.4	-	灰白	2.5Y7/1	透明釉	絞釉	アイスター	5Y7.5/1.0	山本文	-	發行物部	肥前	17c中	-	
26	SD1	磁器	瓶	12.4	4.4	2.9	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	パールホワイト	N8.5	華文文	-	發行物部	肥前	17c中	17c中	
27	SD1	磁器	瓶	13.2	8.4	3.7	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	桜~オリーブ	588.5/2.0 6P85.0/10.0	華文文	-	發行物部	中国	-	17c中	
28	SD1	磁器	瓶	12.8	5	2.8	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	内(内)パール ホワイト(内)藍 パールホワイト ストラス・オリーブ ホワイト	N8.5- 3P83.5/5.5 N8.5N8.5	華文文	-	發行物部	肥前	17c中	17c中	
29	SD1	磁器	瓶	8	-	-	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	桜白	588.5/2.0	地方学文 誌・論文	-	-	肥前	17c中	-	
30	SD1	磁器	瓶	8.2	4.2	6.5	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	フロステイ グレイ	307.5/1.0	華文文	-	發行物部	肥前	-	-	
31	SD1/V	陶器	鉢	11.4	-	-	褐色	7.5YR6/1	絞釉	發行~赤台内 露胎	黄特色	4R2.0/1.5	-	-	發行~赤 台内露胎	肥前	17c中	-		
32	SD1/ SD2	陶器	蓋	直径 11.2	6	-	褐色	5YR6/6	絞釉	底~内露胎	うくしょう	305.0/5.0	-	-	肥前下屋	-	18c~	-		
33	SD1	陶器	楕球	-	-	-	褐色	5YR6/6	絞釉	内(内)口縁部 ~黄・土台露 胎	アンチックブ ラウン	4YR3.0/6.0	-	-	-	肥前	17c中	-		
34	SD1	陶器	鉢	-	-	-	褐色赤	2.5YR3/2	絞釉	内(内)縁部上 台~内露胎	黄茶	6YR2.5/1.5	法文	三手半(白 土手製)	-	肥前	-	-		
35	SD1	陶器	内付	8	-	-	灰白	5Y8/1	透明釉	絞釉	内(内)パール ホワイト アイスター	N7.5 6Y7.5/1.0	華文文	鉄粒	-	志保?	17c?	-		
36	SD1	陶器	瓶	13.3	5.3	6.55	-	黄	2.5Y7/8	黄絞釉	絞釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	-	肥前自製	鎌倉	17c中	17c中		
37	SD1	陶器	瓶	13.4	4.8	5.9	-	灰白	2.5Y8/1	黄絞釉	絞釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	-	肥前自製	鎌倉	17c中	17c中		
38	SD1	陶器	瓶	8.6	5	7.7	-	灰白	N8/1	黄絞釉	絞釉	黄特色	4R2.0/1.5	-	-	鎌倉	17c中	17c中		
39	SD1	陶器	小壺	7.3	-	-	灰白	N8/1	黄絞釉	内(内)口縁部 のみ露胎	内(内)キヤ ム(内)グ ールド	2Y4.0/5.5 2Y5.5/10.5	緋緋目	-	-	鎌倉	17c中	17c中		
40	SD1	陶器	仏具	-	7	-	灰白	2.5Y8/1	黄絞釉	内(内)露胎 底・内露胎	黄茶	8YR2.5/1.5	緋緋目	-	-	鎌倉	17c中	-		
41	SD1	陶器	鉢	10.6	8.6	10.6	褐色	10YR6/2	反釉	口縁縁飾部	シダーグリー ン	6Y2.5/1.5	-	-	内面:タテ 半露,内 面:黄・灰 土	-	鎌倉	安平	17c中	-
42	SD1	陶器	鉢	21.4	-	-	褐色赤	5YR3/2	反釉	口縁縁飾部	モスグリー ン	30Y5.5/5.5	-	-	口縁部 縁部・内 面・底・ 底・内露	-	鎌倉	安平	17c中	-
43	SD1	陶器	鉢	31.4	26.6	8.45	褐色	2.5YR6/2	反釉	口縁縁飾部	内(内)パー ルホワイト グレイ(内)シ ンダーグ リーン	N7.5 N7.5 5Y2.5/1.5	-	口縁部 縁部	肥前自製	鎌倉	安平	17c中	-	
44	SD1	陶器	鉢	30	19	6.8	褐色	2.5YR4/2	反釉	口縁縁飾部	エボニー	6Y3.0/0.5	-	口縁部 縁部	鎌倉	安平	17c中	-		
45	SD1	陶器	片口 鉢	22	-	-	褐色	2.5YR4/2	反釉	口縁縁飾部	黄茶	5Y2.0/0.5	-	-	-	鎌倉	安平	17c中	-	
46	SD1	陶器	瓶	44	-	-	褐色赤	2.5YR6/6	反釉	口縁縁飾部	アイスター エボニー	5Y7.5/1.0 5Y3.0/0.5	緋緋赤	口縁部 縁部	-	鎌倉	安平	17c中	-	
47	SD1	陶器	瓶	38.6	-	-	褐色	5YR5/4	反釉	口縁縁飾部	オリーブド ラフ	6Y4.5/2.0	-	口縁部 縁部	-	鎌倉	安平	17c中	-	
48	SD1	陶器	瓶	46.2	-	-	褐色	5YR5/3	反釉	口縁縁飾部	-	-	-	-	口縁部 縁部・内 面・底・ 底・内露	-	鎌倉	安平	17c中	-
49	SD1	陶器	瓶	32.4	-	-	褐色	10YR6/4	反釉	口縁縁飾部	内(内)パー ルホワイト グレイ(内)シ ンダーグ リーン	N7.5 30Y3.0/0.5	-	口縁部 縁部	-	鎌倉	安平	17c中	内面二次 焼成	
50	SD1	陶器	瓶	15	-	-	褐色	5YR5/1	反釉	口縁縁飾部	トープ	4YR3.0/1.0	-	-	-	鎌倉	安平	17c中	-	
51	SD1	陶器	楕球	-	11.3	-	褐色	10YR6/1	反釉	絞釉	黄茶	5Y2.0/0.5	-	-	内面:黄・ 土	-	鎌倉	安平	17c中	-
95	SD2	磁器	瓶	4.5	-	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	ブルーウォ ッシュ	3P88.5/1.0	華文文	-	中国	景德鎮	17c~	磁器: 破?		
96	SD2	磁器	楕球	瓶	-	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	黄茶・ブルー ウォッシュ	3P82.0/5.0 3P88.5/1.0	華文文	-	中国	景德鎮	17c~	-		
97	SD2	磁器	瓶	13.6	6.4	3.5	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	シルバー グレイ	N7.5	華文文	-	發行物部	肥前	17c~	二次焼 成	
98	SD2	磁器	瓶	直径 11.4	4.1	-	灰白	N8/1	透明釉	絞釉	桜白	588.5/2.0	華文文・ 胎子文	-	-	中国?	-	17c中	-	
99	SD2	磁器	瓶	6.1	-	-	灰白	N8/1	透明釉	内面下露胎	パールホワイト	N8.5	華文文?	-	發行物部	肥前	-	17c~	-	
100	SD2	陶器	中皿	21.6	-	(2.3)	灰白	5Y7/1	絞釉 絞釉・絞 釉・口縁部 縁飾部	絞釉・絞 釉・口縁部 縁飾部	オリーブグ リーン・キ ャム・ス トラス・キ ャム	30Y3.5/5.0 -588.5/5.0 8YR2.5/1.5 4YR5.5/6.5	内面露胎 華文文	-	-	肥前	武雄	17c~	-	
101	SD2	陶器	瓶	-	-	(3.7)	灰白	2.5Y8/1	絞釉	内面: 絞釉 内面: 絞釉 内面下露胎	内(内)オー リーブグ リーン(内) 赤の子色	30Y3.5/5.0 5Y9.0/2.0	-	肥前自製	-	肥前	内野山	17c中	-	
102	SD2	陶器	楕球	鉢	-	-	褐色	5YR5/3	絞釉	絞釉	黄茶	6YR2.5/1.5	新編花 文誌文	-	-	肥前	-	17c中	-	
103	SD2	陶器	瓶	11.3	4.5	5.85	灰白	2.5Y8/1	透明釉	絞釉	アイスター	6Y7.5/1.0	-	黄入	發行物部	鎌倉	寛政	17c中	-	

第5表 近世の遺物2 (陶磁器)

館名 収蔵番号	品名 種類	時期	品名			胎土色		胎土色		胎土色		装束	技法・特徴	高度/直径	産地	窯	年代	備考		
			口径	底径	高さ	色	マンセル	胎土	胎土	色	マンセル									
104	SO2	陶器	碗	7.9	4	5	灰白	5Y8/1	透明釉	絞胎	アイビーネ ホワイト	5Y9D/1.0	千鳥文	—	豊後陶師 窯	豊野	18c~	千鳥文並 附前?		
105	SO2	陶器	碗	9.4	—	—	灰白	2.5Y8/1	透明釉	絞胎、口縁部 内面施釉胎	アイビーネ ホワイト	5Y9D/1.0	千鳥文?	豊入	—	豊野	17c~中	千鳥文並 附前?		
106	SO2	陶器	皿	10.2	6.2	2.6	灰白	7.5Y8/1	透明釉	絞胎、口縁部 施釉胎	パールホワイト	N6.5	—	—	—	豊野	豊野	17c~中	—	
107	SO2	陶器	碗	11	5.2	6.4	灰白	5Y8/1	反釉	絞胎	オキスター	5Y7.5/1.0	縦線目	—	豊後陶師 窯	山元・豊 門司	17c~中	陶質磁器		
108	SO2	陶器	碗	—	4.4	—	—	灰白	5Y8/1	反釉	絞胎	アンチックブ ラウン・黒粒	4YR3.0/6.0 ~4YR2.0/1.5	縦線目	目録	豊後陶師 窯	山元?	17c~中	施土焼 透、白粒 目、砂中 産物粒多 含む。	
109	SO2	陶器	碗	10.4	4.6	6.0	灰白	2.5Y8/2	反釉胎	高台置胎	ブロンズコ ビーブラン	5Y4D/9.5 ~5YR3.5/6.0	縦線目	目録	豊後・内 面置胎	豊野	山元	17c~中	二色焼 成、砂中 産物粒多 含む。	
110	SO2	陶器	碗	10.4	3.8	4.9	—	にじみ・黄 燻	10YR5/3	反釉胎	高台置胎	(内)ゴールド ・ブロンズ アンチックブ ラウン	5YR3.5/6.0 4YR3.0/6.0	—	絞の目録附 き	豊後・内 面置胎	豊野	豊門司	18c前	鉄台製成 品。
111	SO2	陶器	皿	10	4.4	2.6	にじみ・黄 燻	7.5Y8/3	反釉胎	胴部・底面施 胎	コービーブ ラウン・黒粒	5YR3.5/6.0 ~5YR2.5/1.5	—	目録	胴部・底 面施胎、 糸の目録	豊野	豊門司	17c~中	二色焼 成、内面 産物粒多 含む。	
112	SO2	陶器	碗	8.1	3.8	6.5	浅黄燻	10YR8/3	美胎胎	絞胎	ラセットゴ ールド	2Y4D/5.5	縦線目	—	豊後陶師 窯	山元	17c~中	—		
113	SO2	陶器	鉢	25.8	—	—	—	灰白	10YR8/1	白化粧土・透 明釉	オキスター	5Y7.5/1.0	縦線目	絞の目録附 き	—	豊野	豊門司	17c~中	初期磁器 目録、F05B 上巻参照 也。	
114	SO2	陶器	盃	10.4	—	—	—	灰白	10YR7/1	美胎胎	絞胎	ラセットゴ ールド・黒粒	2Y4D/5.5 ~5YR2.5/1.5	縦線目	口縁部施胎 目録	—	豊野	山元	17c~中	—
115	SO2	陶器	深鉢	—	8.2	—	—	浅黄燻	7.5Y8/3	美胎胎	絞胎、底面施 胎取り。	—	—	縦線目	—	糸の目録 、付録。	豊野	山元	17c~中	縦線目胎 成。
116	SO2	陶器	灯立	—	—	—	灰	2.5Y8/2	美胎胎	内面施胎、内 面置胎	(内)ゴールド ・内)ゴールド ・にじみ ・コービー ・黒粒	2Y5.5/10.5 2Y5.5/10.5 ~5Y6.0/10.5	縦線目	—	—	豊野	山元	17c~中	—	
117	SO2	陶器	灯立	—	8.6	—	—	灰白	10YR8/1	美胎胎	内面施胎、内 面置胎	コービーブ ラウン	5YR3.5/6.0	縦線目	—	豊後陶 師窯、付録	豊野	山元	17c~中	—
126	SO3	磁器	碗	9.7	3.6	5	灰白	N6/	透明釉	絞胎	ブルーメッ ション	3P8B/5.1	等線、足 跡、にじ み、(口 水)	—	豊後陶師 窯	中国? 華 北製	17c~後	磁器・土 器		
127	SO2	磁器	碗	—	3.2	—	—	灰白	N6/	透明釉	絞胎	ブルーメッ ション・濃 藍	3P8B/5.1 3P8D/5.0	外底赤土 文?	—	豊後陶師 窯	中国	華北製	17c~後	磁器・土 器
128	SO2	磁器	皿	—	4	—	—	灰白	N6/	透明釉	絞胎・豊後 陶師窯	紺白・濃 藍	5B6.5/2.0 3P8D/5.0	内面・大 柄成	—	—	中国	華北製	17c~中	磁器・大 柄成色登 載
129	SO2	磁器	皿	16.6	—	—	—	灰白	2.5Y8/1	透明釉	絞胎	マロー	5Y7.5/2.0	—	—	肥前	—	17c~後	—	
130	SO3	陶器	碗	18	5.1	4.15	浅黄燻	2.5Y8/3	透明釉	絞胎	ベージュ	5YR7.5/2.5	—	—	—	肥前	—	17c~後	—	
131	SO3	磁器	香合	7.8	3.6	3.3	灰白	2.5Y8/2	透明釉	受け部・高 台・裏面	油色	5Y6.0/6.0	—	—	高台置胎 ・内面置胎	豊野	豊野	17c~後	—	
132	SO3	磁器	鉢	10.2	5.6	7.3	灰白	5Y8/1	透明釉	絞胎	鳥の色	5Y9D/2.0	—	—	豊後陶師 窯	豊野	17c~後	—		
133	SO3	磁器	深鉢	7.8	3.8	4.8	灰白	5Y8/1	透明釉	絞胎	パールホワイト	N6.5	—	—	豊後陶師 窯	豊野	18c後半~	—		
134	SO3	磁器	碗	4.1	—	—	—	灰白	N7/	透明釉	絞胎	フロスティ ングレイ	307.5/1.0	—	見込み目録	豊後陶師 窯	山元	17c~後	—	
135	SO3	陶器	鉢	—	—	—	反釉	7.5Y8/4	鉢胎	内面・内面口 縁部施胎、内 面置胎	シダーグリー ン	5Y2.5/1.5	—	—	肥前	—	17c~後	—		
136	SO3	陶器	鉢	—	—	—	にじみ・黄 燻	5YR6/4	鉢胎	内面・内面口 縁部施胎、内 面置胎	黒茶	5YR2.5/1.5	—	—	肥前	—	17c~後	—		
137	SO3	陶器	皿	15.3	4.8	3.8	灰白	2.5Y8/1	透明釉	絞胎	パニースイ ート	2Y7.5/6.0	—	見込み目録	豊後好台 窯	肥前	—	17c~中	—	
138	SO3	陶器	碗	12.8	4.8	5.95	浅黄燻	2.5Y8/3	美胎胎	絞胎	ラセットゴ ールド	2Y4D/5.5	—	絞の目録附 き	豊後陶師 窯	豊門司	17c~後	—		
139	SO3	陶器	小碗	9	4.2	4.5	にじみ・黄 燻	7.5Y8/7/4	美胎胎	絞胎	ラセットゴ ールド	2Y4D/5.5	—	絞の目録附 き	豊後陶師 窯	豊門司	17c~後	—		
140	SO3	陶器	鉢	11	4.4	6.65	燻	5YR7/6	鉢胎	胴部・高台置 胎	濃緑色	4P2.0/1.5	—	見込み目録	豊後陶師 窯	豊門司	18c~	—		
141	SO3	陶器	碗	12.6	6.4	6.8	灰	5Y6/1	鉢胎	高台置胎	コービーブ ラウン	5YR3.5/6.0	—	見込み目録	豊後陶師 窯	豊門司	18c~	—		
142	SO3	陶器	香炉	8.6	3.9	3.5	浅黄燻	10YR8/3	反釉胎	胴部・高台置 胎、内面置胎	ラセットゴ ールド	2Y4D/5.5	—	—	豊後陶師 窯	山元	17c~後	—		
143	SO3	陶器	皿	9.6	4.5	2.3	灰	6/N	美胎胎	胴部以下露胎	ブロンズ	5Y4D/9.5	—	目録	底面露胎	豊野	初瀬陶師 窯	17c~後	—	
144	SO3	陶器	鉢	36	—	—	反釉	7.5Y8/4	鉢胎	口縁部施胎・ 目録	黒茶	5YR2.5/1.5	—	目録	—	豊野	安平	17c~後	—	
145	SO3/ SO3	陶器	盃	36.6	—	—	—	明赤燻	2.5Y8/6	反釉胎	内面施胎、 口縁部施胎・ 目録	シルバーク レイ	—	—	肥前	—	豊野	安平	17c~後	—
163	SK2	磁器	碗	10.3	3.8	5.1	灰白	5Y8/1	透明釉	絞胎・豊後 陶師窯	ワイルド ホワイト・濃 藍	309.0/1.0 3P8D/5.0	内面・高 台・内 面・白 文	—	—	豊野	豊野	18c~	—	
164	SK2/ SK1/ SK4	陶器	碗	11.6	5	6.9	灰白	7.5Y8/1	透明釉	絞胎・豊後 陶師窯	オキスター	5Y7.5/1.0	—	—	—	豊野	豊野	17c~後	—	
165	SK2	陶器	碗	10.4	4.7	5.8	灰白	2.5Y8/1	美胎胎	豊後陶師 窯	ゴールド	2Y5.5/10.5	—	—	—	豊野	初瀬陶師 窯	17c~中	—	
166	SO2/ I	陶器	鉢	20.6	8.2	11.5	浅黄燻	7.5Y8/3	美胎胎	豊後陶師 窯	(内)ゴールド ・内)黒粒	2Y5.5/10.5 5YR4.5/6.0	縦線目	絞の目録附 き・目録	—	豊野	初瀬陶師 窯	17c~中	—	
167	SK2	陶器	小盃	3.2	—	—	—	浅黄燻	2.5Y8/3	鉢胎	内面置胎	黒茶	5YR2.5/1.5	—	—	豊野	初瀬陶師 窯	17c~中	—	
168	SK2	陶器	盃	12	—	—	—	黄灰	2.5Y4/1	反釉胎	絞胎	シダーグリー ン	5Y2.5/1.5	—	—	豊野	安平	17c~後	—	

第8表 近世の遺物5 (陶磁器)

探出 場所 探出 番号	遺物 番号	遺物 種類	器種	法量				胎土色別		胎原	胎原 産地	胎物色別				高台/底 部	産地	年代	備考	
				口径	直径	高さ	色名	マンセル	胎原			胎物 色名	マンセル	鉄線等	技法/胎 原					
51	319	I	陶器	土管	7	-	-	明赤焼	2.5YR5/6	灰胎	外部施釉・内 面無施釉	ラセントコー ムド 施釉	2Y4.0/5.5 8YR2.5/1.5	-	-	-	鎌倉	自代川	18c~	
	320	I	陶器	土管 鉢	-	9.5	-	焼灰	N3/3	灰胎	外部：施釉 内面：施釉 器底：施釉	アンティックブ ラウン	4YR3/6/0	-	-	-	鎌倉	鎌門町?	18c~9c	

第9表 近世の遺物6 (土師器・瓦質土器)

探出 場所 探出 番号	遺物 番号	遺物 種類	器種	法量				胎土色別		胎原	胎原 産地	備考
				口径	直径	高さ	色名	マンセル				
13	20	PS	瓦質 土師	鉢	13.6	10	2.65	焼	7.5YR6/6			
	52	SD1	瓦質 土師	陶器	22	16	4.15	にがい骨	5YR7/4			
	53	SD1	土師器	皿	15.4	9.2	2.5	にがい骨	7.5YR7/3			
	54	SD1	土師器	皿	14	7	2.55	灰白	7.5YR6/2			
	55	SD1	土師器	皿	13.7	8.4	3.15	灰白	10YR6/1			
	56	SD1	土師器	皿	12.2	9	2.3	灰黄焼	10YR6/2			
	57	SD1	土師器	蓋	9.4	-	3.5	灰焼	7.5YR5/2			
	28	118	SD2	瓦質 土師	陶器	19.6	14.5	4.7	にがい骨焼	10YR7/2		
		119	SD2	瓦質 土師	火入	14.5	-	-	透黄焼	10YR6/3		
		120	SD2	瓦質 土師	壺伊	14.4	10.6	6.8	焼	7.5YR7/6		
121		SD2	土師器	皿	11.8	8.3	2.9	灰黄	2.5Y7/2			
122		SD2	土師器	皿	10.6	7.2	2.5	焼灰	10YR4/1			
123		SD2	土師器	皿	9.4	7.3	2.4	透黄焼	10YR6/3			
31	146	SD3	土師器	皿	10.9	8.8	2.15	にがい骨	7.5YR7/3			
	147	SD3	土師器	皿	12	9.4	2.05	焼	5YR7/6			
36	156	SK1	土師器	皿	11	8.2	2.45	灰白	10YR6/1			
39	189	SK11	土師器	皿	12	9	2.4	透黄焼	10YR6/3			
43	227	V	瓦質 土師	瓦物	20	-	-	にがい骨焼	10YR7/4			
	228	V	土師器	皿	12.4	8.2	2.3	透黄焼	10YR6/3			
	229	V	土師器	皿	10	6.6	2.2	透黄	2.5Y5/3			
	230	V	土師器	皿	14.3	8.6	3	(内) 裏(内) 透 黄焼	10YR1.7/1, 10YR6/3			
	231	V	土師器	皿	9.4	7.5	2.5	透黄焼	10YR6/3			
47	259	E	土師器	皿	11.6	7.2	2.2	透黄焼	10YR6/3			
	260	E	土師器	皿	11.6	8	2.4	透黄焼	10YR6/3			
	261	E	土師器	皿	8.6	5.4	2.5	透黄焼	10YR6/3			
	262	E	土師器	皿	4.7	3.1	1.7	灰白	10YR7/1			
	321	I	瓦質 土師	瓦物	9.7	-	-	透黄焼	10YR6/4			
51	322	I	土師器	鉢	16.2	9.4	3	灰白	7.5YR6/2			
	323	I	土師器	鉢	14.4	8.6	2.65	透黄焼	10YR6/3			
	324	I	土師器	鉢	13.6	8.6	2.4	透黄焼	10YR6/3			
	325	I	土師器	鉢	14	9.5	2.7	透黄焼	10YR6/4			
	326	I	土師器	鉢	13.6	9.3	3.15	灰白	10YR6/2			
	327	I	土師器	皿	10.4	7.6	2.6	灰白	10YR6/2			
	328	I	土師器	皿	10.2	6.4	2.9	透黄焼	10YR6/3			

第10表 近世の遺物7 (金属製品・石製品)

探出 場所 探出 番号	遺物 番号	遺物 種類	器種	法量 (cm)			備考	
				高さ	幅	厚さ		
17	56	SD1	金属製品	キセル	8.7	0.7	0.05	
	59	SD1	金属製品	キセル	6.2	1.0	0.05	
31	148	SD3	鉄製品	キセル	5.4	0.8	0.1	
51	329	I	鉄製品	銅牌	2.6	1.5	0.1	
52	330	I	石製品	硯	14.0	6.3	1.7	
	331	I	石製品	硯	9.3	4.0	0.8	

第11表 近世の遺物8 (木製品)

探出 場所 探出 番号	遺物 番号	遺物 種類	器種	高さ (cm)	a			b			c			備考
					幅	厚さ	幅	厚さ	幅	厚さ	幅	厚さ		
8	3	瓦器	瓦	27.9	4.1	3.2	2.6	2.3	-	-	-	-		
	4	瓦器	瓦	28.8	2.6	2.6	1.6	1.7	-	-	-	-		
	5	瓦器	瓦	27	2.6	2.6	2	1.9	-	-	-	-		
	6	瓦器	瓦	36	2.6	2.7	2.4	2.4	-	-	-	-		
	7	瓦器	瓦	37.5	2.4	2.4	1.9	1.8	-	-	-	-		
	8	瓦器	瓦	48	3.4	3.2	3.1	2.6	-	-	-	-		
	9	瓦器	瓦	57.7	3	3.4	1.9	1.5	-	-	-	-		
	10	瓦器	瓦	54.4	3.3	3	1.8	1.9	-	-	-	-		
	9	11	瓦器	瓦	63.6	2.8	2.6	1.9	2	-	-	-	-	
		12	瓦器	瓦	61.5	2.2	2.2	1.3	1.7	-	-	-	-	
13		瓦器	瓦	59.5	3	2.9	2	1.8	-	-	-	-		
14		瓦器	瓦	61.9	3.7	4	2.7	1.7	-	-	-	-		
15		瓦器	瓦	75.4	3.1	2.7	1.7	1.7	-	-	-	-		
21	72	SD1	瓦	56.3	4.7	4.7	3.8	3.4	-	-	-	-		
	73	SD1	瓦	61	5.5	5.8	4.1	4	2.0	2.1	-	-		
	74	SD1	瓦	76.8	5.1	4.3	3.2	2.5	-	-	-	-		
	75	SD1	瓦	80.3	6.1	5.5	5.1	4.8	-	-	-	-		
	76	SD1	瓦	82.3	4.7	4	3.2	3.1	-	-	-	-		
	77	SD1	瓦	110	4.2	4.9	3.9	4	-	-	-	-		
	78	SD1	瓦	34.6	2.8	2.8	-	-	-	-	-	-		
	79	SD1	瓦	20.7	3.4	1.35	-	-	-	-	-	-		
	80	SD1	瓦	26.4	12.3	4.5	13.3	5.1	-	-	-	-		
	81	SD1	瓦	12	3.8	3.3	2.1	1.8	-	-	-	-		
23	82	SD1	下駄	16.7	8	3	-	-	-	-	-	-		
	83	SD1	下駄	19.4	9.1	3.6	-	-	-	-	-	-		
	84	SD1	下駄	21.3	7.9	7.2	-	-	-	-	-	-		
	85	SD1	下駄	21.1	8.8	2.7	-	-	-	-	-	-		
	86	SD1	漆塗	16.6	14.5	2.1	-	-	-	-	-	-		
	87	SD1	漆塗	-	-	0.55	-	-	-	-	-	-		
	88	SD1	漆塗	-	-	0.5	-	-	-	-	-	-		
	89	SD1	漆塗	-	-	0.5	-	-	-	-	-	-		
	33	155	SK2	桶?	55.8	36	17	43.4	2	-	-	-		

第12表 近世の遺物9 (瓦)

採掘番号	遺物番号	遺物・書	種別	瓦種	長さ	幅	厚さ	瓦当：文様	遺珠数	瓦当：遺珠	瓦当幅	瓦当高	文様高	内径	外径	備考
13	16	P2	瓦	丸瓦	(9.3)	(7.5)	1.6	--	--	--	--	--	--	--	--	
	17	P4	瓦	平瓦	(21.8)	(16.0)	1.5	--	--	--	--	--	--	--	--	
	21	P5	瓦	平瓦	(14.2)	(11.3)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	22	P5	瓦	丸瓦	(15.1)	(12.2)	2.1	--	--	--	--	--	--	--	--	
18	60	SD1	瓦	平瓦	(10.9)	(10.3)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	61	SD1	瓦	平瓦	(13.4)	(7.9)	1.3	--	--	--	--	--	--	--	--	
	62	SD1	瓦	平瓦	(12.8)	(8.1)	1.5	--	--	--	--	--	--	--	--	
	63	SD1	瓦	平瓦	(17.4)	(15.4)	1.2	--	--	--	--	--	--	--	--	
	64	SD1	瓦	丸瓦	34.3	12.9	2.0	--	--	--	--	--	--	--	--	
	65	SD1	瓦	丸瓦	(10.0)	(8.0)	2.4	--	--	--	--	--	--	--	--	
19	66	SD1	瓦	丸瓦	23.1	12.9	2.1	--	--	--	--	--	--	--	--	
	67	SD1	瓦	丸瓦	(22.8)	(11.5)	1.6	--	--	--	--	--	--	--	--	
	68	SD1	瓦	丸瓦	(14.9)	(11.1)	2.4	--	--	--	--	--	--	--	--	
	69	SD1	瓦	軒丸瓦	-	-	1.6	横文	(8)	130	1.8	--	--	100	6.4	
	70	SD1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.2	華花文	--	--	--	--	--	--	--	
	71	SD1	瓦	軒平瓦	-	-	1.8	上向三葉文	--	--	--	3.8	2.3	--	--	
	90	瓦葺1	瓦	丸瓦	(10.9)	(10.7)	2.1	--	--	--	--	--	--	--	--	
24	91	瓦葺1	瓦	丸瓦	(15.5)	(10.2)	1.9	--	--	--	--	--	--	--	--	
	92	瓦葺1	瓦	丸瓦	(11.1)	(14.8)	2.3	--	--	--	--	--	--	--	--	
	93	瓦葺1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.3	遺珠三つ巴 (右巻き)	15	15.4	2.5	--	--	6.3	10.2	
	94	瓦葺1	瓦	丸瓦	(7.5)	(12.0)	(3.1)	--	--	--	--	--	--	--	--	
28	124	SD2	瓦	平瓦	(9.6)	(9.2)	2.0	--	--	--	--	--	--	--	--	
	125	SD2	瓦	丸瓦	(9.0)	(8.9)	1.5	--	--	--	--	--	--	--	--	
31	149	SD3	瓦	平瓦	(15.1)	(9.2)	1.8	--	--	--	--	--	--	--	--	
	150	SD3	瓦	平瓦	(11.6)	(8.3)	1.2	--	--	--	--	--	--	--	--	
	151	SD3	瓦	丸瓦	(14.6)	(9.3)	1.6	--	--	--	--	--	--	--	--	コビキA
	152	SD3	瓦	丸瓦	(12.5)	(12.0)	2.2	--	--	--	--	--	--	--	--	
	153	SD3	瓦	丸瓦	(16.2)	(13.4)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	154	SD3	瓦	軒丸瓦	-	-	1.9	横文	(9)	--	2.0	--	--	--	--	
36	157	SK3	瓦	平瓦	(10.2)	(13.6)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	158	SK1	瓦	陶製平瓦	(8.2)	(6.0)	1.1	--	--	--	--	--	--	--	--	
	159	SK1	瓦	丸瓦	(12.5)	(8.2)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	160	SK1	瓦	丸瓦	(11.3)	(10.4)	1.3	--	--	--	--	--	--	--	--	
	161	SK1	瓦	丸瓦	(14.3)	(9.0)	1.3	--	--	--	--	--	--	--	--	
	162	SK1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	遺珠三つ巴 (左巻き)	12	16.2	2.7	--	--	8.3	13.0	
37	170	SK3	瓦	軒丸瓦	-	-	1.8	遺珠三つ巴 (不明)	(1)	--	2.3	--	--	--	--	
	173	SK4	瓦	平瓦	(8.8)	(6.0)	1.9	--	--	--	--	--	--	--	--	
	174	SK4	瓦	軒平瓦	-	-	2.3	不明	--	--	--	(3.4)	(2.5)	--	--	
38	178	SK7	瓦	丸瓦	(13.8)	(10.8)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	
	179	SK8	瓦	軒丸瓦	-	-	3.1	遺珠三つ巴 (右巻き)	(2)	--	1.6	--	--	--	--	
39	183	SK10	瓦	陶製平瓦	(6.3)	(7.5)	1.5	--	--	--	--	--	--	--	--	
	190	SK11	瓦	陶製丸瓦	(5.2)	(5.4)	1.3	--	--	--	--	--	--	--	--	
	191	SK11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	遺珠三つ巴 (左巻き)	(7)	18.8	3	--	--	8.5	13.7	
	192	SK11	瓦	軒丸瓦	-	-	1.4	横文	(3)	--	2.1	--	--	--	--	
40	194	瓦葺2	瓦	陶製平瓦	(10.5)	(14.4)	1.7	--	--	--	--	--	--	--	--	田之清堂
	195	瓦葺2	瓦	丸瓦	(15.9)	(13.4)	1.8	--	--	--	--	--	--	--	--	
	196	瓦葺2	瓦	丸瓦	(22.3)	(13.2)	2.6	--	--	--	--	--	--	--	--	コビキA
	197	瓦葺2	瓦	丸瓦	(20.6)	(11.1)	1.4	--	--	--	--	--	--	--	--	
41	198	瓦葺2	瓦	丸瓦	(16.4)	14.5	1.8	--	--	--	--	--	--	--	--	コビキB
	199	瓦葺2	瓦	丸瓦	(14.0)	(12.4)	1.6	--	--	--	--	--	--	--	--	
	200	瓦葺2	瓦	軒丸瓦	-	-	1.2	遺珠三つ巴 (左巻き)	(4)	--	2.5	--	--	--	--	
	201	瓦葺2	瓦	軒丸瓦	-	-	1.5	遺珠三つ巴 (右巻き)	(5)	--	2.2	--	--	--	--	
42	210	V	瓦	丸瓦	(11.3)	(7.7)	1.2	--	--	--	--	--	--	--	--	

第13表 近世の遺物10 (瓦)

採出 番号	採掘・層	種類	瓦種	長さ	幅	厚さ	瓦当・文様	遺跡名	瓦当・形状	瓦当幅	瓦当高	文様高	内径	外径	備考
42	211	V	瓦	丸瓦 (11.2)	(8.8)	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
	212	V	瓦	舞踏丸瓦 (8.8)	(6.5)	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
	232	M	瓦	平瓦 (17.1)	(16.0)	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	233	M	瓦	平瓦 (9.2)	(11.0)	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
	234	M	瓦	舞踏平瓦 (7.7)	(11.2)	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
	235	M	瓦	舞踏平瓦 (6.2)	(6.7)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	236	M	瓦	舞踏丸瓦 (16.7)	(10.0)	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	237	M	瓦	舞踏丸瓦 (10.0)	(9.7)	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
	238	M	瓦	舞踏丸瓦 (8.2)	(9.1)	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
	239	M	瓦	丸瓦 (5.8)	(5.8)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	240	M	瓦	丸瓦 (8.1)	(6.1)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	241	M	瓦	舞踏丸瓦 (7.2)	(8.0)	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
	242	M	瓦	舞踏軒丸	-	2.0	-	-	-	2.4	-	-	-	-	
	243	M	瓦	舞踏軒丸	-	2.0	-	-	-	2.6	-	-	-	-	
	244	M	瓦	海蟹瓦 (10.7)	(7.5)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	246	II	瓦	平瓦 (8.3)	(7.8)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	246	II	瓦	丸瓦 (8.8)	(8.0)	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	247	II	瓦	軒丸瓦	-	(2.2)	-	(2)	-	1.6	-	-	-	-	
	248	II	瓦	軒平瓦	-	1.9	上向山家文	-	-	4.7	3.2	-	-	-	
	249	II	瓦	丸瓦 (12.0)	(8.8)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	250	II	瓦	丸瓦 (18.3)	(11.9)	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	263	II	瓦	丸瓦 (15.6)	(9.3)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
	264	II	瓦	丸瓦 (18.6)	(6.2)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	265	II	瓦	舞踏丸瓦 (11.9)	(12.9)	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
	266	II	瓦	丸瓦 (9.5)	(11.3)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	267	II	瓦	舞踏丸瓦 (5.0)	(5.8)	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	268	II	瓦	軒丸瓦	-	3.0	牡丹文	-	16.0	1.5	-	-	12.2	11.0	
	269	II	瓦	軒丸瓦	-	2.9	牡丹文	-	-	2.0	-	-	-	-	
	270	II	瓦	軒丸瓦	-	2.9	蓮珠三つ巴 (右巻き)	13	15.8	2.2	-	-	10.5	5.8	
	271	II	瓦	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	272	II	瓦	軒丸瓦	-	2.1	蓮珠三つ巴 (右巻き)	10	9.0	1.5	-	-	6.1	3.0	
	273	II	瓦	小葉瓦	-	2.0	菊文	-	9.1	0.6	-	-	7.5	5.8	
	274	II	瓦	丸瓦	-	2.3	亀瓦書	-	-	-	-	-	-	-	
	332	I	瓦	平瓦 (8.7)	(8.3)	2.8	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	333	I	瓦	平瓦 (20.0)	(21.5)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	334	I	瓦	舞踏平瓦 (5.8)	(6.9)	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
	335	I	瓦	舞踏平瓦 (6.2)	(7.6)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	336	I	瓦	舞踏丸瓦 (5.9)	(9.0)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	337	I	瓦	丸瓦 (16.3)	(9.4)	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
	338	I	瓦	舞踏丸瓦 (11.5)	(7.4)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	339	I	瓦	丸瓦 (14.0)	(8.3)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	340	I	瓦	丸瓦 (9.5)	(8.2)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	341	I	瓦	丸瓦 (9.5)	(12.5)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	スタンプ
	342	I	瓦	軒丸瓦	-	2.4	蓮珠三つ巴 (左巻き)	(4)	-	2.5	-	-	-	-	
	343	I	瓦	軒丸瓦	-	2.6	蓮珠三つ巴 (右巻き)	(6)	-	1.6	-	-	-	-	
	344	I	瓦	軒丸瓦	-	2.5	蓮珠三つ巴 (右巻き)	(4)	-	2.2	-	-	-	-	
	345	I	瓦	軒丸瓦	-	2.0	菊文	-	-	1.8	-	-	-	-	
	346	I	瓦	軒平瓦	-	1.5	上向三葉瓦利縁華	-	-	4.2	2.4	-	-	-	
	347	I	瓦	軒平瓦	-	1.1	蓮華	-	-	4	2.6	-	-	-	
	348	I	瓦	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	349	I	瓦	軒平瓦	-	2.3	裏利縁華	-	-	-	-	-	-	-	
	350	I	瓦	丸瓦	7.0	10.3	3.3	-	-	-	-	-	-	-	
	351	I	瓦	輪漣瓦	15.0	13.0	2.1	-	-	-	-	-	-	-	

第IV章 自然科学分析

1 鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)出土木製品の樹種

東都文化財研究所

はじめに

鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)から出土した木製品について、用材選択を明らかにするための樹種同定を実施した。以下、結果について報告する。

1 試料

試料は、出土した木製品5点である。

2 分析方法

資料の木取りや破損状況等を観察した上で、剃刀を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して分類群を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を第14表・第54・55図に示す。木製品は、針葉樹3分類群(ヒノキ、アスナロ、スギ)と広葉樹1分類群(スルデ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・アスナロ *Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

第14表 鹿児島城跡(火除地)の樹種同定結果

分析番号	掲載番号	種別	樹種
K036	86	漆塗産	アスナロ
K033	85	差歯下駄(露卵)	ヒノキ
K034	84	連歯下駄	スギ
K035	82	連歯下駄	スルデ
K040	83	連歯下駄	スギ

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スルデ *Rhus javanica* L. var. *chinensis* (Mill.) T. Yamaz. ウルシ科スルデ属

環孔材。孔圍部は4～5列。孔圍外への移行は緩やかで、晩材部では2～4個が塊状に複合して配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

引用文献

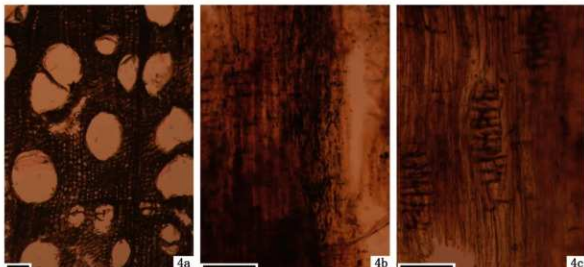
- 林 昭三,1991.日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学本質科学研究所.
伊東隆夫,1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31,京都大学本質科学研究所81-181.
伊東隆夫,1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32,京都大学本質科学研究所66-176.
伊東隆夫,1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33,京都大学本質科学研究所83-201.
伊東隆夫,1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34,京都大学本質科学研究所30-166.
伊東隆夫,1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35,京都大学本質科学研究所47-216.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
島地 謙・伊東隆夫,1982.国産木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三(日本語版監修) 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. ヒノキ (K033)
 2. アスナロ (K036)
 3. スギ (K034)
 a: 木口, b: 柃目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

第54図 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材1



4. スルデ (K035)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

第55図 鹿兒島城跡 (犬追物馬場・火除地) の木材2

2 鹿兒島城跡 (犬追物馬場・火除地) 出土試料の自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

I. 自然科学分析の概要

鹿兒島城跡 (犬追物馬場・火除地) から出土した木製品17点について自然科学分析を行った。分析内容は、樹種同定 (17点) および放射性炭素年代測定 (8点) である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近期の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したのものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料と方法

第15表に試料の詳細を示し、以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して附着した異物を除去
- 2) カミソリで木材の基本的三断面 (横断面: 木口, 放射断面: 柎目, 接線断面: 板目) の切片を作成
- 3) 生物顕微鏡 (40~1000倍) で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本の対比で樹種を同定

3. 結果

第14表に同定結果を示し、第58・59図に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

1) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。

2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管, 放射柔細胞, 放射仮道管および垂直, 水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり, 垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で, 放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では, 放射組織が単列の同性放射組織型であるが, 水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり, どちらも北海道南部, 本州, 四国, 九州に分布する常緑高木である。

3) スギ *Cryptomeria japonica* DDon スギ科

仮道管, 樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で, 晩材

部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

4) クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科

小型で丸い道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向の帯状に配列する放射孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔であり、階段の数は少なく10本ぐらいまでで、1本1本の間隔が広い。放射組織はほとんど同性であるが、上下の縁辺部のみときおり方形細胞が見られることがある。接戦断面では放射組織はほぼ同性で1~2細胞幅である。

以上の特徴からクマシデ属に同定される。クマシデ属は落葉の高木または大型の低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火災状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

6) クスノキ科 *Lauraceae*

中型から小型の道管が単独および2~数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に輪方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものがある。放射組織はほとんどが平伏細胞であり、上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で1~3細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、今回の試料は道管径以外の点が不明瞭なため、クスノキ科の同定にとどめた。

4. 所見

鹿児島城跡（犬追馬場・火除地）から出土した木製品（17点）について樹種同定を行った。その結果、マツ属複雑管束重属6点、スギ3点、クスノキ科3点、クリ2点、クマシデ属クマシデ節2点、モミ属1点が同

定された。V層栞列の6点（K005、K007、K008、K011、K012、K013）は、いずれもマツ属複雑管束重属である。また、SD1杭のうち3点（K017、K018、K020）はクスノキ科、2点（K014、K021）はクマシデ属クマシデ節、門（K024）とSD1部材（K038、K039）はスギ、SK2桶（K032）はモミ属、SD1部材（K037）とP6柱（K041）はクリである。

マツ属複雑管束重属には二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツがあり、いずれも水湿によく耐える材である。クスノキ科は概して強さ中庸で、柱などの建築部材や井戸板などに利用される。クスノキ科には耐朽性が比較的高いクスノキやタブノキも含まれ、杭にも適材であったと考えられる。クマシデ属クマシデ節は弾力性に富む強さ中庸の材であり、家具や器具、建築材に用いられる。スギは木理直通で加工が容易であり、建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。クリは重硬で耐朽性が高く水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。タンニンが多くカビを防ぐ効果もあり、柱材などの建築部材として比較的良好に利用される。モミ属は温帯性のモミと考えられ、材は耐朽・保存性は低いが、軽軟なため加工が容易である。

いずれも温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

III. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

2. 試料と方法

第16表に試料の詳細、前処理・調整法、測定法を示す。有機溶剤処理はアセトンを使用した。AAA処理は酸-アルカリ-酸処理、AMS法は加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）である。

3. 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（ ^{14}C ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第16表にこれらの結果を示し、第56図に各試料の暦年較正結果（較正曲線）、第57図に暦年較正年代マルチプロット図を示す。

(1) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

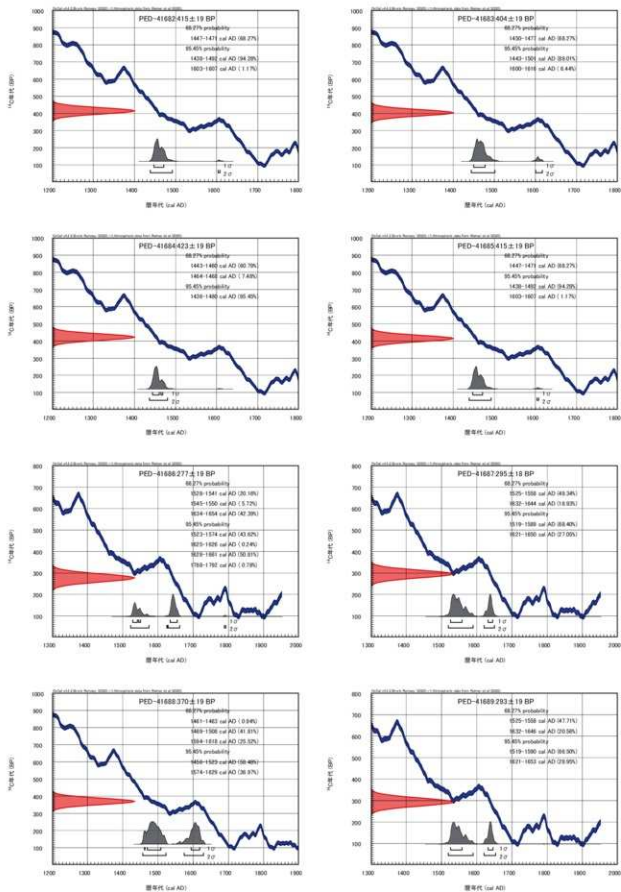
試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同

第15表 鹿兒島城跡（犬追物馬場・火除地）における樹種同定結果

試料No.	掲載番号	種類	結果（学名／和名）	
K005	10	葉層枝列	<i>Pinus subgen. Diploxyton</i>	マツ属微能管束亜属
K007	5	葉層枝列	<i>Pinus subgen. Diploxyton</i>	マツ属微能管束亜属
K008	9	葉層枝列	Pinaceae	マツ属微能管束亜属
K011	8	葉層枝列	Pinaceae	マツ属微能管束亜属
K012	14	葉層枝列	Pinaceae	マツ属微能管束亜属
K009	13	葉層枝列	Pinaceae	マツ属微能管束亜属
K014	77	SD1枝	<i>Carpinus sect. Distegocarpus</i>	クマシダ属クマシダ節
K017	75	SD1枝	Lauraceae	クスノキ科
K018	73	SD1枝	Lauraceae	クスノキ科
K020	74	SD1枝	Lauraceae	クスノキ科
K021	76	SD1枝	<i>Carpinus sect. Distegocarpus</i>	クマシダ属クマシダ節
K024	81	SD1門	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
K032	155	SK 2 株	Abies	モミ属
K037	80	SD1部材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
K038	78	SD1部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
K039	79	SD1部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
K041	-	P6柱	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ

第16表 鹿兒島城跡（犬追物馬場・火除地）における放射性炭素年代測定結果

試料No.	掲載番号	測定No. PED-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	δ 13C (‰)	14C年代 (年BP)	暦年較正用年代(年BP)	暦年代 (較正年代)	
									1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
K005	10	41682	葉層枝列	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-26.51 ± 0.26	415 ± 20	415 ± 19	cal AD 1447-1471 (68.2%) cal AD 1603-1607 (1.17%)	cal AD 1438-1492 (94.28%) cal AD 1603-1607 (1.17%)
K007	5	41683	葉層枝列	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-27.74 ± 0.23	406 ± 20	404 ± 19	cal AD 1450-1477 (68.2%)	cal AD 1443-1501 (69.01%) cal AD 1600-1616 (6.44%)
K008	9	41684	葉層枝列	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-27.96 ± 0.20	426 ± 20	423 ± 19	cal AD 1443-1460 (60.79%) cal AD 1464-1468 (7.48%)	cal AD 1436-1480 (65.45%)
K012	14	41685	葉層枝列	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-25.08 ± 0.26	415 ± 20	415 ± 19	cal AD 1447-1471 (68.2%)	cal AD 1438-1492 (94.28%) cal AD 1603-1607 (1.17%)
K014	77	41686	SD1枝	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-27.10 ± 0.21	275 ± 20	277 ± 19	cal AD 1328-1541 (20.16%) cal AD 1545-1550 (5.72%) cal AD 1634-1654 (42.39%)	cal AD 1523-1574 (43.62%) cal AD 1625-1626 (0.24%) cal AD 1628-1661 (50.81%) cal AD 1788-1792 (0.78%)
K017	75	41687	SD1枝	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-27.20 ± 0.21	296 ± 20	295 ± 18	cal AD 1525-1558 (49.34%) cal AD 1632-1644 (18.93%)	cal AD 1519-1589 (68.40%) cal AD 1621-1650 (27.05%)
K021	76	41688	SD1枝	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-29.80 ± 0.20	370 ± 20	370 ± 19	cal AD 1461-1463 (0.9%) cal AD 1469-1508 (41.81%) cal AD 1594-1618 (25.32%)	cal AD 1456-1523 (58.48%) cal AD 1574-1629 (69.97%)
K041	-	41689	P6柱	樹木	超音波洗浄 AAA処理 有機溶剤処理 AMS法	-27.46 ± 0.19	296 ± 20	293 ± 19	cal AD 1525-1558 (47.71%) cal AD 1632-1646 (20.56%)	cal AD 1519-1590 (66.50%) cal AD 1623-1653 (28.95%)



第56図 年代測定結果

位体比 (13C/12C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (14C) 年代測定値

試料の14C/12C比から、現在 (AD 1950年基点) から何年前かを計算した値。14Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差 (\pm) は1シグマ σ (68.2%確率) である。14C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

放射性炭素 (14C) 年代をより実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中14C濃度の変動および14Cの半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な14C測定値、福井県水月湖の年縞堆積物データ、サンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と14C年代の比較などにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代 (較正年代) は、14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1シグマ σ (68.2%確率) と2 σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、K005 (10) では415 \pm 20年BP (2 σ の暦年代でAD 1438~1492, 1603~1607年)、K007 (5) では405 \pm 20年BP (AD 1443~1501, 1600~1616年)、K008

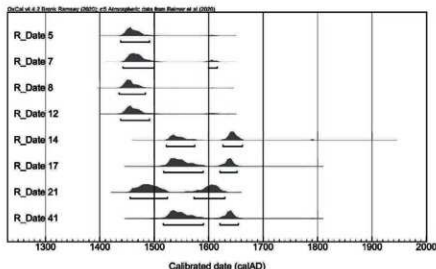
(9) では425 \pm 20年BP (AD 1436~1480年)、K012 (14) では415 \pm 20年BP (AD 1438~1492, 1603~1607年)、K014 (77) では275 \pm 20年BP (AD 1523~1574, 1625~1626, 1628~1661, 1788~1792年)、K017 (75) では295 \pm 20年BP (AD 1519~1589, 1621~1650年)、K021 (76) では370 \pm 20年BP (AD 1456~1523, 1574~1629年)、K041 (P6) では295 \pm 20年BP (AD 1519~1590, 1621~1653年)の年代値が得られた。

このうち、Ⅷ層杭列の4点 (K005 (10)、K007 (5)、K008 (9)、K012 (14)) は、暦年代がAD 1440~1480年前後の範囲で重複しており、ほぼ同一時期と考えられる (第57図)。また、SD1杭 (K014、K017) とP6柱 (K041) は、暦年代がAD 1520~1580およびAD 1620~1650年前後の範囲で重複している。

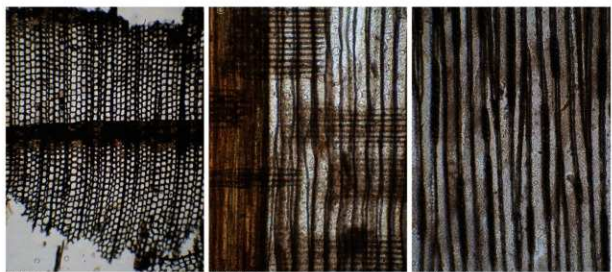
なお、樹木による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

文献

- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社、449p。
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩谷高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版、290p。
- 島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の道跡出土木製品総覧。藤山閣、296p。
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』。日本第四紀学会、p.3-20。
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニユアル。同成社、p.301-322。
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文庫集成 - 用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360。
- Paula J Reimer et al. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.1-33。



第57図 暦年較正年代マルチプロット図



横断面
モミ属 K032 SX4・SX8桶

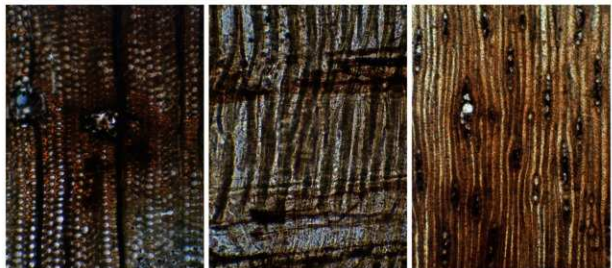
— 0.1mm

放射断面

— 0.1mm

接線断面

— 0.1mm



横断面
マツ属複維管束亜属 K005 VII層枕列

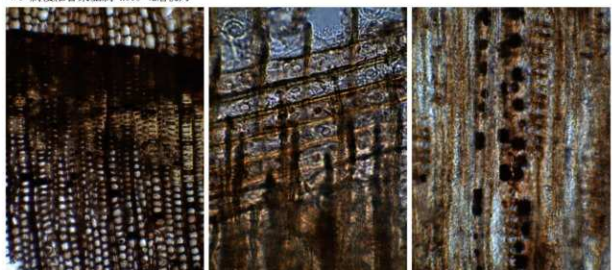
— 0.1mm

放射断面

— 0.1mm

接線断面

— 0.1mm



横断面
スギ K024 SX4門

— 0.1mm

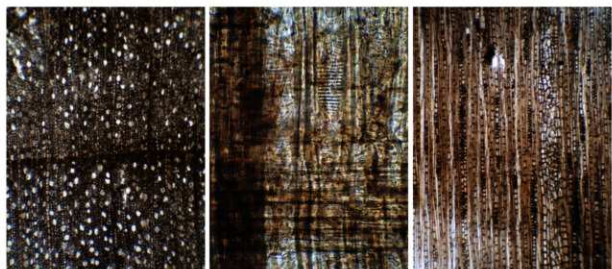
放射断面

— 0.1mm

接線断面

— 0.1mm

第58図 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材 I



横断面 0.1mm
クマシデ属クマシデ節 K021 SD3杭

放射断面 0.1mm

接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm
クリ K041 P36柱



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm
クスノキ科 K018 SD3杭



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm

第59図 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材Ⅱ

第V章 総括

第1節 調査の成果

1 中世の成果

中世相当層と考えられるⅤ層からは、調査西側で南北方向に延びる杭列と少量の遺物が出土した。32本検出された杭は、長さ約60cmの杭が中心で、樹種はマツ属であった。

Ⅴ層面では杭列以外の遺構は確認されなかったことやⅤ層が湧水する砂層で地盤的に脆弱層であったことから、粗朶のような役割をもった杭列であった可能性が高いと考えられる。

また、Ⅴ層は出土遺物（青磁碗Ⅱ類、備前鉢Ⅲ）や杭の年代測定結果から15世紀代に相当するものと考えられる。この時期は鹿児島城築城以前であり、築城以前は湧水する砂層が広がる低地であったと考えられる。

2 近世の成果

本遺跡で残存していた近世相当層はⅢ～Ⅵ層で、4面あることが確認された。各層攪乱などもあったが、調査区内で地形的な勾配はなく、平坦に堆積していた。

近世最下層のⅥ層は約20cm堆積しており、やや水分を含み硬質層で、木柱が残存している柱穴（P1～7）や杭列を伴う溝状遺構（SD1）が検出された。特に、SD1内からは中国製磁器、肥前系磁器（古伊万里）や始良・加治木系陶器（山元・元立院・初期龍門司窯）、壺平窯陶器、瓦など概ね17世紀後半～18世紀前半に相当する遺物が出土している。

SD1に伴う調査区北側に沿って出土した六角形状の杭は、約40～50cm間隔で打たれていた。いずれも完形ではなかったが、欠損部が燃えて炭化しているものが多かった。この杭は、大迫物馬場に関連する杭列の可能性が高いと考えられる（詳細は後述）。

また、Ⅵ層では木製品も多く出土しており、SD1内で下駄や部材、漆製品、瓦溜1では木片の他、棕櫚縄が多く出土した。

Ⅴ層では最も多くの近世遺構が検出された。溝状遺構（SD2・3）や溝状の不明遺構（SX1～12）、瓦溜2、柱穴群等が確認された。遺構内・包含層では中国製磁器、肥前系陶磁器（内野山・唐津・武雄等）、野野窯磁器、始良・加治木系陶器（山元・元立院・初期龍門司窯）、壺平窯陶器のほか、平・丸瓦、陶製瓦等が出土しており、Ⅵ層と同様17世紀後半～18世紀前半相当の遺物が出土している。

Ⅳ層は、焼土・炭化物・漆喰が多量に混じる硬質層であり、火事による処理層（造成面）と考えられる。遺構等は確認されなかった。本層からは、肥前系磁器・陶器のほか、加治木・始良系陶器（山元・初期龍門司）、壺平窯陶製瓦、陶製瓦（田之浦窯等）が出土している。

この火事処理層（Ⅳ層）は、①Ⅳ層以下が17世紀後半

～18世紀前半の遺物・遺構が出土していること、②鹿児島城を含めた御楼門前側の区画が火災に見舞われたのは元禄9（1696）年の大火であること、③元禄の大火後、正徳3（1713）に本丸・二之丸前の土地を明地とし、火除地としたことから、Ⅳ層は元禄の大火後に造成された処理層の可能性が高く、さらには正徳3（1713）年に設置された明地（火除地）に相当する造成層であったと考えられる。

Ⅳ層直上のⅢ層は海砂のような砂層であった。調査区全体で確認されたが、自然堆積層ではなく客土（砂）による造成面と考えられる。Ⅲ層からはT2で18世紀後半の瓦と陶磁器片が出土した。なお、近代相当のⅡ層からは18世紀後半以降の近世遺物が多く出土している。

このような成果から、近世期はⅣ層を境に、下位（Ⅴ・Ⅵ層）が17～18世紀前半、上位（Ⅲ層）が18世紀後半以降に分かれることが層堆積・遺構・遺物から確認された。

特にⅣ・Ⅵ層は前述したように、①Ⅳ層は火除地として利用するために明地に造成した際の面であること、②Ⅵ層は検出された杭列が元禄大火以前にあったとされる大迫物馬場に関連する構列の可能性が高いことが明らかとなったことは大きな成果である。

近世期が良好に残存していたのは、大迫物馬場と利用された以降、近代の学校校舎が設置されるまで、恒常的な建物が長期に渡り建てられなかったことが一因と考えられる。

以上のことから、鹿児島城御楼門正面に位置する土地の利用変遷が考古学的に重層的に明らかにできたことは重要な成果といえよう（詳細は後述）。

3 近代の成果

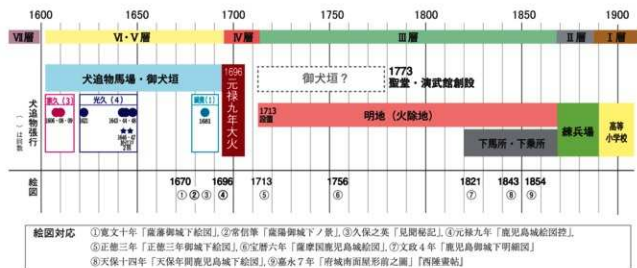
近代相当層はⅡ層で、焼土・炭化物・漆喰を多く含んだ硬質層であった。Ⅱ層では凝灰岩の方形の布地業が検出された。焼土・炭化物を含んだⅡ層はⅣ層と同様火災による処理層の可能性が考えられる。Ⅱ層では、二次焼成を受けた18世紀後半以降の遺物が多く出土している点や鹿児島城の瓦と考えられる牡丹文の軒丸瓦・鬼瓦等が出土していることから、明治6（1873）年の鹿児島城本丸・御楼門が焼失した火災の際の処理層（造成層）と想定される。

この造成面は練兵場として利用された後、西南戦争を経て、明治27（1894）年に高等小学校が設置される。Ⅱ層で検出した布地業はこの校舎の基礎と考えられる。

第2節 近世の遺物

1 始良・加治木系陶器、壺平窯系陶器

本遺跡で出土量が多く、主体であったのは17世紀後半～18世紀前半の陶磁器である。特に加治木・始良系陶磁



第60図 土地利用変遷図

器が非常に多く出土したことは本遺跡の特徴の一つである。総軸の黄鉛軸が施軸され、器壁が薄く、轆轤目を明瞭に残す。

碗等では内面見込みに目跡が残る山元窯や胎土が灰黒色で黒色粒を含み、鉄軸が施軸される元立院窯のもの等が出土している。

その中でも山元窯の特徴(轆轤目や薄手の器壁、釉調等)を持ちつつも、蛇の目軸割きをもつ初期龍門司窯と考えられる遺物が目立つ。これらは龍門司古窯の最下層遺物(始良市教委2018)に類似するが、それらよりも山元窯の特徴が強く、より古相のものと考えられる。

特にSX2出土の166やI層出土の301は内面見込みに蛇の目軸割きと目跡を残すもので、焼成技法が同時並存していたことが窺える資料である。龍門司古窯の最下層遺物はいずれも蛇の目軸割きであることから、本遺跡の資料は山元窯から龍門司窯への移行期の資料であると考えられる。

また、褐色の胎土で、白色粒を多く含む山元窯の播鉢(IV層出土:226)はこれまで窯跡のみでしか出土例がなく、消費地遺跡での出土は本遺跡が初例である。

以上のことから、初期の始良・加治木系陶器が本遺跡のような消費地遺跡でまとまって出土する事例は、本県ではなく、陶磁器の流通を示す好例といえる。

そのほか壹平窯の大型貯蔵具(甕や鉢)等の出土も多い。器壁が薄く、内面に当て具痕を明瞭に残すもので、壹平窯1期のものも散見されるが、2期が多い傾向にある。IV層より上位のI～III層からは、18世紀後半以降の龍門司の化粧土・二彩等、薩摩磁器、苗代川窯、肥前陶磁器等が多く出土している。

2 瓦

陶磁器と同様、瓦も多量に出土した。I～III層は、18世紀後半以降の瓦が主体で、平・丸瓦、軒丸・軒平瓦のほか、海鼠瓦や鬼瓦などが出土している。軒平・軒丸瓦

も比較的尺寸も大きく、巴文や牡丹文があり、鹿児島城本丸や御楼門で葺かれていた瓦の可能性が高い。

IV～VI層から出土した瓦は、17世紀後半～18世紀前半が主体と考えられる。丸瓦は長さ約23cm、幅約13cm、厚さ約2cmで小型で薄手である。内面には布痕と斜め方向の切り離し痕(コピキA・B)や縄目痕が明瞭に残る(コピキAは類似するものもあるが、典型的なものとは言いがたい)。玉縁長もやや長く、内面の縁辺部の面取りを斜めにする(断面三角形状)特徴が見られる。

また、I～III層でも17世紀後半～18世紀前半の瓦も混在しており、346のような細線の向上三葉文をもつ軒平瓦等は長崎県長崎春公跡出土のものと同様に類似しており、長崎瓦の可能性もある。長崎瓦の編年観では17世紀後半に相当する。同じ特徴をもつ瓦は、鹿児島城本丸(瓦分類D-005、鹿原塚等2020)でも出土している。

そのほか、陶器瓦の出土量が多いことも本遺跡の特徴である。完形はないが、平・丸瓦、軒丸瓦が確認された。平・丸瓦には釉薬が施軸されており、釉尻がハート形に施軸される(194や238)いわゆる田之浦窯の陶器瓦がある。軒丸瓦には瓦当に草花文をもつ壹平窯のものと考えられる。陶器瓦は隣接する名山遺跡や鹿児島城(本丸・二之丸・御殿跡)などでも出土している。

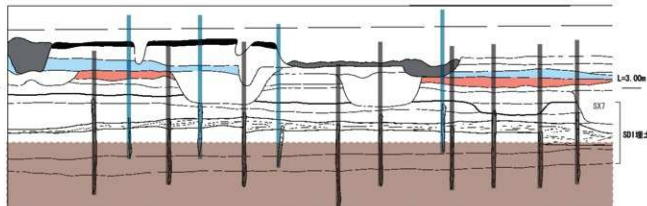
鹿児島城内における瓦の変遷は、鹿児島城(本丸)と、その他の鹿児島城内(垂水・宮之城島津家屋敷跡や名山遺跡、演武館など)の瓦は概ね同じ変遷を辿ると考えられるが、瓦が付随する建物の役割などに差異があるため考慮する必要があり、変遷については今後の課題である。

しかしながら、本遺跡の成果は17世紀後半という比較的古手の瓦が出土していることから、瓦の変遷を考える重要な成果であると考えられる。

第3節 犬追物馬場

1 馬場の規模

寛文10(1670)年「薩摩御城下絵図」や「常信筆薩摩



杭長さ190cm(六尺五寸)、地上高さ130cm(四尺五寸)と想定
 (『犬追物御覽記』正保四(1647)年参考)

第61図 SD1杭列復元推定図

御城下ノ景」,『見聞秘記付図』では、犬追物馬場を囲う杭の表現がみられる。犬追物の馬場の規模は、流派や規模によって異なったようだが、正保4(1674)年の光久の王子原の張行では、北に棧敷を構え、東西42間×南北40間(76m×73m)の馬場を設けている(『犬追物御覽記』)。

また、後世のものになるが島津家の犬追物故実をまとめた『松平豊後守齊宣家伝来犬追物太概』(高古集成館所蔵)では、馬場は「堅40丈(弦を外した弓の長さを一丈とする)(80m)、横42丈(92.4m)、長に棧敷を構、是を堅と言、其所に丈し間定る故実あり」と記されている(松尾1988)。

鹿児島城御樓門前の敷地では、「常信薩摩藩御城下ノ景」では御樓門前に橋前から櫓があり、「見聞秘記付図」では本丸と二之丸境の堀を境(現検察庁・名山小学校の境)の北側に櫓が描かれている。寛文10年「薩摩御城下絵図」ではやや二之丸前寄りの敷地に櫓が描かれているが、当時の地割では、その敷地には侍屋敷(喜入氏他屋敷)があった区画であり、本来は北側の区画に犬追物馬場があったと想定される。

以上のことから、鹿児島城前の犬追物馬場の規模は幅約70mに近く、縦も同様の長さのあった可能性が高く、約70m四方の馬場があった可能性が高いと考えられる。

2 馬場の櫓

犬追物馬場を巡らす櫓は竹垣に囲まれ、3か所の明戸(射手や犬の出入口)が設けられた。竹垣は杭列の間を埋めるように囲っている。

櫓の高さは『犬追物御覽記』によれば、「均高四尺五寸(高さ1.3m)、杭の長さ六尺五寸(1.9m)、横一尺五寸(50cm)」と記されている。

VI層で検出された杭列は、杭間が約50cm、太さが約5cmで、先端が欠損していたため全長は不明だが、最も良好に残存していた77は110cmあったことから、全長はよ

り長かったと想定され、『犬追物御覽記』に記された規格と概ね一致する。

杭は数本を除き、ほぼ同じ高さに打ち込まれており、杭の長さを1.9mと仮定すると、杭頭は標高約3.6mの高さになる。杭の地表高さが1.3mに統一されていたとすると、当時の地表面は標高2.2mの高さにあったと考えられる。また、それより打ち込まれた高さが高い4本(水色)は修繕等で打ち込み直したものと推測される。

出土した杭は六角形に面取りしてあり、建材等の杭とは異なり、装飾性があり、非常に視覚性が高い。明らかに魅せるための杭であり、犬追物の馬場の櫓として利用されていたと推測できる。

本来であれば、馬場の櫓は杭の間に竹垣をするが、竹垣自体は出土していないため詳細は不明だが、SD1の埋土内には竹片も多く出土していることから、竹垣があった可能性も考えられる。

3 馬場の期間

前述した調査成果と文献との対応から、杭列が犬追物の馬場の櫓であった可能性が高いと考えられる。

競技上、馬場内には中央に二重の円(大縄・小縄)が設置される以外は何もない状態が通常であり、VI層面で柱穴以外の遺構は確認されていない状況は、馬場の本来の状況と一致する。なお、遺物の出土も調査区南側からの出土は少なく、大半は北側の出土であった。このことから、VI層は硬質で締まった層であり、調査区南側が何もない状況から、馬場の整地層であったと考えられる。

この馬場がどの段階で設置されたかは不明だが、寛文10(1670)年の絵図には「犬追物馬場」が描かれていることから、それ以前には馬場が設置されていた可能性が高いと推測される。

『見聞秘記』でも「御犬垣」と記された二之丸前の地割・屋敷配置図に「慶長年間より正徳之始まで此所に有之」とあり、慶長年間にも家久が張行を催していること

から、慶長～元禄年間まで、馬場が設置されていた可能性が考えられる。

その上のV層面からは遺構が全面に検出された。V層も硬く締まった層で造成面であると考えられる。溝状遺構(SD2・3)や不明遺構(SX1～12)等は、整地層を掘りこんでいる。それらの遺構内遺物は17世紀後半～18世紀前半のもので、鹿骨等も出土している。鹿骨は下顎骨や肩甲骨などもあるが、脚の骨が多い傾向にあり、おそらく犬の骨であった可能性も考えられる。

馬場の整地層であったV層面が、馬場としての役割を持たなくなった後、人為的に遺構が作られた可能性が高い。犬追物馬場の張行も寛久以降は頻度が減り、元和元(1681)年10月に綱貫の張行を最後に行われなくなる。馬場としての利用が無くなった時期とV層の時期は概ね一致する。V層は元禄の大火(1696)の処理層(IV層)にバックされているため、その年代はおおよそ正徳3(1713)年の明地設置までの期間に収まると考えられる。

なお、Ⅲ層の砂層は犬追物馬場用に敷かれた砂と考えられることもできるが、安永4(1775)に演武館で犬追物が催されるまで行われておらず、馬場として利用した痕跡については調査・文献からは確認できなかった。

このことから、V・VI層は犬追物馬場の整地層であり、遺構・遺物や文献などから、おそらく慶長年間の鹿児島城の築城プランでは本丸前の地割に犬追物馬場を設置することが組み込まれていたと考えられる。

屋形の前に馬場を設置するのは、中世城館の在り方であり、近世期の城郭でも本丸前に犬追物馬場を設置する城郭は鹿児島城しかない。そもそも犬追物を近世期にも継続させているのは薩摩藩しかないため、鹿児島城が中世の伝統を色濃く引き継いだ近世城郭であったことが、この犬追物馬場の設置から読み解くことができる。

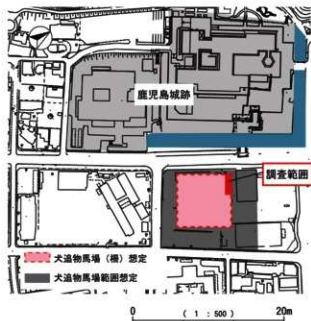
第3節 明地(火除地)

1 明地の設置

前述した調査成果と文献との対応から、IV層が元禄の大火の処理層の可能性を示した。元禄の大火による被災状況は大きく、元禄9(1696)年5月には石垣の築直し、楼門の新築、塀、橋の作事が許されている。

宝永4(1707)年には、鹿児島(鶴丸)本丸再建工事終了し、御座所を御下屋敷より本丸へ移している。約10年かけて、修繕作業を行っているが、本丸・二之丸前の敷地は、屋敷群が大きな被害を受けたため、正徳3(1713)年には、二之丸前の下屋敷(現中央公園から一名山小学校)が火除けのため、家来屋敷の建て直しの願いにより、火除のための明地となった。

犬追物馬場も明地となっており、正徳3年以降は絵図などにも「犬追物馬場」の記載はなく、空白または明地という記載がみられることから、降地の旧下屋敷路同様に、土地の役割としては火除地であったと考えられる。



第62図 遺跡残存範囲図

2 明地の利用—火除地・下馬所・下乗所—

正徳3(1713)年以降、本丸前の明地は火除地として機能することになるが、当初火除地として設定された二之丸前の旧下屋敷の明地は、聖堂・講堂・医学院・造士館・演武館の創設により再開発が行われ、火除地としての役割を持たなくなり、本丸前の明地がその機能をもつ敷地となった。

絵図等には明地のほかに下馬所・下乗所と記されており、「府城南面屋形前之圖」「西隆輿帖」では建物等がない草地となっている。明地の状態で、下馬所・下乗所として利用されていたことがわかり、Ⅲ層で遺構等が確認されなかったことから、鹿児島城存城期は、恒常的な建物を建てない土地として意図的に利用されていたことが窺える。

第4節 遺跡の残存状況

鹿児島城(犬追物馬場・火除地)は、鹿児島城内の本丸正面という良好な立地に位置している。本報告書の成果から、犬追物馬場と考えられる横列が確認されたことで、馬場の広さ等が推測可能となった。また、近世の包含層が4面確認されたことで、元禄の大火の処理層や鹿児島城築城以前の中世層の残存等、層位的に非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

この重層的な成果は、鹿児島城内の変遷や土地利用等を考える上で重要な成果であるといえよう。

調査範囲は狭狭であったが、その周辺は良好な状態で残存している可能性が高く、鹿児島城内であることを十分に考慮し、今後取り扱いに十分注意する必要がある。

写真図版



① 遺跡全景（写真中心が調査区・手前が鹿児島城御櫓門） ② 遺跡全景（奥が鹿児島城跡・城山） ③ 調査区1 II層検出近代・近現代建物基礎
 ④ 調査区1 II層検出近代建物基礎（凝灰岩地盤） ⑤ 調査区2 II層検出近代・近現代建物基礎



① 調査区1 IV層遺構様出状況 ② 調査区2 IV層遺構様出状況 ③ SO2様出状況 ④ SK1埋土断面 ⑤ SX7埋土断面 ⑥ SX3埋土断面
⑦ SX4埋土断面 ⑧ SX8埋土断面



① SX6 剖面 (西) 出土状况 ② SK2 瓦板出土状况 ③ 調査区2 IV層瓦葺2検出状況 ④ 調査区1 IV層遺構完部状況 ⑤ 調査区1 V層遺構検出状況
 ⑥ 調査区2 V層遺構検出状況 ⑦ SD1木板出土状况 ⑧ SD1検出状況



①·②SD1 木片出土状况 ③SD1 铜盒状况 ④SD1 埋土内下駄出土状况 ⑤SD1 埋土内丸瓦出土状况 ⑥·⑦SD1 木杭列出土状况



①SD1木桩列·木柱 出土状况 ②SD1埋土断面 ③调查区2 V层通横断面状况 ④P1木柱出土状况 ⑤P2木柱出土状况 ⑥P4木柱出土状况
⑦P7木柱出土状况 ⑧土層断面 (北壁)



①調査区1 土層断面(北・東壁) ②調査区1 土層断面(東・南壁) ③調査区2 土層断面(西・南壁) ④調査区2 土層断面(北壁)
⑤～⑧Ⅶ層検出木杭列



283



184



29



251



291



216



215



293



33



135



136



177



137



296



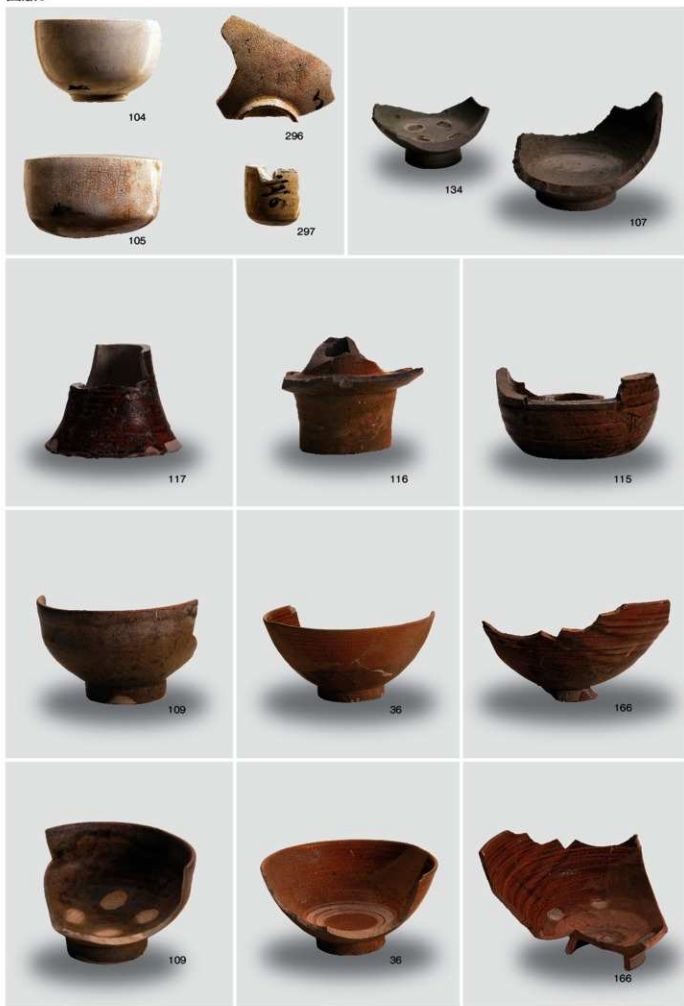
177

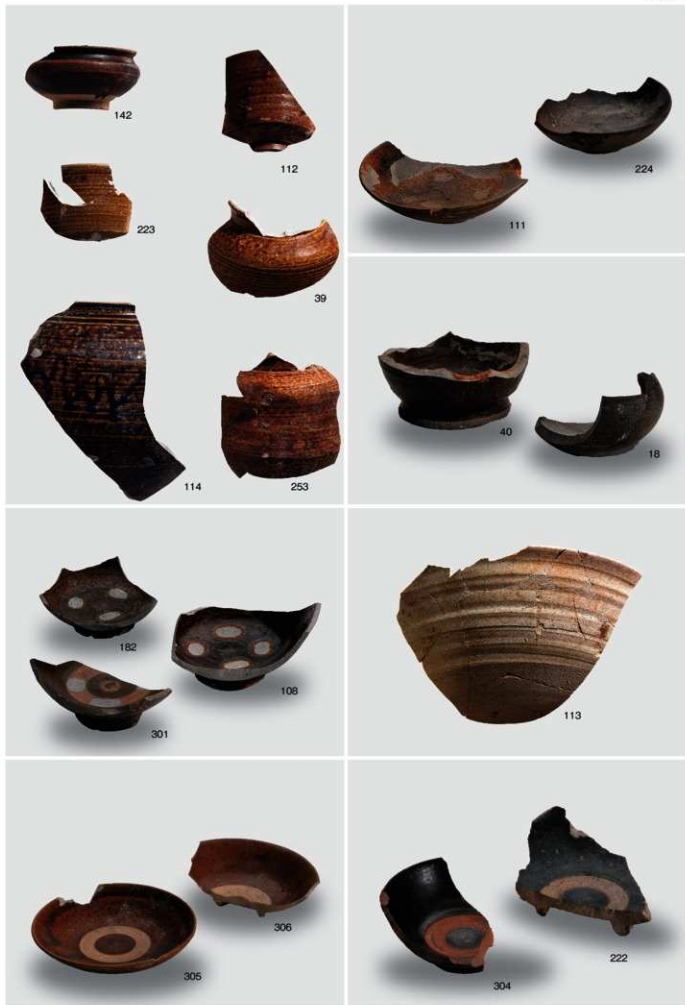


31



176







51



175



43



42



167



43



48



46



208



207



278



276



275



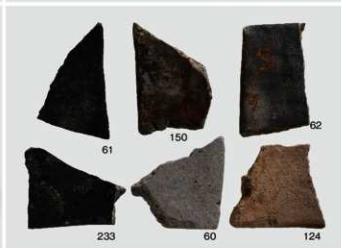
1



252



277











82



85



84



83



86



88



89



87



S01出土



155



80



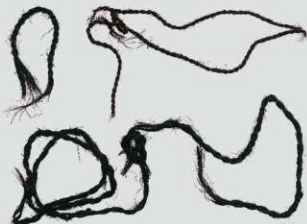
81



79



78



瓦溝1出土

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（211）
鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）

発行年月日 2021年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811

印刷 株式会社 トライ社
〒892-0834
鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815 FAX 099-225-7933